

# 体育心理学専門分科会 50 年記念誌

「体育心理学専門分科会 50 年の回顧、そして今後の展望」

社団法人 日本体育学会 体育心理学専門分科会



# 目 次

まえがき	体育心理学専門分科会会長 中込四朗	1
体育心理学専門分科会 50 年記念誌に寄せて	日本体育学会会長 山西哲郎	2
体育心理学専門分科会 50 年記念誌に寄せて	体育心理学専門分科会前会長 猪俣公宏	3
<b>第 1 章 体育心理学専門分科会 50 年記念誌に寄せて</b>		<b>7</b>
呉 萬福, 丹羽劬昭, 小橋川久光, 松井匡治, 倉島武徳, 藤善尚憲, 豊田一成, 徳永幹雄, 調枝孝治, 吉本俊明, 賀川昌明, 工藤孝幾, 吉田 茂, 阿江美恵子, 東山明子, 遠藤俊郎, 筒井清次郎, 蓑内 豊, 森 司朗, 土屋裕睦		
<b>第 2 章 体育心理学専門分科会と共に</b>		
1. 体育心理学専門分科会 黎明期の息吹 (鷹野健次)		21
2. 体育心理学専門分科会の黎明期 体育心理学専門分科会の設立 (杉原 隆)		22
3. 日本の体育心理学の牽引者、松田岩男という人 (猪俣公宏)		24
4. 体育心理学専門分科会揺籃期の意気込み (末利 博, 中川 孝)		27
5. 体育心理専門分科会誌「曲がり角」の時代 (船越正康)		31
6. 体育心理学専門分科会・変革期「曲がり角」のまがりかど (柏原健三, 太田鐵男)		34
7. 体育心理学専門分科会の研究の変遷 (菅生貴之, 手塚洋介, 安田友紀)		37
1) シンポジウムテーマの推移		
2) 会員数の推移		
3) 発表演題数の推移		
4) 学会賞・奨励賞の推移 (橋本公雄)		
8. 役員・事務局の変遷 (菅生貴之, 手塚洋介, 安田友紀)		42
1) 役員一覧		
2) 事務局の推移		
東京教育大学 (杉原 隆), 日本体育大学 (西條修光), 大阪教育大学 (船越正康), 順天堂大学 (中島宣行), 早稲田大学 (山崎勝男), 九州大学 (徳永幹雄), 筑波大学 (中込四郎), 名古屋大学 (西田 保), 東海大学, 大阪体育大学 (荒木雅信)		

### 第3章 体育心理学専門分科会の現状

1. 近年の体育心理学専門分科会の組織と活動（石井源信） 61
2. 研究領域と研究内容について 62  
スポーツ動機づけ研究会の活動（西田 保），  
スポーツ社会心理学研究会の活動（杉山佳生），  
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会の活動（高妻容一），  
運動学習研究会の活動（山本裕二），  
臨床スポーツ心理学研究会の活動（鈴木 壯）
3. 体育心理学と SMT 資格制度について（土屋裕睦・磯貝浩久） 68

### 第4章 体育学としての体育心理学の学問的位置づけと、これからの体育心理学

1. 25年までの成果と課題（和田 尚，鷹野健次） 73
2. 50年までの成果と課題（橋本公雄，伊藤豊彦） 76
3. 「体育心理学」テキストからみた体育心理学研究の位置（石井源信） 81
4. イメージトレーニングの意味論（勝部篤美） 85

### 第5章 今後の展望

1. 若手研究者の人材育成について（中込四郎） 91
2. 国際的な研究の動向からの展望について（関矢寛史） 93
3. 体育心理学専門分科会とスポーツ心理学会とのすみ分けについて（猪俣公宏） 94
4. 現場の要請に応える体育心理学  
理論をフィールドに，フィールドから理論を（岡澤祥訓） 96

### あとがき

50年誌編集委員会委員長 荒木雅信 99

## まえがき

体育心理学専門分科会会長  
中込四郎（筑波大学）

体育心理学専門分科会 50 年記念誌発刊の時に、専門分科会会長の任を仰せつかり、また記念誌の「まえがき」を執筆できることを光栄に思っております。同時に、これまで本会の発展に対してご尽力いただいた諸先輩をはじめ会員の皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げますとともに、当時の貴重な思い出や思いを、そしてこれからの私たちの歩みに対する提言を本誌に寄稿していただきましたことに厚くお礼申し上げます。

記念誌の発刊は、過去を懐かしく振り返るといった消極的な意味を持つだけでなく、これまでの日本における体育心理学研究の軌跡を記し、今後のさらなる体育心理学の発展にとって道標となる有益な資料を後進に伝えるといった積極的な意味があると考えます。特に、体育心理学、スポーツ心理学、運動心理学、健康運動心理学、他、研究領域の分化が目覚ましい現況にあっては、これまでの軌跡を踏まえておくことが、時代に即した体育心理学の独自性を追求していく上で重要となるからです。

専門分科会設立から 50 年が経過したということは、体育心理学が 50 年前に日本体育学会における体育学研究の一研究領域としてアイデンティティを得た事でもありと受け止められます。他の研究領域との厳密な比較には無理がありますが、会員登録数、学会大会での研究発表、論文掲載件数、関連専門書の出版等のいずれをとってみても、他と何ら劣ることなく、私たちの専門分科会が着実に発展をとげていると言えます。このことは、私自身が学部・大学院で体育心理学を学び始めた頃と、立場を変えて指導するようになった現在とを比較しても、種々の面での充実を実感いたします。

さらに外に目を転じてみると、本専門分科会の親学会である日本体育学会は、社団法人として位置づけられ、以前よりも社会的責務が多く求められるようになりました。また、スポーツの価値や社会的役割の重要性が高まり、それに呼応するように、本年の 6 月には、「スポーツ基本法」が制定されました。基本法で謳われている内容を熟知しているわけではありませんが、このような動きは、その社会的要請に応えるべく、私たちの研究にも影響を与えるに違いありません。とはいえ、体育心理学研究がこのような動きに雷同するようになってしまうならば、それは私たちのこれまでの動きを後退させる結果を招くことも考えねばなりません。その意味で体育・スポーツ現場の課題について様々な水準から、なおかつ研究者自身の持ち味や独自性を大切にしながら、これからも研究を積み重ねていくことに変わりはないと思います。

最後になってしまいましたが、50 年誌編纂委員会委員長として本記念誌の企画・発刊におきましては、理事長の荒木雅信氏（大阪体育大学）に、そして原稿依頼や編集作業にご協力いただきました安田友紀氏（大阪体育大学）に深く感謝申し上げます。本誌が会員の手もとに届き、一読され、そして研究活動への様々な思いを喚起することを願っています。

体育心理学専門分科会 50 年記念誌によせて

日本体育学会長  
山西哲郎

半世紀にわたる体育心理学専門分科会の学問史を日本体育学会員一同とともに心からお喜び申し上げます。日本体育学会が昨年、60周年を迎えたのですが、それに近い50年の長い年数を重ねた体育心理専門分科会の歩みは、学会発足当時から三つの専門分科会の一つとして、我が国の体育・スポーツ科学の発展に中心的に貢献されてきたことであると大いに感謝するものです。

体が動き始めると、体以上に心が多様に動きだし、やがて、体と心が一緒に心地よくなっていく。そして、自己の五感で風や光を知ると、それが体と心にとってどのような現象なのか知りたくなり、感性から科学的な探索を求める。私が1963年から大学で体育学を専門に学び始めた時、「体育心理学」の授業がその学問的出会いの場となってそれを学ぶことができました。松田岩男先生や鈴木清先生たちからの知の伝達は、運動やスポーツの実践に自己変革が生まれ、私の目前で展開された東京オリンピックのプレイにも科学的見地を持てるようになったのです。

体育心理学専門分科会は、年々、体育学研究の掲載が全体の20パーセント近くを占め、研究発表も他の専門分科会から目標となるほどの充実をしてきました。その学問的成長の一端の現れは1973年の日本スポーツ心理学会の設立であり、それは各専門分科会における独立学会の創立のリーダー的存在でもありました。

しかし、多くの独立学会の設立は体育・スポーツ科学の細分化によって本来の総合的学問的自立と学問力を弱めることとなり、拡大するスポーツ界、変動する人間社会の身体運動を正しく把握してより人間らしく生きるための学問になりえなくなってきました。

このたびの東日本大震災での受難体験で蓄積する否定的心労体験は、現代のうつ状況と同様、その問題解決を迫られています。スポーツの本来の意義は気晴らしであると知れば体と心一緒に動かし生きる力が生まれるように、われらの学問は各専門分野の学際的連携からその本質に戻り、真なるエビデンスを社会に提供できると思われます。

杉原 隆先生は「近年になって学問的根拠に基づいて実践への応用が行われる段階に入ってきた」（日本体育学会60年記念誌）と述べられている言葉は、体育心理学専門分科会が今後の日本体育学会がめざす総合的学問への機構改革の先導的立場になられるであろうと期待しています。

体育心理学専門分科会 前会長  
猪俣公宏 (中京大学)

1913 年 5 月スイスのローザンヌにおいてクーベルタン (Coubertin) の提唱で開かれたスポーツ心理学をテーマにした国際会議、1920 年ドイツのベルリンにおいて Werner Schulte によって開設されたドイツ体育大学心理学研究室 (Deutsche Hochschule für Leibesübungen)、また 1924 年に開設された、我が国における松井三雄の体育研究所心理学研究室などいわゆる“体育・スポーツ心理学の夜明け”の時代から 1 世紀が経過し、今年はまだ体育心理学専門分科会が発足して 50 年の節目を迎えている。小生にとっても、学生時代に体育スポーツ心理学に出会ってからこの分科会とともに 50 年の道のりをともに歩んできたという思いがある。ここでは体育・スポーツ心理学の歴史をふりかえって、“温故知新”の視座から若干の私見をのべてみたい。

小生は 2001 年から 1 年間、ケルンのドイツ体育大学心理学研究室内の客員教授として研究生生活を過ごす機会があたえられた。この間、いくつかのテーマの中で特にヨーロッパにおけるスポーツ心理学の歴史に関心を持った。それは我が国の体育・スポーツ心理学の父と言ってよい松井三雄先生が体育研究所心理学研究室内の開設に当たって当時ベルリンの近郊 Charlottenburg にあった体育大学 (戦後、ケルンに移設) に留学され、Wundt の弟子であった Werner Schulte に出会い、心理学研究室内の研究や運営について多くの示唆を受けられたであろうと推察していたからである。Schulte は 1933 年 1 月に 35 歳の若さで亡くなっているが、この間、独自のアイディアによる競技心理的適性の測定法の開発、特に競技状況を直接取り上げた中での能力 (例えば、スタート時における反応時間の測定) の測定装置の開発、スポーツ心理学領域の体系化をめざした最初の体育心理学専門書 (例えば、Die psychologie der leibesübungen, 1928) 発行など大きな成果を残している。彼が残した業績で我々にとって特に重要な示唆は実験室ではなくフィールドで競技状況を直接取り上げられる測定法を開発した点である。今日、技術的な進歩で測定の可能性は精度、範囲とともに著しく拡大してきているが、競技状況の特質を考慮した独自の方法や装置については不十分な実情にあると言ってよいだろう。これからの研究の発展にとって、生態学的妥当性を持った研究の方法論に関わる開発は欠くべからざる条件であると言えよう。

もう一つ、ヨーロッパにおける体育・スポーツ心理学の歴史の中で、ここで特筆しておきたいことは近代オリンピックを提唱したクーベルタン男爵がスポーツの心理学的研究の必要性を説いていたことである (Coubertin, La Psychologie du Sport, 1900) 彼はオリンピック運動にとって心理学的視点からスポーツを文化現象として捉える事が重要であると考えていた。このことはスポーツを単に心理学的な研究の対象として捉えるだけではなく、スポーツが人間にとってどのような意味を持つのかといった哲学的な基盤を視点に持つことが重要であることを示唆して

いると言えよう。いままで我々はこのような視点をおろそかにしてきてはいないだろうか、われわれの立場からもっと体育、スポーツの持つ意味を問うことが必要ではないだろうか、50 年目の“曲がり角”に立って、小生は今、このようなことを考えている。

## 第1章 体育心理学専門分科会 50年記念誌に寄せて

編集委員会では、本章に「すべての会員の皆様に寄稿をお願いしたい」という気持ちをもちつつ、企画・編集を行ないました。しかし、現実には「すべての会員の皆様に」は不可能であり、今期の理事および他の章への寄稿をお願いした会員を除いて、年齢と性別・地域を考慮して、編集委員会の独断で30名の会員に寄稿をお願いしました。そして、20名の会員の方々から、原稿を頂きました。それらの原稿から、体育心理学専門分科会のこれまでの活動の一端を垣間みることができます。同時に、将来を考えることも出来ると思います。ただ、大先輩方はご高齢であり、ご健康の理由でご寄稿頂けなかったことは残念です。



呉 萬福（国立台北教育大学名誉教授）

早いもので 1960 年 9 月 1 日からまる一年当時の国立東京教育大学体育学部への公費研究生として鈴木清、小林晃夫、松田岩男、柏原健三、近藤充夫等諸先生方のご指導を受け、台湾に戻りまして教壇に立ち、体育指導に日本で学んだ理論と技法を生かし、学生の教育に全力を挙げて参りましてから半世紀余りも経ちました。

その間、生涯学習の大切さを身に感じ、日本体育学会第 36 回から正式会員として入会し、今年(62 回)で 27 年経ちました。その間、毎年正式会員として参加し、10 数編の論文を発表させて頂き、大変勉強になりました。昭和 35~36 年頃から、約十数年間、掲載されましたグループ学習、子供主体の体育学習の研究成果が今でもハッキリと頭に残っております。

特にまる一年間、小林晃夫先生から指導して頂いた U-K テスト、Y-G テスト、性格診断検査を使用し、学生たちの性格や精神健康などを調べ、授業に生かせることが出来、大変誇りに思っており、周囲の同僚からも認められております。

27 年前に正式会員として日本体育学会に参加して参りましたが、年もとるにつれて体育学の各分野で大変素晴らしい学問的成果を挙げられたと痛感しております。体育・スポーツ心理学分野に於いてもスポーツ参加の動機づけ、目標設定、ライフスキルとの関係、身体（運動）活動とスポーツ、運動の学習と制御、熟練者のスキル、競技力向上と心理的サポート、特にメンタルトレーニング、性格と競技等特色んな領域に手を入れ、間断ない探究に全力を挙げ、それを実践に移している有り様に頭が下がります。今後、少しでも余力がありましたならスポーツと老人(高齢者)に関係について研究を進めることが出来ればと希望しております。

齢八十を超しましたが、心と体の健康保持のため、これからも毎年学会へ出席できるよう努力致したいと考えております。

末筆に日本体育学会体育心理学専門分科会の益々の発展をお祈りしますと同時に、体育心理学専門分科会の諸先生方の御健康をお祈りして筆をおかせて頂きます。

50 年間の回顧—新しい研究法の紹介から

丹羽劭昭(奈良女子大学名誉教授)

分科会発足 50 周年を迎え感慨無量です。この間、私が関わった新しい研究法の導入について紹介し、時代の変化を感じていただけたらと考え、ペンをとりました。

一つは一般にソシオメトリーと呼んでいる方法です。私が大学 3 年の時(1953 年)指導教授の松井三雄教授から J.L. Moreno 著の“Who Shall Survive?” という分厚い本を渡され、Sociometry についてまとめるように言われた。一か月位かかって読み、図表入りのレポートを提出したところ、二か月後の「体育の科学」に一部を紹介して下さいました。その中のソシオメトリックテストやソシオグラムが集団内の人間関係や集団の状態分析の一つの有力な手段として、研究や教育現場でよく用いられるようになった。モレノは人間を理解するため表層から深層までを五層に分け、独自の理論と測定法を提案したが、日本では“簡便さ”もあって第二の層を理解するこの方法が集団分析の重要な方法として一般化していった。

次に今重要な統計的手法となった重回帰分析について。1978 年体育学研究に「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の分析」が掲載された。それまでの要因分析では単要因に基づく説明が主であったが、多要因間の関連を考慮した解析には無理があった。そこで重回帰分析の一種である「段階的群残差回帰方式」を採用した。工学系の論文に新しく発表されたこの方法は、当時の体育学会では未知

の方法であったため、計算式を詳しく述べ方法論的妥当性を論証し、それをスポーツ参加を規定する要因の検定に用いた。パソコンのない時代、パンチカード式の当時の京都大学の大型計算機を用いて完成した研究である。今日では優れた回帰分析法が開発され、パッケージを用いてパソコンで簡単に計算できる。50 年間の変化は驚くばかりである。

研究は卓越したアイデアを優れた研究方法で検証することが基本である。今後の発展を切望してやみません。

## 体育心理学専門分科会 50 年記念に寄せて

小橋川久光（琉球大学名誉教授）

体育心理学専門分科会 50 周年記念おめでとうございます。

このような節目の年に、投稿する機会を与えて下さった専門分科会に心から感謝申し上げます。

私の手元にある最も古い「曲り角」は、昭和 45 年 6 月号が残っております。この当時の琉球大学は、まだ琉球政府立大学の頃の今の首里城跡にありました。当時、体育学心理学に限らず多くの分野で専門の教員が少なく、先生方は内地研修に出かけて研鑽をつんだり、招聘教授をお呼びしたりして勉強したものです。体育心理学では、松田岩男先生と柏原健三先生のお二人がいらして琉球大学に新風を吹き込んでおられます。

この 50 年の間に「曲がり角」も 1989 年から「体育心理学専門分科会会報」と名前を変え、その第 1 号のシンポジウムは「体育学習における動機づけのあり方」を取り上げておりました。このようなシンポジウムは、教員養成を目指す大学の教員にとって、体育心理学の新たな情報として大いに役立つものでした。その間、世界の心理学も大きく変貌をとげ、例えば“ポジティブ心理学”の誕生をみたり、動機づけ理論やフロー理論も新たな展

開を示しております。そのような展開に対して体育心理学専門分科会でも日本体育学会第 57 回大会のシンポジウムで“ポジティブサイコロジ”を取り上げ対応してきております。

体育心理学は教育という看板を背負っている学問であると思いますので、分科会を通して敏速に情報の提供をすると同時に、特に教育現場に役立つ、そのような役割を担いうる分科会であり続けてほしいと思います。そのために“体育科教育学”専門分科会などの協同でのシンポジウムの開催を今後ともお願いしたい。

日本体育学会体育心理学専門分科会のさらなる発展を心からお祈りいたします。

## 本専門分科会での思い出と今後の期待

松井匡治（仙台大学名誉教授）

大学の学部・院生時とも教育心理学を専攻したが、1967 年 4 月の開学当初の仙台大学体育学部で、体育心理学を担当し始めたことが契機となり、体育学や体育心理学に深く関わることになる。以来 2009 年 3 月末まで 42 年間、日本体育学会と体育心理学専門分科会に所属、斯界の優れた研究者との交わりを通して、理論や研究法等の研鑽を積む機会が与えられ、感謝している昨今である。

体育心理学専門分科会では、特に「キーノートレクチャー」と「シンポジウム」への参加が楽しみで、特別なテーマについての講演を聞いたり、同じテーマについて議論を交わしたりで、専門性をより一層深めることができた。特に、ふだん会う機会の少ない一流のスポーツ選手や指導者が演者として招聘されたときは、授業、トレーニングやコーチング等に役立たせようと目を輝かせて聞き入ったものである。また、分科会会報の「曲がり角」は、各支部や各研究会活動の状況を知るうえで大いに役立った。

体育心理学の独自性という見地からこの分

野の研究発表を概観すると、私見だが、日本スポーツ心理学会の発表テーマとかなり重複する面があると感じる。“体育”を身体活動を通しての心身両面におよぶ人間形成の場という視点からとらえ直し、体育実践の場に役立つ応用科学の立場でテーマ設定する必要があるものとする。

さらに、広く社会的役割を果たすという見地から提言してみよう。本年、3月11日の東日本大震災では、わが古里の宮城県南三陸町を始め、東日本の広い地域にわたって甚大な被害を受けた。震災後半年を過ぎた現今でも、PTSD（心的外傷後ストレス障害）など心のケアを必要とする状況に置かれている。今後、臨床心理学的な立場からの研究アプローチも強く望まれる。

## 体育心理学専門分科会 50 年記念誌に寄せて

倉島武徳（元札幌大学）

私が大学に所属したのは 1967 年のことでした。それまでは高等学校で教師をしていましたが、故あって大学に転出しました。勤務していた高等学校では研究紀要を発行したり、高等学校教育研究会などを主宰したりと多少学究的なところでした。その様なことから大学に転出して「さて、何を研究しようか」という段になり、躊躇なく学生時代に勉強した体育心理学をメインにしようと思いを固めました。

しかし如何せん本格的な体育心理学の勉強に入るには、当時の北海道には専門的な研究をされている方がおられませんでした。ですから何の手がかりもなかったのも、日本体育学会に所属し体育心理学専門分科会にも参加し、お世話になりました。ここで数々の研究テーマや研究方法の勉強や手がかりを掴み、少しずつ自分なりの勉強ができるようになってきました。その頃は松田岩男先生、杉原 隆さん、船越正康さんなどに良くご教示いただきました。またその後、北海道では中込四朗

さんがその道を切り開いてくれました。

近年、北海道では体育心理学、スポーツ心理学分野の若い研究者が増えてきて立派な成果をあげておられます。1972 年「札幌冬季オリンピック」当時は、残念ながら選手のメンタルサポートに関しては、北海道の研究者としては誰も貢献できなかったことに対して、現在は冬季スポーツを中心にメンタルサポートの実績を残しています。40 年前を省みずと隔世の感があります。

体育心理学専門分科会 50 周年という歴史の中で、私は何の貢献もできませんでしたが、多くの方々が着々と成果をあげられて、今や体育界・スポーツ界になくはない存在に発展されたことを心からお慶び申し上げます。

## 50 年記念誌に寄せて

藤善尚憲（天理大学名誉教授）

私は、1960（昭和 35）年に西日本・関西で最初の「体育学部」が設置された天理大学に体育心理学の担当として赴任した。その当時、奈良女子大学におられた鷹野健次先生のご指導を受けながら、手作りの実験装置でタイミングや反応時間の研究をご一緒にさせていただいたことが思い出される。期せずして、1961（昭和 36）年に「体育心理学専門分科会」が設立され、それ以前に加入していた「体育心理学研究会」のメンバーからスライドして入会することとなった。

しばらくして、1967（昭和 42）年に日本体育学会第 18 回大会が大阪大学で開催されるにあたり、事務局からそのシンポジウムの企画に関西の体育心理学の研究メンバーでという依頼があり、末利 博、鷹野健次、森脇勤、柏原健三、の緒先生方と若輩の私で検討するということがあった。その大会も無事終了し反省会を持った折に、この機会に関西で体育心理学の研究会を持つては、という話題

になり、早選手分けして呼びかけた。そして間もなく、森脇先生を事務局に近畿大学の大会館をお借りして、隔月（年5・6回）を目安に研究発表と討論会や懇親会を開くことになり、「関西体育心理学研究会」の発足となったのである。

発足後しばらくして、若手研究者を中心に「共同研究」の話題が持ち上がり、早速検討した結果「スポーツ・スペクティター（ファン）の心理」を研究しようということになり、私が研究代表者になり「1989年（平成元年）度水野スポーツ振興会助成金」を得た。この成果はスポーツ科学専門誌等にもとりあげられ、注目を集めたことは懐かしい思い出である。

その後は、専門分科会から選出されて日本体育学会評議員になったり、専門分科会ではシンポジウムの司会や演者として、2003（平成15）年大学を退職し日本体育学会を退会するまで、自分の研究以外にも多くのことにかかわらせていただき、この専門分科会から受けた恩恵は計り知れないものがある。今後のこの会のますますの発展を祈念するものである。

## 体育心理学専門分科会 50周年に思う

豊田一成（聖泉大学）

体育心理専門分科会が50周年と聞き感慨ひとしおである。自分自身も50年とは言わないまでもそれになんなんとするほどこの世界に身を置いてきた。その間、国立大学の教員養成学部から私立のスポーツ大学、そして今は私立大学の人間心理学科に席をおいているが「体育心理」という名称でスタートした広義のスポーツ心理学をじっと見つめながらの人生であったような気がする。教育心理学の一分野的位置づけの体育心理学は、大筋肉活動という特殊な命題を有することから保健体育教科への心理学的アプローチとして独立の

道を歩みだした。さらにその後、人間の運動行動全般に網をかけた運動心理学を基盤とした心理的課題に迫らんとするスポーツ心理学が確立されたのは誠に明快であった。このことによって人間の生命現象全般に対する心理学的アプローチというまさに人類の発展に寄与する重大な課題を背負う学問分野としての地位を確保したといえるのではなかろうか。この発展過程には多くの斯界先達の真摯な尽力がみられる。その結果大きなうねりと共に分化と統合を繰り返しつつ今日の見事な学問分野としての確立がなされたのである。そして現在、なお明るい展望とともに次世代に継承されつつあることは頼もしい限りだし、心から発展を期待してやまない。

## 体育心理学専門分科会 50年記念誌に寄せて

徳永幹雄（福岡医療福祉大学）

今は亡き早稲田大学の上田雅夫先生から、酒を飲みながら分科会の引継ぎを頼まれたのが、そもそもの始まりでした。九州地区が事務局を担当するのは初めてでしたので、その後の4年間は体育心理学専門分科会の大先輩たちはもちろん、他の分科会の世話人など多くの研究者と親しくして貰った。苦労は多かったけど、大変有意義な期間だったと感謝しています。始めてポスター発表を企画した時、パネル代は自前でやってくれと言われ途方にくれたこと、プレセミナー・懇親会の企画、会報の充実、会則の制定など、思い出は沢山です。いつも橋本公雄先生（九州大）や磯貝浩久先生（九工大）などが傍らにおられたのでやってこれたと感謝しています。

この間も、元気だった頃の上田先生には福岡中洲の飲み屋に呼んで頂き、酒を飲んだことを懐かしく思い出します。もし、上田先生の誘いがなかったら、専門分科会の事務局を担当しなかったら、私共の学会活動も変わっていたのではないかと思います。50周年の中

で多くの先輩に支えられた自分が、今は多くの後輩に恩返ししなければいけない。研究だけでなく、不思議な縁が 50 周年には詰まっている。

## 「無限定な研究対象への取り組み」

### 調枝孝治（広島大学名誉教授）

私は 1966 年～2005 年まで、体育心理学専門分科会で毎年発表をさせていただきました。この間、常に念頭にあったことは体育心理学の心理的な研究対象は大変複雑で無限定なものであるということです。今後の期待を込めて無限定 (indefinite) な研究対象と拘束条件 (constraint) について書きます。無限定の例として最も手におえないものは運勢占いです。私は射手座の 12 月生まれですが、私の本日の運勢は、「混乱気味。会話がぎこちなくても気にせず」だそうです。なんとという無限定さ。who, what, where, when, how などの規定が厳密でない不確定なご宣託など誰が納得しますか。その他の無限定な研究対象例としては、気象予報や地震予知、生命の誕生と進化、人の性格や動機の変動性、学習能力の予測、投票行動、株価予測などがあります。これらの無限定な研究対象は、限定的な研究対象の特性である厳密な定義や実験、再現性、反証可能性などが困難なため、ミクロなデータ事象は未知でもマクロなシステムの関係全体を統計的な確率を用いて限定しています。他方、限定的科学の代表的な研究対象は物理学、化学、工学です。これらの研究分野から産出された法則や知見は、実験室でも社会生活でも有効に機能します。ここで、限定科学から無限定科学の研究分野を研究課題の複雑性の程度で配列すると、物理学、化学、工学、気象学、地質学、生物学、心理学、教育学、社会学、政治・経済学になります。

さて、無限定な体育心理学は、多変数を含む自由度の大きい複雑系であるため仮説は

次々と修正され、見いだされた事実も常に変容していく性質を内在させています。そのため、何年たっても「体育心理学の現状と課題」が叫ばれ、最近の学会発表の内容は各研究者の自由な発想から多様な発表が「気楽に」行われています。

このような現状と課題に取り組む場合、無限定な研究対象に拘束条件を決定し厳密に定義しないと無限定システムになります。拘束条件には外部と内部の拘束条件があります。外部拘束条件は、研究システムをとりまく外部環境要因で、実験や調査の目的、実験装置や調査項目とそれらの手続き、行動結果、それに競技ではルールなどです。他方、内部拘束条件は、競技者自身の外部拘束条件の理解や戦術や戦略のスキルの習得レベルなどの「先行理解」が内部拘束の役割を果たします。さらに、熟練者になると内部拘束条件を自己生成するようになると考えられています。多自由度系の運動遂行中に競技者自身が「関節の自由度の減少」という内部拘束条件を自己生成して最適な制御力を発揮する。最適化とは、目的関数を拘束条件のもとで最小（または最大）にするという限定科学の定義です。体育心理学は無限定だからこそ、逆に自由な着想と行動の可能性があります。どうか、研究は素人（先入観のない自由人）の発想で、やるときはプロ（情報過剰、先入観あり、自分の得意分野に拘泥し、狭い具体的な拘束条件の中で厳密に）として行ってください。

## 体育心理学専門分科会 50 年記念誌に寄せて

### 吉本俊明（日本大学）

原稿依頼があつて躊躇したのは、私自身が日本体育学会に初めて参加した時が同志社大学で行われた第 14 回大会であり、当然体育心理学専門分科会の活動も 10 数年が経っているはずだと考えたからである。しかしなぜ 50 周年記念かを確認してみると、日本体育学会

の会員が増し、支部や専門分科会の設置が総会で話題になったのは大阪大学における第 10 回大会（昭和 34 年）の時、実際に体育心理学専門分科会としてのシンポジウムが行われたのは、名古屋大学における第 12 回大会（昭和 36 年）の時であることがわかった。もっとも、私が初めて参加した同志社大学の時は、翌日に発表を控えていたにも関わらず会場受付で参加申し込みが認められており、組織が確立される過程であったことがうかがえる。

大学院生として初めての学会大会参加であり、自分自身の発表のことで頭がいっぱいで、発表がどのような位置づけにあったかも理解していなかった。しかし改めて見直してみると、松井三雄先生をはじめとする日本大学の先生方とともに、東京教育大学豊田章先生、松田岩男先生、順天堂大学太田哲男先生、早稲田大学道明弘章先生が共同研究者に名を連ねる「スポーツ適性に関する研究」の一連の発表の一つであることを知り、発表時の自覚のなさにちょっと落ち込む感じがあった。それとともに、その共同研究を通して日本大学以外の先生方に接し、アドバイスをいただける機会が持てたことは、非常に幸せだったといえる。

自分自身の発表以上に興味深いのは、専門分科会が企画するシンポジウムである。同志社大学で行われた体育心理学専門分科会のテーマは、3 年間にわたって続けられてきた「スポーツマンの性格特性」であった。体育スポーツに関する心理学的研究の中では、指導の現場と結びつく中心的な課題の一つといえ、今日に至るまで必ず取り上げられてきている。そのときの司会は松田岩男先生であり、近藤充夫先生が U-K 法による研究の立場、杉本功介先生が Y-G 性格検査による研究の立場、そして平田久雄先生が MMPI による研究の立場からの話題提供であった。当時の自分にとってはいずれの話題も興味深かったが、スポーツ選手に共通した特性はないこと、同じ種目に同じ人柄のそのスポーツを好む人が集まる傾向があることとともに、スポーツを行うこ

とによってある性格が作られるのではなく、そのスポーツを続けていくうちにその特徴が強化されると考えられるという点は非常に印象的であり、今でも性格特性を取り上げるときには、その考え方が根底になっている。

性格検査一つを取り上げても、スポーツ選手を対象とした多くの検査が開発される時代になったが、それらの検査がスポーツ指導の現場にいかにも有効に生かされるかが、絶えず検証されなければならないのではないかと考えている。

## 体育心理学専門分科会と私

### 賀川昌明（鳴門教育大学）

昭和 46 年 11 月、私は日本体育大学で開催された第 22 回日本体育学会に初めて参加した。当時は大学院 1 年生であり、初めて触れる学会の雰囲気には圧倒されたことしか憶えていない。そして、初めて発表したのは昭和 48 年 10 月、中京大学で開催された第 24 回大会のときである。この頃はお茶の水女子大学附属中・高等学校に勤めており、修士論文として取り組んだ「強さの認知と勝敗に対する態度の変化について—チームゲームに関して—」という題目で発表した。これが私が体育心理学専門分科会と関わる第 1 歩である。

その後、共同研究の成果も含めて体育心理学専門分科会で発表する機会が何回かあったが、それほど熱心な分科会会員ではなかったと反省している。というのも、当時は自分の関心が体育授業やスポーツ指導等、実践的な課題に集中し、いわゆる実験室的な研究手法と臨床的・事例的研究手法のギャップに抵抗を感じていたからである。その結果、研究発表も段々と体育心理学専門分科会から体育科教育学専門分科会へ移ることとなった。しかし、最近では再び体育心理学専門分科会で発表する機会も多くなっている。これは自分の仕事が県体協からの要請による競技スポーツ

選手の心理的サポート中心になったこともあるが、前述のギャップに対する抵抗感が薄れてきたことにもよる。すなわち、それだけ体育心理学専門分科会における発表に実践的視点からの研究が増えてきたからだ勝手に解釈している。基礎的・理論的研究の重要性は言うまでもないが、少なくとも「体育心理学専門分科会」へ行けば体育授業やスポーツ活動の実践に関わる心理的課題について有益な情報が得られると言われるようになってほしいものである。

体育心理学専門分科会 50 周年記念を迎えるこの年、私は奇しくも大学教員生活の最終段階を迎えることになる。体育心理学専門分科会の今後益々の発展を祈念したい。

## 私が実験計画にこだわるわけ

### 工藤孝幾（福島大学人間発達文化学類）

私が専門分科会に所属したのは、大学院入学の 1973 年であり、学会デビューは大学院 2 年目の 1974 年、東工大で開催された日本体育学会第 25 回大会である。その時の極度の緊張を今でも忘れない。なぜなら、前日の発表で、当時は横浜国大におられた調枝先生が厳しい質問をして、発表者が立ち往生している光景を目撃してしまったからである。さらに困ったことに、どういうわけか生理学の渡辺俊男先生（横浜国大）が調枝先生の横に座って、二人で厳しい質問を浴びせるのである。お二人とも、学生時代から、専門書の著者として存じあげており、私にとってはサインをちょうだいしたいような有名人である。そのようなお二人を前に初めての学会発表をする事を想像しただけで心臓が破裂しそうであった。私の修論の指導教官である杉原先生（東京教育大）に弱音を吐くと、「顔に似合わず気が小さいな」と笑って軽くいなされてしまった。

発表当日、渡辺先生はご欠席で調枝先生からの質問も無く、無難に学会デビューを果た

すことができた。この話には後日談がある。しかも二つも。一つ目は、次の月の「体育の科学」に掲載された調子先生の学会参加記の文章の中に、私の研究に対して「実験計画がしっかりしていて継続的問題意識が感じられる」というコメントが載っていたのである。杉原先生に実験計画の基本をたたき込んで頂いた賜物であると感謝している。

杉原先生と調枝先生には、その後もいろいろとご指導いただいた。渡辺先生とは、分科会が異なるのでその後お会いする機会がなかったが、5 年くらい前だろうか、シベリア抑留の日本人兵士とルーマニア人兵士の友情を綴った物語「望郷」(NHK)の最後で先生のお姿に接することになる。なんとその日本人兵士こそ渡辺先生その人であった。これがもう一つの後日談である。

専門分科会とのつきあいは、40 年近くに及ぶが、その記憶の始まりに 3 人の先生とのエピソードがある。私が今でも実験計画にこだわるのは、このときの記憶のせいである。

## 「できるまでやる」

### 吉田 茂（筑波大学）

定年が近くなりいろいろ整理していたら、30 年ほど前の懐かしい「実験室心得」など 3 種のコピーが出てきました。今でも自戒の効があるようです。

「実験室心得」は、「整理・整頓・清掃・清潔」、「禁酒・禁煙・(×禁) 勤勉」、「質のよいデータを求める」、「仕事はできる (×だけ) までやる」というものです (「×」部分は二重消線です)。なかなかできないことを掲げるのが「心得」ですので、よっぽどひどかったのでありましょう。当時は夜中まで、なにやらワイワイゴソゴソとやっていたのを思い出します。パソコン (PC98) で実験制御やデータ処理をするため、アセンブラーや C 言語 (当時は高価な Lattice C) などを楽しんでいま



会会場ではわけも分からず指導教官について回り、他の発表を聞いたりシンポジウムに参加したりするうちに、その時々自分に必要な内容のものを自分で選択して参加できるようになっていきました。

特に印象的だったのは日本体育学会第 43 回大会の体育心理学専門分科会企画シンポジウム「スポーツを通しての環境教育の可能性を探る—体育心理学の新たなパラダイム—」でした。「体育心理」にとどまらず広く様々な分野に関係する内容であり、会場は他分野からも多数聴きに來られていて満杯でした。それまで大学や教育現場という狭い世界の中だけで生きていた私にとって、外の世界に目を向けるきっかけともなり、その後の私の生き方に影響を与えてくれたと思っています。もちろん体育心理専門分科会の様々なレクチャーやシンポジウムでも私なりに成長させていただきました。

今後も、体育心理学の専門的な部分を深く掘り下げる内容から、広く他分野へと連なっていく柔軟な内容との両方を扱っていただき、広い視野を育む機会を与えてくれる場となることを期待しています。

## 体育心理学専門分科会 50 年記念誌に寄せて

遠藤俊郎（大東文化大学）

体育心理学専門分科会が 50 周年を迎えるにあたり、その半世紀にもわたる熱心な分科会活動に関わった関係者の方々から敬意を表するとともに筆者の体育専門分科会における拙い思い出等を披露してお祝いに代えさせて頂きたい。

思い起こせば、日本体育学会体育心理学専門分科会において初めて発表を行ったのは 1979 年、筆者が大学院 2 年生の時金沢大学で開催された第 30 回大会であった。内容は至らぬものであったと思うが、「バレーボールの戦績に関与する心理的要因の分析」というテー

マは今でも記録してあった。今でこそ学会等の細分化が進み、数多くの専門研究分野別の学会が設立されており、研究発表の場が多く提供されているが、当時は、体育心理学に関しては日本体育学会における本分科会が唯一の発表の場であり、その意味では体育専門分科会で発表するということが当時の体育心理学を志向する若手研究者にとっては一つの目標であり、その準備にも力が入ったものだった。また、発表は口頭によるもののみであり、学会の都度名立たる先生方が登壇されている中で大学院生による発表は数える位しかなかったと記憶している。したがって、いくら事前の予行演習をしても、どんな鋭い質問が飛んで来るかとビクビクしていた発表の際のあの緊張感は相当なものだった。翻って近年多くの大学院生が堂々と発表している様子を見るにつけ、プレゼンテーションツールの向上もさることながら場馴れした対応に頼もしさとともに時代の変わり様を感じさせられている。よく言えば初々しかった自身の大学院時代の学会発表が懐かしく思うようになったのは筆者も齢を重ねた証拠であろう。

体育心理学専門分科会のこれまでの半世紀が分科会活動の黎明期から充実期だとすると、これから目指す半世紀はさらなる発展期になるのか、もしくは転換期になるのかは多くの若手体育・スポーツ心理学研究者の双肩に依存しよう。しかし、最近体育心理学専門分科会における口頭発表が減少傾向にあることは気になるところである。今後体育・スポーツ心理学を志向する大学院生等の積極的なチャレンジを期待している。

## 体育心理学専門分科会 50 年記念誌に寄せて

筒井清次郎（愛知教育大学）

体育心理学専門分科会に初めて参加したのは、大学院 1 年の東京大学（1982 年）での体育学会でした。シンポジウムのテーマは、運動学習研究の問題点のような内容であったと記憶しています。指導教員の加賀先生からは、当時の運動学習の最新鋭の研究者が発表するから、聴きに行くようにと言われました。参加したものの、話されている内容の半分も理解できず、さすがに最新鋭の研究者の研究は、自分たちとはレベルが違うなあ、とその差を痛感させられた記憶があります。

また、その 4 年後に体育学会の座長に指名された時には、当時 26 歳だったこともあり、まともな運営ができるか不安で、もしフロアーから質問がなかったらどんな質問をしようかと、何日も思案した記憶があります。

そういう経験を経て、今があるわけですが、振り返って感じるのは、体育心理学専門分科会の先生方の温かさです。たとえば、学会発表の質疑で、こてんぱんに言われた時もありましたが、その発表直後、その先生から、「問題点はあるけれども、非常におもしろい研究だから、これからを期待しているよ」と声をかけられて、この先生に納得してもらえようという研究をしようと強く思ったものです。このように、後輩たちへの愛情がこもった、かつ、厳しい質疑を通して、育てていただいたという思いがあります。

年齢と共に、立場も変わってきて、私たちが、愛情がこもった、かつ、厳しい質疑を通して、若い発表者の刺激になれば良いな、とこの原稿を書きながら考えています。

体育心理学専門分科会 50 年記念誌に寄せて  
「四半世紀の思いで」

養内 豊（北星学園大学）

私が初めて日本体育学会の体育心理専門分科会に参加したのは、1986 年に筑波大学で行われた第 37 回大会でした。当時、私は大学院の 1 年生で、わけもわからないままでの学会運営のお手伝いでした。発表会場のタイムキーパーを務めたとき、司会の先生から堂々としたベルの鳴らし方がよかったと、なぜか褒められたことを今でも覚えています。振り返ってみるとそれから四半世紀が経っており、そのことに自分が一番驚いております。

次に参加したのがその 2 年後、1988 年に福島大学で行われた第 39 回大会でした。このときは修士論文の一部について口頭発表を行いました。当時はまだまだ若者が発表するような雰囲気ではなく、また、私にとっても初めての学会発表でかなり緊張したことを覚えています。パワーポイントもない時代でしたので、配布資料や発表原稿作りを当日の朝まで行っていました。そしてドキドキしながらの発表。しかし準備した原稿量が多すぎたのか、ほとんど研究目的の部分しか話していないのに予鈴が 1 回。その後あわてて話したのですが、結果や考察は十分に話せないまま、尻切れ状態で初めての学会発表を終えました。私の苦い学会発表デビューの出来事です。

さて、体育心理学専門分科会は 50 周年を迎えたということを伺い、あらためて先輩の先生方のご功績に感謝いたします。私が知っている約 25 年間でも、一時発表演題数が減少した時期もありました。しかし、最近では大学院生を中心とした若手研究者の発表が増え、会も活発化しているように思います。体育心理学の関係者が増えることは個人的にもうれしいことですが、その一方でいまだにライバル心も抱いていますので、若い研究者に負けないように自分の研究活動も進めていきたいと思っております。

## 本専門分科会での思い出

森 司朗（鹿屋体育大学）

私が初めて本学会に参加したのは、今から26年前、大学院の修士課程1年生の時、第36回の岐阜大学で行われた大会でした。初めて学会会場に足を踏み入れたとき、最初に驚いたのは学部時代に読んできた書物の著者の方たちの発表を直接聞け、発表会場のいろいろなところで著名な先生方を見ることができるといことで、これが学会なのかなと興奮したことを覚えています。翌年、初めて学会で発表を筑波大学で開かれた第37回で行いました。当時は、ポスター発表はなく、発表はすべて口頭発表で発表会場の大教室の中、多くの先生方を前に今みたいにパワーポイントなどではなく印刷した発表資料をもとに、顔を上げることなく、発表原稿を夢中で読むのが精一杯でした。そのような私の不十分な発表に関して、数名の先生方が質問をしてくださいました。緊張して、先生方の質問に対して的確な答えにはなっていなかったと今でも思っていますが、発表後、不思議な満足感みたいなものを感じた思い出があります。発表後でも先生方が廊下などで気軽に発表した内容に関して質問や意見をしていただけました。この経験は自分の研究を自分なりに深めるとともに、学会で発表することの意義を教えていただいたような気がします。それ以後の発表の中でもこのような経験をすることができ、その結果、発表だけのために学会に行くわけではありませんが、学会に行くなら発表しようという意識は常に持つようになっています。最近の学会会場においても、以前私が経験させていただいたような若手の先生方の発表に関して多くの先生方から忌憚のないご意見が多く出る様子をよく目にします。このことは、若手の研究者育成に関して本専門分科会が重要な機能を果たしており、これまでの学会の歩みが、多くの研究者を育ててきたことを示しているのだと思います。

## 体育心理学専門分科会 50 年に寄せて — 飲水思源 —

土屋裕睦（大阪体育大学）

体育心理学専門分科会 50 周年と一口に言うが、筆者は47歳。修士論文を市村操一教授に、博士論文では中込四郎教授に指導を受けた体育心理学の、いわば第三世代である。50周年に寄せて原稿執筆の機会を得たのは大変光栄ではあるが、なんだかおこがましきの方が先にたつ。何しろ、はじめて自分の研究を発表したのが平成元年（1989年）横浜国立大学における第40回大会であり、体育学会との関わりもようやく20年を越えたところである。この分科会には、筆者が知るよりもさらに倍の歴史がある。

第三世代の仕事は何か。まずは継承だろう。そのためには、とりわけ第一世代の業績を知らなければならない。1996年筑波大学助手を辞して大阪体育大学講師に転出した折、大阪体育大学を定年退官された鷹野健次先生から親しくお話をうかがえたのは、今思えば運命に近かった。鷹野先生は1953年まで東京教育大学にお勤めで体育心理学研究室の大先輩でもあるが、まさに孫に接するかのよう、体育心理学研究のあるべき姿を語っていらっした。開拓者の心意気と同時にその困難の一端も知ることができ、「飲水思源」（井戸の水を飲む時は掘った人の恩を忘れない）の気持ちを強くしたことを覚えている。

この開拓者精神は、第二世代に引き継がれ、体育心理学は科学的知識に裏づけられた重要な学問へと発展した。運動学習、動機づけや有能感に関する研究は体育心理学のみならず、体育学全体の中核をなす理論へと展開した。それぞれの専門性が高まると同時に、さらにその深みを目指してさまざまな研究会が発足した。たとえば体育心理学専門分科会会報には、運動学習研究会、メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会、臨床スポーツ心理研究会、スポーツ社会心理学研究会、スポ

一ツ動機づけ研究会のような様々な研究会の活動が紹介されている。

このような細分化された現状にあって第三世代のもう 1 つの役割は統合であろう。それぞれの専門性を高めつつ、それを体育心理学専門分科会としてどのように統合していくか。本分科会における研究は、その対象だけでなく分析の視点や方法も、さらには価値観（人生哲学）までもが違う。したがって、安易な統合ではなく、それぞれの特徴を十分に活かすような方法を探らなければならない。体育学は実学であるから、おそらくそれぞれから得られた知見が、「体育」の現場にどのように貢献できるか、と言う点においてこそ、本分科会の統合、すなわち知の統合が可能になると思われる。

実は、第一世代がすでに機関紙「曲がり角」において、体育学会における「分化と統合」の問題を指摘している。「曲がり角」はちょうど筆者が学会発表をした平成元年から体育心理学専門分科会会報へと衣替えをした。第一世代は曲がり角の先に何を期待していたのだろうか。この 50 周年の機会に、改めて「曲がり角」を読んでみる必要があるようだ。道のりは遠いが、「飲水思源」を胸に、これからの 20 年、この問題に取り組んでみたいと考えている。

## 第2章 体育心理学専門分科会と共に

本章では、体育心理学がわが国の「体育学」の先駆的役割を果たしつつ、日本体育学会の発展と共に歩んできた50年を繙くことを念頭において編集した。

体育心理学の「黎明期」での先達の熱い息遣いや、「揺籃期」の意気込み、「曲り角」と表された「変革期」への新たな挑戦などは、シンポジウムのテーマ、会員数、発表演題数、学会賞・奨励賞受賞の推移と、当時の事務局の様子などに端的に現れていると思います。

体育心理学研究の一貫した底流を、体育心理学を志す学生や若い研究者に伝わればと思います。



## 1. 体育心理学専門分科会 黎明期の息吹

### 鷹野健次

平成 23 年 11 月 28 日付の「日本体育学会 体育心理学専門分科会 50 年記念誌」編集委員会「原稿送付のお願い」拝受しました。12 月 10 日までにと督促状ですが、只今発見した次第です。何故そうなったかの言い訳は後にして、兎もかく記憶と印象にあることを書きます。

私は、昭和 22 年 9 月に東京文理科大学文学部教育学科心理学専攻を卒業して、東京体育専門学校（昭和 16 年 5 月 15 日開校の東京高等体育学校）に赴任しました。昭和 24 年には新制大学が発足するので、その直前に当たりますので、日本体育学会がどのようにして出来ていったかは、ぢかに触れて織っているのですが、そのことは、加藤橋夫先生が、「体育の科学」に精しく書かれて居ります。

「体育の科学」は、学会発足後 10 年毎に回顧と発展を記録しておりますね。私は体育心理分科会の最初のキーノートレクチャーのときに、そのことを述べましたが、その際に荒木君が、骨折って揃えて呉れた、松井三雄先生とわが国の体育心理学の発展の過程に関する資料がたくさん溜まっており、それを整理しなければいけないとかねてから念頭を離れませんでした。ところが前立腺（H12）・胃（H17；全摘）を患い忘却してしまいました。

今回の件で、そのことを思い起し、捜し出して少々当たってみると案外コピー等の記録が残って居るのに驚きました。

①日本体育学会の設立準備委員会が岸体育館で行なわれたとき、東大は加藤橋夫先生が中心ですが、新しい学会が発足しても、既設の学会の有名学者に会員に入って貰わなければ、誰も信用しないだろう。その理由から、社会学の林慧海先生、生理学の福田邦三先生等々が名を並べる訳ですが、岸体育館での準備委員会は、直接に体育担当関係の教授連で、東京体専（東京体育専門学

校）では本間先生、松井先生、東京学芸大学では森 清先生が記憶に残っています。昭和 24 年頃ではなかったかと思うのですが、東大の水野忠文先生と東京教育大助手の私が、入口のところで中の会議が終わるまでじっと待っていたのを思い出します。このようにして具体的準備が進められました。

②私の手許に「体育の科学」の創刊号がありますが、編集委員を見れば往時の熱血漢の顔やら、表面には出ない底辺を支えられた先生（久松栄一郎）や「他の医学書で儲けさせていただいているから、体育の科学は出血覚悟の上だ」といわれた太田杏林社長等のことが思い出されます。

③創刊号に石山脩平先生が日本教育学会の発展の過程から推量して、体育学の発足構想を考えると、このようになるのではないかと講演をされ、それが載っていますが、私はぢかに拝聴しました。“Gegenstand”という言葉が何度も出て来たのが印象的でした。今読み返して見るとまことに真摯な「体育的現実」が発原点であることを強調しておるのですね。

体育心理学の始まりは、体育研究所の設置（1924 年；大正 13 年）に遡ることが出来ます。[鷹野先生は「大正 13 年という年は忘れて行けない。」と何度も話されました（編集委）]そして、松井三雄先生による体育心理学の体系化によって、その基礎が確立されたといつて良いと思います。松井先生の著書である「體育心理学」（目黒書房、昭和 5 年）に学問的な基本構想が示されています。そして、その底流にある思想は「体育の現実を理想的に進行させてゆくための心理学の貢献」という立場であり、後の「体育心理学」（杏林書院、昭和 27 年；初版、昭和 37 年；改訂版）の出版で完成をみました。

体育学会の創設にあたって、大谷先生は東京体育専門学校や東京高等師範学校体育科の出身者だけで体育研究組織を作ると体育は狭

い分野に固まってしまう懸念をもたれていました。そこで、当時、日本体育学会の設立に尽力されていた加藤橋夫先生に、「大学教育に体育が成果として取り上げられて、大学に体育研究の教員が配置されたので、東京大学が中心になって体育学会の創設の準備をすることが必要とである」と提案されたそうです。このことがきっかけとなって、周辺科学の多くの著名な学者の参加を可能にして、体育学研究の発展に大きな役割を果たしたのです。加藤橋夫先生は、「体育の科学(1979年12月号)」で、「大谷武一先生の見先の明」と称賛されています。このような、布石があって体育心理学は、松井三雄先生を中心にして、その基礎を築いて、現在に発展をみることになった訳です。

また、私は第44回日本体育学会「体育心理学キーノートレクチャー」において、「分科会30年の活動を顧みて将来を考える」と題して話しましたが、とても納得できる内容でなかったことが今でも悔やまれます。とはいえ、キーノートの中で、「体育研究の範囲の拡大と細分化の傾向について」松井三雄先生が「第19回大会」を例にして、つぎのように述べられていることを紹介しました。「体育研究の領域区分として分科会が並立しているが、これが即学問分野と言えず、仮に全部が学問分野による区分に統一されたとしても、それに併せて体育学とは言えまい。体育学の領域区分は体育学の構造から割り出されるのが本来の姿であろう」と言われ、さらに、「体育研究所時代には「体育学」の自覚はなかったが、今や、体育研究は体育学への曲り角に来ている」と述べられ、明日の体育学研究としてビックサイエンスの構想を提案されています。

#### 引用文献

松井三雄 体育心理学 杏林書院 体育の科学社, pp1-6, 1971.

加藤橋夫 「体育学と体育学会」加藤橋夫著作選集 第一巻, ベースボールマガジン社, pp.133-173, 1985.

#### [後記]

平成23年の年の瀬も押し詰まった頃、鷹野先生から2度お電話を頂きました。同時に、先生から2通にわたりお葉書を頂きました。内容は、白内障の手術後で、読み書きが当分出来ないで原稿「体育心理学専門分科会50年記念に寄せて」は、書けないとのことでした。正月明けに先生のお宅を訪ねました。

上記の文は、先生の作成途中の原稿とお話を頂いたことを筆記したものを基にして、小生が作成したものです。小生からしてみれば「神代」のことです。帰宅後、当時の資料と口述筆記を照らし合わせても、小生の能力では先生の日本体育学会および体育心理学専門分科会の発足当時のお気持ちを十分に表現できていません。何卒、ご容赦ください。

(文責 荒木雅信)

## 2. 体育心理学専門分科会の黎明期 体育心理学専門分科会の設立

杉原 隆 (十文字学園女子大学)

### 1. 設立の背景

体育心理学専門分科会が設立されたのは1961(昭和36)年で、日本体育学会が発足してから11年後のことである。発足当時から会則には「この会には専門分科会を置く」と規定されていたが、この年になって初めて体育心理学、運動生理学、キネシオロジー(後にバイオメカニクスと名称変更)の3つの専門分科会が設立されたのであった。現在15ある専門分科会の中で、本専門分科会が最初の3つの専門分科会の1つとして設立された背景には、それまでに長い研究の歴史があったこと、さらには、1958(昭和33)年に“体育心理学研究会”(会員62名)が発足していたことが大きく関係していると思われる。

運動に関する心理学的研究の起源は、世界で最初の心理学実験室をライプチヒ大学に創設したブントの反応時間研究に遡ることがで

きる。ライプチヒ大学に留学した松本亦太郎は帰国後、京都帝国大学に精神動作学研究室を開設した。松本亦太郎の門下生である松井三雄は1924（大正13）年に創設された国立体育研究所の心理学部で体育という視点から研究を開始し、1930（昭和5）年に著者「体育心理学」を目黒書店から出版した。また、同じく松本亦太郎の門下生であった田中寛一も運動に関する心理学的研究を精力的に行い、その弟子である鈴木清は松井三雄、松田岩男とともに体育心理学研究会の責任者としてその発足に中心的な役割を果たした。

1958（昭和33）年に発足した体育心理学研究会は翌年に会報『曲がり角』を発行している。それによると、「体育心理学研究会は去年の第9回体育学会において発足をみ、……」とあるが、申し合わせ事項には「この研究会は日本体育学会と無関係に発足する」と記されており、両者の関係が少し分かりにくくなっている。当時、日本体育学会のなかに研究会を作ることが憚られる何らかの理由があったのかもしれないが、その間の事情は詳らかでない。しかし、1963（昭和38）年に発行された『曲がり角 No. 8』には“日本体育学会・体育心理学専門分科会＝曲がり角”とあり、事実上、体育心理学研究会が本専門分科会の母体となったことに間違いはないと思われる。

## 2. 発足当時の状況

1959（昭和34）年に発行された『曲がり角』の第1号において、松井は、社会の複雑化によって生じる様々な問題の根本的解決は教育によらなければ不可能であり、体育心理学はその教育に大きく貢献できる可能性を有することを指摘している。と同時に、「しかし、その体育は一定の原理に基づき、それぞれの事態に応じて合理的に処理されたものでなければ、目的を達成することができないばかりでなく、かえって有害にして悪意に満ちた活動に墮する恐れすらある。ここに体育心理学に対する大きな期待が生じてくるのである。」とも述べている。直面する具体的な問題は異な

るものの、松井のこの指摘はまさに現代にも通じるものである。ともすればわれわれは運動すれば常にある一定の望ましい効果があるものと考えて研究を進めがちである。しかし、運動は時には望ましい影響をやり方によっては有害とも言える否定的な影響を与える。最近でもまだ、ただ単に運動を経験したものとそうでないものを比較した研究が見られるが、運動の影響がどのようなメカニズムによって生じるのか、運動に含まれる心理的な経験の違いとの関係で研究を進める必要がある。専門分科会設立当時の初心忘るべからずである。

## 3. 運営組織

本専門分科会が発足した当初、事務局は東京教育大学体育心理学研究室に置かれ、松田岩男が代表を務め、数人の世話人で運営されていた。しかし、同校の閉校を契機に1977（昭和52）年に事務局は日本体育大学に移転し、この後事務局は持ち回りとなった。これまでに大阪教育大学、順天堂大学、早稲田大学、九州大学、筑波大学、名古屋大学、東海大学、大阪体育大学へと引き継がれてきている。

また、1955（平成7）年に会則制定され、代表と世話人によって運営されてきた制度が会員の選挙で選出された会長、理事による運営へと移行して現在に至っている。歴代の代表は松田岩男、長田一臣、柏原健三、太田哲男、上田雅夫であり、会長は徳永幹夫、杉原隆、猪俣公宏、中込四郎である。この間、本分科会会員の松井三雄、松田岩男が日本体育学会会長を、加賀秀夫、杉原隆が副会長を務めている。

## 4. 研究動向

本専門分科会の詳しい研究動向はこれまで何人かの研究者によって概観されている（杉原隆 体育心理学専門分科会の歩み『体育学研究』第50巻219～227参照）ので、詳しくはそれらを参照して欲しい。ここではごく大まかな流れについて触れておきたい。

体育学研究掲載論文数についてみると、発

足以来年とともに徐々に増加し、1960 年代後半には平均年間約 6 本、全掲載論文の約 20% を占めるようになる。その後、年に 2 ～ 10 本と年によってかなりの変動はあるものの、平均的には全掲載論文の約 20% 弱となっている。

学会大会の発表数は学会発足当時から順調に増加し、1970 (昭和 45) 年の第 21 回大会で 87 題とピークを迎える。その後は減少するが 1992 (平成 4) 年には 80 題と第 2 のピークを迎え、その後、40～50 題を維持し、全発表に対する割合は 2000 年代では 11% を超えている。

「個人発表」のほかに、第 5 ～ 10 回大会では「共同研究」が、11～13 回大会では「研究討論会」が、第 14 回大会 (1963＝昭和 38 年) からはシンポジウムが行われている。テーマとしては性格、運動学習、子どもの発達、集中力などが繰り返し取り上げられてきた。しかし、1980 年代後半からは毎年かなり異なったテーマを取り上げるようになる。この背景には、体育心理学の研究領域が広がり、それぞれの領域である程度研究が積み上げられてきたことを意味していると考えられる。このことは本専門分科会の会員が中心となって幾つかの研究会在が設立されていることから窺える (1990＝平成 2 年に運動学習研究会、1991＝平成 3 年に臨床スポーツ心理研究会、1998＝平成 10 年にスポーツ社会心理学研究会とスポーツ動作法研究会など)。

このような本専門分科会の発展に、1973 (昭和 48) 年の日本スポーツ心理学会の設立が関係していることを指摘しておかなければならない。設立当初は両会員の重複が 80% を超えていたが、その後両会とも会員数を大幅に増加させるとともに、会員の分離傾向を強め、2004 (平成 16) 年時点での会員の重複は約 60% に低下している。さらに、一時的に減少した学会発表や論文数もその後増加に転じている。

近年における体育・スポーツ心理学研究の蓄積と広がりには目覚ましいものがある。本専門分科会が発足した翌年、松井は体育心理

学の研究は始まったばかりで、体育に応用できるほど十分高い水準に達していないことを指摘している。しかし、近年になって、メンタルトレーニングやスポーツ臨床や健康運動心理学領域を中心に実践的な研究が増加し、学問的な根拠に基づいて実践への応用が行われる段階に入ってきたといえよう。



松井三雄先生



松田岩男先生



鈴木清先生

体育心理学専門分科会の設立に中心的な役割を果たした 3 人の先達

出典；日本体育学会 60 年記念誌 財団法人  
日本体育学会 体育心理専門分科会  
pp. 182-183.

### 3. 日本の体育心理学の牽引者、 松田岩男という人

#### 猪俣公宏 (中京大学)

本稿では特に筆者の学部、大学院生時代に受けたご指導、またその後の、日本体育協会、日本オリンピック委員会スポーツ医科学委員会心理班の研究、上越教育大学および中京大学における教育、研究、大学運営など 30 年にわたり、先生のおそばで経験させていただいたことを基盤にしながら、体育・スポーツ心理学の発展に寄与された松田岩男先生を紹介させていただくことにする。(本稿では、文中の敬語、敬称を省略することとした。)

#### 1. 松田岩男の生い立ちと陸上競技

1920 年兵庫県に生まれた。松田はよく島根県出身者として紹介されてきたがそれは誤りである。小学校 4 年まで兵庫県で育っている。当時は部落対抗の陸上競技の盛んなど

ころであったので、自分で作った走り高跳びのスタンドを夢中になって飛んだり、1里近くある遠方まで友達と一緒に走っては遊んだりして奔放で活発な少年時代を過ごしたと回想している。その後、島根県の浜田市に移り、小学校6年のときに選手として競技会に初めて出場し、400米継走で優勝した。卒業後、浜田中学に進学し本格的に陸上競技を始めた。当時の浜田中学は体操オリンピック選手竹本、上迫などを育てた学校で各種のスポーツが盛んに行われていた。また同じ島根県の出身であった吉岡隆徳などの活躍も松田にとっては一つの目標であったに違いない。しかし、一家の長男として家業の漁業を継ぐことを期待されて両親は松田の選手生活には反対であった。この中学時代の最高記録は100米11秒0、200米22秒6であった。さらに高等師範学校体育科では2年生のときに10秒8で全日本選手権において2位に入賞、4年生のときには全日本インカレの100米で優勝、神宮大会では吉岡隆徳について2位に入賞という成績を残している。それほど頑強でもなく、身体的にも恵まれていなかった本人がこのように学生選手として頂上を極めることができたのは練習法に独自の工夫をしたこと、また自己の内的世界の強化に努めたことであろうと後に本人自身が述懐している。

このような自身の競技経験は後に本人が体育・スポーツにおける心理学的な研究に打ち込んでいく強い動機になったと推察される。

## 2. 学校体育との関わり

松田岩男を語る時、学校体育は一つのキーワードとして上げられるだろう。20代後半における静岡青年師範学校教師時代の指導経験を通し、また雑誌「学校体育」の第1巻(昭和23年1月浅川正一編集)から編集スタッフの一員として参加し、戦後の新生学校体育発展における理論的牽引役として活躍している。特に、戦前の学校体育における体操中心から戦後のスポーツ中心への大きな変換に際し、教科体育におけるスポーツの位置づけや、そ

の考え方について、スポーツを「おとな」からではなく、「子供」から捉えなおすことが必要であるとし、この視座から体育授業の目的や方法また指導法の理論的枠組みの構築を行っている。これらの具体的な内容については主として雑誌「学校体育」に170余篇に及ぶ論説等として発表されている。後に「楽しい体育」として提案される考え方もこのような松田の学校体育に対する理念が反映されたものであるという評価もできよう。松田は教材としてのスポーツを手段としないで自己目的的活動、即ち活動そのものを楽しむ活動として取り入れ、子供に運動の楽しさを経験させ、生涯スポーツを視野におきながら運動に親しむ態度や能力を身につけさせることが体育学習の重要な課題の一つであると考えていた。

さらに、学校体育と体育科学との関係については体育科学の各領域で行われている研究がどれだけ実際の体育学習や指導の中に生かされているかという問題を常に念頭に置きながら両者の架け橋を模索していたことがうかがわれる。松田は「体育科学と体育の授業」

(昭和52年の論説)において一つの解決法として体育事象のような複雑な対象における問題を解決するには複雑なままで捉えるアプローチが必要であることを示唆している。これは最近のスポーツ心理学における質的研究法の興隆の流れをすでに予見していたものと考えられる。

## 3. スポーツ心理学との関わり

松田は青年期における自らの選手経験に基づき、競技力向上にとって持って生まれた才能や素質以上にさまざまな工夫が必要であり、とりわけスポーツ科学の重要性に着目していた。特に日本体育学会、日本オリンピック委員会のスポーツ医科学委員会において心理班の中心メンバーとして、長年、選手の心理的サポートやまたコーチ養成などのプログラム作りに関わっている。特に、1964年の東京オリンピック大会におけるあがりの対策班、さ

らには 1984 年のロスアンゼルスオリンピック大会の翌年に発足したメンタルマネジメントの研究プロジェクトなどにおいてわが国におけるメンタルマネジメントの研究や実践の基盤が作られたとあってよいだろう。ちなみにこのメンタルマネジメント研究プロジェクトは長野オリンピック大会まで実に 17 年間にわたって継続された。松田はその中で心理班の班長として TSMI (体協競技動機テスト) の開発、スポーツカウンセラー制度の確立、オリンピック代表選手に対する心理的サポートのシステム作りなどプロジェクト初期の基盤作りに大きな功績を残している。

筆者は上記のメンタルマネジメントの研究プロジェクトに班員として参加する機会を与えられ、数度にわたり海外調査に同行したがその真摯で物静かな態度、熱心な研究への関心により、言葉の壁を乗り越えて、多くの外国人研究者との交流を深めたという強い印象が残っている。

戦前、わが国の体育、スポーツ心理学はドイツ流の実験心理学や運動学の流れを汲んだアカデミックな学問として松井三雄によって確立された。そこでは「身体的最高能率を発揮するのに必要な条件を心理学的に研究するもの」としてスポーツ心理学が位置づけられている。これに対し、松田は「スポーツを人間の文化として捉え、それらの心理学的特質を明らかにするとともに、そのスポーツ活動の人間行動に対する影響などを研究しなければならない」としてスポーツ心理学のより広い概念を提唱し、研究領域の拡大とともに、より広範な人々を対象としたスポーツ心理学の実践をも目指している。このような考え方の延長線上には学校体育におけるスポーツの位置づけや科学的裏づけにつながるという思いがあったに違いない。

#### 4. おわりに

松田は学長をはじめとして大学教育の運営全体に関わる功績とともに、また専門の学会においても日本体育学会会長、日本スポーツ心理学会会長などを歴任し、学会の発展に尽

力した。このような松田の貢献には何よりもその温厚で誠実な人柄、若き日に培われた論理的な思考と洞察力が原動力になっていたと思われる。

平成 4 年、学長任期最後の年に米国マサチューセッツ大学ボストン校との学術交流協定が結ばれることになり、松田はその調印のためボストンを訪れた。しかし、この時、宿泊先のホテルで暴漢の凶弾に倒れるという不測な事態が起き、72 歳の生涯を閉じられたのである。(本稿は拙稿「松田岩男」体育の科学、57 巻、6 号、459-462, 2007. を一部改変したものである。)



写真 松田 岩男

表 1 松田岩男略歴

大正 9 年	
1 月 22 日	兵庫県に生まれる
昭和 16 年 3 月	東京高等師範学校体育科一部卒業
昭和 20 年 9 月	東京文理科大学教育学科心理学専攻卒業 東京高等師範学校助教授就任
昭和 25 年 7 月	東京高等師範学校教授就任
昭和 27 年 3 月	東京教育大学助教授就任
昭和 45 年 4 月	東京教育大学教授就任
昭和 48 年 1 月	東京教育大学体育学部長就任
10 月	筑波大学体育専門学群長就任
昭和 56 年 10 月	上越教育大学副学長就任
昭和 60 年 4 月	中京大学体育学部教授就任
6 月	国際スポーツ心理学会功労賞を受賞
昭和 63 年 4 月	中京大学学長就任
平成 4 年	
2 月 19 日	米国ボストンにおいて 72 歳で死去

出典：猪俣公宏 (2007) 体育の科学, 57(6)  
pp. 459-462

#### 4. 体育心理学専門分科会揺籃期の意気込み

##### (1) 体育心理学専門分科会発足当時の思い出

末利 博

日本体育学会は昭和 25 年 (1950) 2 月 11 日に誕生した。当学会発足当初とその後の推移は表 1 の如くである<sup>1)</sup>。江橋氏<sup>2)</sup>の報告によると、学会設立にあたって尽力された方々は大谷武一、東俊郎、加藤橋夫、松井三雄、森清、久松栄一郎、重田定正などで、学会発足当時の役員構成は、「理事長・大谷武一、庶務・加藤、会計・重田、編集・久松」の諸理事であった。50 年前のことであり、その方々は全員他界されているが筆者にとっては懐かしい諸先輩方である。表 1 によると 400 人足らずの会員で発足した学会は昭和 34 年

(1959) の 10 回当時には約 3 倍の 1309 人になるまでに発展している。会員の増加に伴い、研究領域の類似した会員が集って、それぞれの研究領域を中心に専門分科会を設置しようとする動きが生じた。

このような動きの先頭をきったのは運動生理学、キネシオロジー (今日のバイオメカニックス)、体育心理学研究者達であった。この動向に対処して学会は専門分科会設置内規を定め、昭和 36 年 (1961) に運動生理学、キネシオロジー、体育心理学の 3 専門分科会の設置を承認した。1960 年代のはじめに、体育社会学、体育史、体育原理、発育発達、体育管理、測定評価などの専門分科会が設置され、昭和 43 年 (1968) に体育方法の分科会が認められて 10 の専門分科会となった<sup>2)</sup>。今日ではさらに保健、体育科教育学、スポーツ人類学の分科会が加わり、13 の分科会構成になっている。日本体育学会の第 50 回記念大会：体

表 1 日本体育学会の推移

年度	正会員数	支部数	学会大会について				専門分科会など
			回	会場	発表部門	発表演題数	
昭和 25 年	356	2	1	東京大学(本郷)		51	
26	424	6	2	東京大学(本郷)		103	
27	594	10	3	東京大学(本郷)		149	
28	631	15	4	名古屋大学・名工大		173	
29	739	17	5	東京学芸大学		183	
30	1051	16	6	京都大学	11	231	
31	1276	21	7	中央大学	11	283	
32	1428	21	8	久留米大学	11	275	
33	1371	21	9	日本体育大学	11	299	
34	1309	21	10	大阪大学	11	364	
35	1428	22	11	早稲田大学	11	344	
36	1683	23	12	愛知県立文化会館	11	456	生理・キネ・心理分科会 3専門分科会発会
40	1627	26	16	北海道大学	11	445	9専門分科会
48	3252	30	24	中京大学	11	489	日本スポーツ心理学会発会
50	3777	30	26	天理大学	11	610	10専門分科会
60	5153	30	36	岐阜大学	12	806	
平成 9 年	6752	31	48	新潟大学	13	532	13専門分科会

註) 日本体育学会第 49 回大会プログラム (p.100) 掲載 (末利先生自筆の資料をもとに作成)

育・スポーツ関連学会連合大会の開催要項によると、この連合大会への参加学術団体に 33 団体が列記されており、体育学関連の多くの研究団体（学会）が多彩に開花している<sup>5)</sup>。体育心理学領域では昨年 25 周年を迎え、会員も 300 人の中規模の学会に成長し、心理学会ジャンルの一分野を形成するまでになっている。

ところで、体育心理学専門分科会発足の母体であったと思われる研究団体に体育心理学研究会があったことを忘れてはならない、この研究会は昭和 33 年（1958）に発足し、次の 59 年から会報「曲り角」を発行している。同コピーは思い出のためにその第 1 号の 1 頁をコピーしたものである。この 1 号の 4 頁に体育心理学研究会の発足の経緯が次の如く記されている。すなわち、「体育心理学研究会は昨年の第 9 回体育学会において発足をみ、その運営は全て東京在住者に一任することになった。そのために 12 月 13 日に松井、太田、柏原、藤田、稲垣、渡辺、安部、杉本の諸氏が参集し、懇談の結果、次のことを申し合わせた。1) この研究会は日本体育学会と無関係に発足する。……4) 研究会の責任者ならびに連絡所は次のとおりとする。〈責任者〉松井三雄（日本大学）、鈴木清（東京教育大学）、松田岩男（東京教育大学）、〈連絡所〉日本大学文理学部、体育学研究室。」その申し合わせ事項の第 1 項にこの研究会は日本体育学会と無関係に発足すると記されているが、曲り角は後述の如く日本体育学会心理学専門分科会の会報となっている。

曲り角の No.1（1959）から No.7（1963）までは“体育心理学研究会—曲り角—”の表題になっているが、No.8（1963. 11）は“日本体育学会・体育心理学専門分科会＝曲り角”となり、専門分科会の会報の形態となり、昭和 42 年（1967）から再び“体育心理学専門分科会会報”として専門分科会が続行し、“曲り角”の名称が削除されている。曲り角についての説明がやや冗漫になったが、それは体育心理学専門分科会発足初期の経過について

の貴重な記録である。1960 年代当初の曲り角から注目すべきイベントを拾い上げてみよう、その No.1 の 2～3 頁に 62 名人の全会員の名簿が掲載されており、可成り幅広い専門領域の人たちの名前がみられる。またその 4 頁の“シグナル”の頁に曲り角の表題名について「本誌の名付け親は松井先生で巻頭の言葉にありますように、今の体育心理学は一つの“曲り角”にきている。（P30 左参照）……」と記述され、当時の松井三雄教授の存在の大きかったことがうかがわれる。曲り角の No.2（1959. 9）には、当時の曲り角の編集責任者であった杉本功介氏が“体育心理学の歩み”の記述の中で日本体育学会大会での発表演題数と心理学的なものの推移を図 1 の如く報告している。

日本体育学会発足の最初の 8 年間に発表総数第数は 6 倍にも増大しているのに心理学的研究の発表は総数に対して 50 題（15%）前後で停滞している。杉本氏はこの傾向を懸念してその理由は何であろうかと体育心理学研究会員に問いかけている。昨年の 49 年大会では発表総数 522 題に対し、体育心理学会場での発表数は 46 題で総数の 8.8%となっている。最近は学会員の研究領域が大きく分化してきていることもあるが、心理学的研究は量的には発展していないようである。

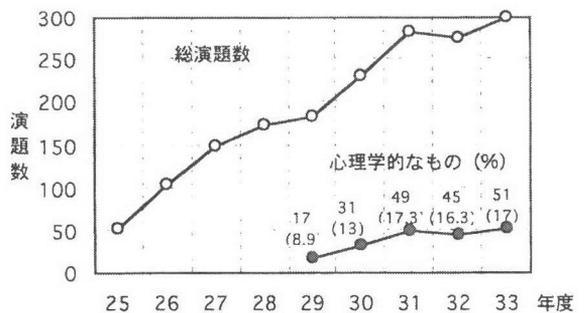


図 1 学会発足当初の発表演題数と心理学的なもの推移（曲り角，1959，No. 2 による）

体育心理学専門分科会の発足当初の学会大会での量的推移は前述の如くであるが、その研究内容は分科会の発足時から開かれた専門分科会のシンポジウムのテーマがそれをあらわしている。今回分科会の事務局が配布してくれたシンポジウム及びキーノートレクチャの一覧が年次別にその主題とサブテーマを示している。それによると、分科会発足の年から5年間に亘って運動（スポーツ）のパフォーマンスの向上を考えると身体運動と人格適応が研究内容として浮上するのは自然の成り行きと思われる。筆者もこの頃はこの問題をメインテーマとして研究していた。

筆者がこのテーマに動きづけられたのは筆者の恩師である後藤岩男教授の著書“体育の心理”の第4章の“スポーツマンの性格”の内容であった。筆者はその内容の概要を“身体活動と知的活動”という表題で曲り角（昭和58.11.第2号）に紹介している。それ15年も前のことなので、重複するが、スポーツに専念するものには挑発的でショッキングな内容であるので、あえてその1部を再起する。即ち、『体育運動は主として外の場の活動である。言いかえると外の場が非常に分化し、異質化してゆくことにほかならない。かかる異質化は、必然的に内の場の等質化を必要とする。内の場も異質化しつつありながら外の場もまた異質化することなどは、いかなる名手もこれをよくすることはできない。このような理由で長い間体育運動のみに専念しているものは鋭敏な感性を失ってしまいがちである。そのかわり小節にこだわらないいわゆる肝の太い剛直な性格になりやすい。……スポーツマンの性格を調査してみても体育運動家の体験を聞いてみても、この理論に証明を与えるような有力な事実が多い。体育運動家は概して犀利な思索や強靱な思考が不特手であり、考えが大ざっぱである。……』。後藤教授のこの著書は昭和24年（1949）に出版されており、当時体育心理学に関する著書としては唯一のものであった。後藤教授は心理学担当の教授であったが、学生の頃にサッカーをされ

たと聞いている。その性で、体育心理の著作が発想されたものと思われる。同教授は当時の行動心理学の有力な学派であるゲシュタルト（形態）心理学の研究者で、前期の体育運動家の人格適応もゲシュタルト心理学の場の理論で説明されている。私たちスポーツに専念してきたものにとっては、それは大変刺激的な内容であったが、同時に大変説得的であった。この著書は続いて昭和27年（1952）に公刊された松井三雄教授の体育心理学<sup>4)</sup>とともに当時体育心理学に関心をもったもの達を強く動機づけたこの面の雄著であった。体育心理学専門分科会がその発足から5年間にわたって身体運動と人格適応をシンポジウムの主題としたのはこの二著、特に前者の影響が大きかったのではないかと推測している。

出典；会報 第11号（通巻39号）特別寄稿

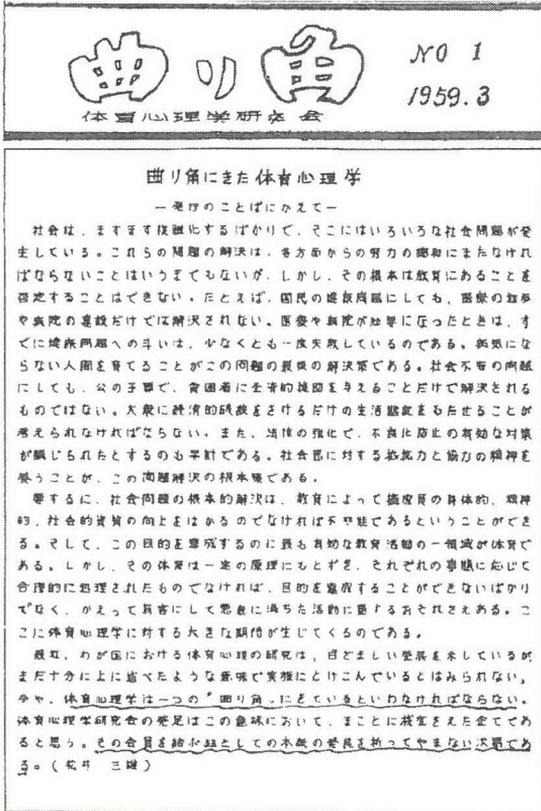
#### 1. 体育心理学専門分科会発足当時の思い出

#### 文献

- 1) 日本体育学会第49回大会プログラム
- 2) 私と日本体育学会—その初期の頃をふりかえって—江橋慎四郎、体育の科学:47(1),1997.
- 3) 体育の心理、後藤岩男、金子書房、1949年、1月
- 4) 体育心理学、松井三雄、体育の科学社、1952.
- 5) 日本体育学会題50回記念大会 / 体育・スポーツ関連学会連合大会、開催要綱、東京大学教養学部駒場キャンパス、日本体育学会第50回記念大会 / 体育・スポーツ関連学会連合大会、組織委員会、1999.

#### 資料

- 1) 「曲り角」第1号（1959）（末利 博氏寄贈）



下線のフッター・ラインは著者によるもの。

(2) 「曲り角」雑感

中川 孝 (富山大学)

体育心理学に関心をよせて日も浅く、分科会に所属して1年足らずの私に、投稿を依頼されたときは些か困惑したが、会報の名称が「曲り角」であることに興味をおぼえた。どのようなことで名づけられたかは知らないが、私なりの解釈で体育心理学あるいは心理学一般が曲り角にきているといった意味にとらせてもらった。このことに関しては日頃考えているところでもあり、曲り角に共感し、或程度気持が落ち着いた。しかし所詮浅薄者、盲者蛇に恐れずの類、嚙として読み流していたがきたい。

これまで目にふれた心理学書によれば、心理学の定義はその人、その学派の科学観、人間観などによってさまざまである。おそらく体育心理学においても同様であろう。心理学の歴史において、科学としての心理学は、自然科学の著しい発展の時代的影響を受け、自然科学的科学観が支配的であり、操作主義的、機能主義的心理学となったが、今日においても伝統的心理学として根強く存在していることは否定できない。そこで対象となる人間は基本的には操作可能な存在としかみえていないようである。ここで、今日の人間の科学としての体育心理学は、この点に関してどのような趨勢にあるのか、そして私自身どのように把握していくべきかを自問し続けているのが私の現状である。そしてこのことが人間理解の最も大きな曲り角に思えてならない。今日の文明社会は、高度に技術化されマスコプロ化された「管理社会」であるといわれるが、もし、体育心理学がその社会に順応するための人間をつくることに助力するための学問として墮落するならば、ハイゼンベルグが“原子物理学に関与する科学者の科学を哲学することの欠除が人類に恐怖をもたらした”とする方向と同じ結果を招くように思えてならない。そしてまた、体育心理学が人間行動の説明的体系を求める論理性と、普遍性、客観性を金科玉条として人間にアプローチするならば、Humanistic Psychology や Phenomenological Psychology の人々が指摘するような人間不在の心理学となるであろう。研究者本位のそして研究者のための研究ではなく、人間存在の次元にもどり、現象そのもの、行動の意味そのものにたちかえるべきであろう。このことに対しては、行動主義的心理学の立場から、形而上学としての現象学や実存在義哲学の影響であり、いわゆる科学としての方法論が確率されていないが故に、過去の内省心理学にもどると反論されることは明らかである。

こゝでの科学における客観性は、主観性との対立概念として設定され、二者択一的思考によって客観性は絶対的意味をもち、主観性

は非科学的として排斥されている。これに対しては、メルロ・ポンテの指摘するように、真の人間の科学は、斯様な二者択一的思考を超越したところにあり、例えば経験、意識、異常行動においてこのことは明らかである。要するに、過去の心理学に逆行することではなく、戸川氏が臨床心理学の確立で主張されているように、真の意味の新しい方法論を確立し、応用科学としてではなく、独立した学問領域を形成し創造的に発展させることが体育心理学においても必要であると考えられる。しかし、最近ある領域にあっては次第にこれが実現の方向にあり、しかも Processing が始まっていると感ずるとき、もはや「曲り角」ではなくなっていると思うし、私自身その方向で努力していきたい。

最後に思うことは、私の人間に関する Frame of Reference に絶えざる変化をもたらし、そして教示してくれる人々は、臨床領域にあたっては Patient あるいは Client とよばれる人々であり、教育にあっては学生、生徒諸君である。私のあり方関わり方を体験的に顕示してくれるある意味で私の師たるそれらの人々に感謝しなければならない。

出典；体育心理学研究会会報「曲がり角」昭和45年2号

## 5. 体育心理学専門分科会誌 「曲がり角」の時代

### 変革期の「体育心理学」に思う

#### 船越正康（大阪教育大学名誉教授）

##### 1. 田舎者のスポーツ体験から

米・餅・小豆に味噌・蜂蜜、塩の効いた豚肉やら何やら、家から持ち出せるものは全て詰め込んで、トランクと石油缶を縛りつける。両手に合わせて 160Kg を持つと気合が入る。その出立ちで上野の駅に立った。柔道部の先輩が2人、ニコニコと出迎えてくれた。特急

で40時間、北海道の山奥からの受験は一生に一度のこと。昭和32年当時、疎開先の母子家庭であれば浪人生活など考えようがない。落ちたら奉公に行く約束だった。「持つよ」「いいです。重いから」「何言ってるんだ」と引たくろうとしてトランクを落とす。“バランスがいいですから”とか何とか言いながら、これから世話になる先輩に持たせる代物ではない。腰をいれて持ち上げ“行先はどっちですか”と促した。それが始まりだった。

北海道の馬鹿力と紹介され、初対面の猪熊功（グランドスラマー、故人）に二間ほど投げ飛ばされた。「初めになめられたらいかんから渾身の背負いを掛けた」と笑っていた。後で思えば、柔道大学の教育学部に入った感がある。78.5Kgの体重が60Kgまで落ちる稽古の中で、一年次の骨折3回は馬鹿力が遠因だったような気がする。無事が名馬の条件なら駄馬に等しい。3年の3月31日、ライバルとの意地の張り合いから武者窓に激突、4度目の骨折では腸骨稜が吹飛んだ。レギュラーの座は夢と消え、焼け酒を呻って吐血したり、思い入れが強かっただけに今でいうバーナウトからドロップアウトの心境であった。

しかし、振り返って見れば、これらは全てスポーツカウンセラーとしてオリンピック選手のメンタルサポートに向かった時、理論を裏付ける体験的基礎になっていた。スポーツ障害の予防と対策、スポーツ適性研究、コンディショニング、個性理解に基づくコーチング、技能上達、運動不適應に関しては心理学的理論の援用が欠かせない。

##### 2. 全人教育論への共感とともに

子供の頃から目の性が悪く、教室では最前列が指定席だった。眼鏡をかけるようになってからも、気の散らない居心地の良さを知って、教壇の間近に陣取る癖がついていた。苦虫を噛み潰した風情で前川峰雄教授（体育原理）の講義が続く。「体育とは、身体活動を通じての全人教育である。」の行を聴きながら“オヤ、体育も満更じゃないナ”と思う。言

われてみれば、好きだから、楽しいから熱中していたが、人間が生きる原点にあるようなものだ。それにしても素晴らしいことを言っている割に、何でこんなに面白くない顔をしているのだろう。気になり出すと益々気になるもので、表情の乏しい苦虫顔の印象が強が残ってしまった。

その頃、人の話は、目を見て聴く習慣がついていた。けれども、見られる方が困るほど見つめていたらしく、同級生から窘められたりした。それかあらぬか講義の最終日に「僕の話熱心に聴いてくれた諸君、体育の現実には定義のような綺麗なものではないよ。教育の現場に行けば分かるが、ブルーカラー扱いだからね」と頷いている。いつになく柔和な顔で…。

夜間定時制高校での教諭経験 9 年、指摘された理念と現実のギャップを痛感しながら大学院に通う中で、戦前に教授が残した著者に触れる機会があった。その時、苦虫の顔が彷彿と浮かび上がる。体操科から体錬科への移行期は、戦争に必要な精神・身体の錬成論が時流であった。その中に、一連の論述がある。戦後になって民主体育の啓発に進むとき、自らの主張のギャップに苦悩する時期があったであろう。ふっと見せた柔和な顔と心を平和な世にどこまで受け継いでいけるのか、言論の府に生きる身となって肝に銘じる気持ちが強い。

### 3. 「学」における方法論の重要性

稚拙な卒論が、縁あって「勝負の世界」(田中秀雄、1962)に紹介された。今になって見ると戦後の柔道復活期、警察に伍して学生柔道が抬頭した時代である。内田クレペリン精神検査(UK法)を通じてトップレベルにある学生選手を位置づける。精神的側面からみたスポーツ適性研究の走りであった。「学問は方法論が肝心だね。パーソナリティ研究に興味を持つ人が多いけれども、主観を排除して客観化する、科学的態度を大切にしないとね。」卒論発表会終了後、口調は優しいが鈴木

清・体育心理学主任教授の講評が胸に突き刺さる。

UK法は数字を扱いながら英名表記が示す通り、心理診断(Psycho-diagnostic)である。心理的エネルギー水準を示す作業量区分や職業適性なり社会的適応を見る定型-非定型の分類作業は、比較的簡単に修得できる。5人の面接官が最高得点を与えた入試判定に対して、社会的適応異常を見分けて不可としたことがある。若干 22 歳の報告に 50 代の現役教官の経験が無視するのかと詰問されたが、内田勇三郎博士が目を通して「間違いありませんね。でもいいじゃないですか。入学させてみれば分かりますよ。」で落着。1年後、横領事件を起こして退学した学生の曲線は、誰が判定しても間違いのない非定型の P 曲線であった。

判定には熟練の壁があって、誰にでも分かる範囲は分かるが、熟練者が見ても分からないものは分からないところがあるから、これは仕方のないことなのであろう。しかし、「神ならぬ人間が人間を裁くに等しい」と喝破する。いわゆる心理テスト批判は何時頃からあったのであろうか。千葉県にいた昭和 40 年代には中学校の指導要録に知能検査や性格テストの表記があって、定時制生徒の指導に役立った。大阪では教育委員会が軒並み拒絶反応を示し、教え子が UK法を使うとお目玉を頂戴した。国立大学の自由が救ってくれたのか、一附属小学校が全校生徒の個性理解とクラス指導に採用して 29 年、年 1 度の心理テストを経験した卒業生の記録が四半世紀分になる。科研費がついたので定年までに報告するのが楽しみである。

学における方法論の重要性は言を俟たない。体育学会設立準備の最中に体育学独自の研究対象と方法を特定するよう要請されて、先達が苦勞したと聞く。最終的に関連諸科学の方法論を援用して、身体活動を通じて変化・変容する人間研究が中核に据えられた。これは、総合科学への志向性が体育学会発足の時に芽

生えていたことを示すものであろう。学会の発展は日進月歩。5分科会から13分科会に分化した7000人近い研究集団の中で、体育心理学専門分科会からスポーツ心理学会が独立した。日本心理学会は一時、22部門に細分化して研究発表が行われた。分化の行きつく処は再構成して統合が図られる。体育学会も体育心理学専門分科会も科学の発達法則の中で随分前から過渡期を迎えていたのではないだろうか。

#### 4. 「役に立つ心理学」の視点から

学会設立25周年の総括に、体育心理学は理論的・実験的研究に終始し、現場の用に応えていないという批判があった。悠に四半世紀前の話であるが、役に立つ心理学（「スポーツと睡眠」：長田一臣、1970）を標榜して理論の実際に踏み出したスポーツ心理学は競技界の期待に応えつつある。2000年にはスポーツ・メンタルトレーニング指導士の学会認定資格制度が機能し始め、55名の指導士（補）とともにメンタルサポートの質の高さも確保される段階に入った。国際的動向と呼応して、実践心理学への傾斜は一層拍車がかかるであろう。

体育心理はどうであろうか。教育現場では数知れないほどの研究発表が量産されている。体育指導の助言者として参画する方も多いであろうが、教師の熱意と費やされる努力に比例した成果は必ずしも上がっていない。子どもの行動を体育心理学の視点から理解すべき課題が足許に転がっている。しかし、実践あつての教育現場に消化不良の理論やデータ収集が優先する研究手法を持ち込まれては、迷惑がられても仕方がない。折角の発表も統制群の設定ができず、統計的思考が不徹底であったり、臨床的思考の必要な発表は主観に流され、原理や法則の敷衍まで進まない。スポーツ現場の葛藤にスポーツ研究者が応える形で始まった。「役に立つ心理学」と同様に、体育心理学者が体育科教育なり学校教育に責任を果たす取り組みが要求されているのではな

かろうか。昨年度のシンポジウム「体育の授業における体育心理学の役割」が、発展の契機になることを祈念したい。

それにつけても、世は改革の嵐が吹き荒れている。渦中にあるにもかかわらず、教育界はのんびりしたものである。否、気付いた一部の層が躍起になっているだけで、他人事のように思っている人が多い。どこぞの大学は疾く改革されて教育学部がなくなった。定員削減と予算基準の変更、省令定員枠の解除は、全ての国立大学が独立行政法人化へ向かうための下達布石である。自主的再編のできない組織に対しては新たな定削がきて、二進も三進もいなくなる。私学を含めて定員枠が締めつけられる中での研究体制は、教育理念に並行して大学経営の実利を問う姿勢が厳しくなるであろう。

総合学習や週休2日制実施の背景理由を考えれば、トップサーティ論のみで教育の将来を語るわけにはいかない。余裕や癒しの問題を注視する場合にも、教育関係者の中でも体育研究者は自分達の研究成果を再構築して、人間の生活における身体活動の意義を主張しなければなるまい。そのとき、体育心理学者は、心理相関論・スポーツ文化論・生涯教育論の中に、今までに明らかにした知見を明確に位置づけることができる。変革期であればこそ研究の継続性を疎かにしてはならないであろう。洗練された方法論を駆使して基礎的研究を充実する。その上で教育現場の用に応える体育心理学研究を進めるとともに、社会的責任を果たす研究者の姿勢を整えておきたいものである。

出典；会報 第14号（通巻42号）特別寄稿 変革期の「体育心理学」に思う

〈上記の原稿に、船越正康氏に加筆をお願いしました。〉

平成16年4月1日から国立大学の独立行政法人化が施行された。以後の教育・研究基盤は大きく変わったと聞く。人事や予算が変われ



であります。

とめどもなく拡がり、深まる人間性を、臨床法・実験法、統計法などのすべてを統合して、厳しい反省をつみ重ねての前進にしたいものだと思っています。

## 「曲り角」のまがりかど

柏原健三

体育心理学研究会会報を「曲り角」を再読してみた。昭和 42 年度から 55 年度までの、14 年間の体育心理学専門分科会の歩みを振り返ったわけである。「曲り角」は、「体育心理学は曲り角にきている」との問題意識を出発点として生まれた会報であり、随想、研究紹介、シンポジウムのテーマの解説の時事的な話題などについて、専門分野からの考察を内容としたものである。日本体育学会が発足して 18 年目の昭和 42 年、人間にたとえれば大学生になる時期に生まれた会報である。いわば体育心理学が向かうべき課題を明らかにするような性格をもっていた時でもあった。

昭和 46 年、第 22 回体育学会の心理専門分科会には、「体育心理学研究の課題」がシンポジウムのテーマにとりあげられた。そこでは①スポーツとパーソナリティ、②知覚運動学習、③集団の 3 領域に関する研究のあり方が討議された。しかし体育心理学の立場からは、実際に扱う運動技術の学習の問題にとり組む段階にきているのではなかろうかとの指摘がなされた。この 46 年度のシンポジウムを通して、あらたに「体育心理学とは何か」と自問するものであり、研究のモデルを他の学問に求めながらも、主体性をもった体育研究へと取り組む決意を促進させるものでもあった。大学生活を終り、一人立ちする青年としての“体育心理学”が自ら新たな決意を「曲り角」に示しているものと思われる。

こうした非常に積極的な姿勢が、その後もしばらく続いたが、最近はやや沈滞気味でもある。「曲り角」は当初、年に 2, 3 回発行さ

れていたが、近年は年に 1 回がやつのようである。内容もシンポジウムの連絡が中心となり、内から湧き上がるような自己主張や、自己批判は見られず、一遍の会報に過ぎないものとなっている。学会発足から 30 数年、体育心理学会報「曲り角」もまがりかどにきた。安定した数年へと向かう過渡期（メイヤー・エッケ）にある。それは将来への方向を定める重要な節目でもある。もとより体育心理学は、体育やスポーツにかゝる研究であり、人間存在の次元で行動の意味をとらえていく必要があろう。

イー・オリオン（李御寧）氏はその著“「縮み」志向の日本人”のあとがきの中に、「つくられた文化」を分析するのではなく、文化をつくっていく想像力の根を、その出発点を探り、たださなければならない。そしてその想像力でもっとも重要な特性が、ジオルジュ・プーレなどが指摘している拡散と収縮の運動であると…。このような考えにもとづいて、日本の日本人の創りあげた文化を、「縮み志向」としてあげたけい眼には敬服すべきものがある。たとえば、漢字をとり入れて、ひらがなをつくり出したように、日本では高度の文化を積極的に外に求めつつ、内においては外圧によることなく、自由に選択し、吸収して、文化を創り上げて現在にいたっている。しかし、とおからず日本は、外から求められようとしているのではなかろうか？「縮み志向」の文化からも知見できる日本の文化の本質を洞察して、それを対応しなければならないであろう。

細分化した狭い範囲の精細犀利な研究から得られた理論とその応用あるいは実践との関連を、大胆な Speculation を持ち言及する場が「曲り角」ではないだろうか。私はこのような Speculation を持つ者である。

## 人間の学としての体育心理学

柏原健三

分科会の業務を引きうけてから、事なく、バトンタッチすることが出来たのは、一重に会員の諸学兄姉のご協力とご指導によるものと、事務局一同にかわりまして、厚くお礼申し上げます。その間において、あれもこれもと考え、実現したいと思っておりましたが、結果的にはこれらのことを、十分に実現することが出来ずに終わってしまいました。しかしそれなりに目標をたてて努力したことは、自負している次第です。

われわれを取りまく生活は、21世紀に向かってあらゆるものが、スピーディに変化しております。情報化時代が、いつの間にか「化」がとれて情報時代へと変化している昨今です。先日、身の整理をしておりましたところ、体育学発足時の学会プログラムを発見いたしました。現在のように、会員や発表も少なく、分科会も分かれていない状況のもので、プログラムを手にして、隔世の感をもりました。紙は今にもボロボロになりそうな紙質です。しかも手書きで手摺りのものです。35年たった現在はどうかでしょう。ワープロによって、誰にでも正確に、スピーディに、しかも大量に生産されるようになりました。学会での研究内容も多岐にわたり、多量化されて参りました。それに比すると、学会発足時のものが、いかに少量であり、個性的であったかと、そのプログラムに目を通しながら述懐した次第です。

今後、ますます「人間」についての研究が、多様多岐に亘って発展することになると思います。また生活の機械化とスピード化にどのように適応すれば良いのかなど、生活する人間のもつ課題は尽きるものがないと思います。とはいえ、会員の皆さんには、それらの課題に対応する資質と研究への情熱においては、ことかかないものがあることを確信しております。願わくば、それらのはたらきの中に、

人間のもつ多様性を、簡単に片づけないで、研究を深め、質量ともに広がりをもつ体育心理学の必要にして大切な、生きている人間への疑念を深めて欲しいものだと思っています。懐古主義的なことになりましたが、じつくりと、大地に足を踏まえた生き方が、とくに気ぜわしく流れていく時代にとっては、大切なことではなかるうかと、自戒自重しながら、独白しております。

重ねて、私達に心情深いご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

昭和61年8月31日

分科会世話人一同

## 新たな転進を

太田鐵男

「心理学研究」にも記載されているが、日本心理学諸学会間連絡会が発行している「さいころじすと」(第18号)に、国際応用心理学会議の案内が記載されている。それによると、国際応用心理学会 (IAAP) は、1920年に設立され、長い活動の歴史をもっており、9つの部会が設置されているとのことである。

近年、IAAPの会員数は激増しており、新しい部門が相次いで設置されて、心理学者達の実践的問題への関心の高まりを示していることも強調されている。

IAAPの部門の中で、体育系大学の心理学関係の講義を担当している研究者にとって特に関心が深いのは、健康心理学とスポーツ心理学であることは言うまでもない。

問題になることは、実践的問題の解決へ向かって役に立つための健康心理学でありスポーツ心理学となるための軌道を一日も早く敷くことである。

①そのためにも、まず、研究者の数を増やし、微細にわたるどの研究テーマにも必ず専門家がいますという研究者の分野別の分布が望ましい。

研究者として多くのことを知っていること

は当然ではあるが、それ以上に、「この問題領域については誰それが専門である」、といわれるような傾向を大いに助長すべきである。

幸いなことに、健康心理学やスポーツ心理学の研究者が、大学で心理学を専攻した心理学者と、大学で体育学を専攻した研究者と相たずさえた形で構成されているので、実践的問題を探究し易い研究体制がとれる利点を強調したい。

②次に、健康心理学もスポーツ心理学のいづれも、心理学者のためのものでないことを銘記せねばならない。心理学の基礎的・理論的研究に従事してきた研究者が、その準拠枠を健康やスポーツに当てはめようとする事自体が無理である。「はじめに心理学ありき」、ではなくて、「はじめにスポーツがあり、健康がある」、からにはスポーツのための心理学であり、健康のための心理学でなければならない。また、スポーツ参加者のためにも、健康人たちにも、きわめて価値のある知識を贈り物として届けることができる心理学であらねばならない。それによって、スポーツ参加者がスポーツ実践に大いなる価値を見出すことができたり、健康者が身体の気づきを通して自己の存在感を高めることになるのである。

③さらには、スポーツ心理学も健康心理学も、それらの共通の基盤は、身体経験にあるというべきではなかろうか。

しかし、身体経験は主観的な側面が大きすぎて客観性に欠けるということで、心理学者がテーマとして取り上げなかった分野であった。ところが、コンピューター理論の進展とともに、認知心理学がフットライトを浴びるようになった今日において、認知の主体である「我思う」(コギト)の原点が、身体知覚(身体像)であることは、自明なことである。

身体像研究の第一人者である S. FISHER は、「自己の身体が大きいか小さいか、魅力的か魅力的でないか、強いか弱いかなど、という各人の持つ感情は、その人の自己概念や他人との人格的な関わり方について多くの情報を知らせてくれる。そこには、個人が自己以外の

事物とは対照的に、自己の身体について独自の知覚様式をもつという証明がある。」と述べられている。

身体経験の心理学と認知心理学とがドッキングする新たな時代を期待したい。

④終わりに、身体経験は、スポーツの記録が人間に残された唯一の自由と創造の天地である。

しかも、スポーツ心理学の大半の研究者は、表現の仕方は異なっても、個人独自のスポーツ的身体経験を豊富に持っている。この独自性を是非とも学会の場や論文に見現すべきではなかろうか。

これらのすべてを許容する学会であるよう、若い研究者諸氏のご活躍を切に期待したい。

出典； 曲り角 昭和 57 年第 1, 2 号合併号  
曲り角 昭和 57 年 10 月第 3 号  
曲り角 昭和 61 年度第 1, 2 号合併号

## 7. 体育心理学専門分科会の研究の変遷

菅生貴之, 手塚洋介, 安田友紀  
(大阪体育大学)

### 1) シンポジウムテーマの推移

表 7-1 は、体育心理専門分科会企画のシンポジウムテーマの変遷を示したものである。昭和 35 年から昭和 41 年までは分科会発足の企画であり、パーソナリティや運動学習といった観点から、「体育心理学」の研究課題を積極的に探索された時期で、その後の体育心理学専門分科会の礎となった時期であろう。昭和 42 年に専門分科会が設立された後も「運動学習」や「態度」、「発達」といったテーマが盛んに論じられている一方で、分科会設立の当初よりカウンセリングやセラピーなど、心理的援助の方法についても積極的にテーマとして取り上げられていることがうかがえる。近年では動機づけメンタルトレーニング、体育

授業への貢献など、より実践的なテーマが取り上げられている一方で、体育心理学研究の方向性を問うようなテーマで、体育心理学とは何かを問うようなテーマもうかがうことができる。

2) 会員数の推移

図 7-2 は体育心理専門分科会員数の推移を示したものである。会報・曲がり角などを資料として調査を行ったが、部分的に不明な年度がある。しかしながら分科会報が発刊されて以降は比較的資料が収集できた。

情報源にもよるかもしれないが、平成に入ってから400人を超える大所帯となっている。その後10年間は右肩上がりに増加を続けていったことが見て取れる。全国的にも大学において体育系の大学院が設置されるなどして、研究者の継続的な育成がおこなわれていた時期といえよう。

その後は650人程度で安定しているが、ベテランの先生方に加え、若手研究者も継続的に盛んに研究・教育活動が行われており、大学院生も安定して輩出されている傾向である。大学院生の就職・修了によって退会者もいるため、数字は大幅な増とは言えないが、研究発表は安定的に多数行われていることから、体育心理学研究者の育成が継続的に行われてきていることの一つの成果ではないかと考えられる。

3) 発表演題数の推移

表 7-3 は日本体育学会における体育心理専門分科会の発表演題数の推移を示したものである。データは平成22年に発行された、日本体育学会60周年記念誌より抜粋した。

発表演題数の推移をみると、おおよそ2度のピークを見せながらも発表演題数が少ない時期を迎えるなどして、近年では安定した発表数を保っているといった特徴がみられる。一つ目のピークは昭和45年の国士舘大学での大会の87演題であり、二つ目は平成4年の大妻女子大学での大会の80演題である。二度のピークの後は一時的に半数に近い30~50演題程度にまで減少しているが、その後徐々に持ち直していくのが特徴といえよう。近年では体育心理専門分科会の発表演題数は他の分科会と比しても最大規模である。体育・スポーツにおける心理学を対象とした研究室が増え、若手研究者や大学院生が増加していることはその大きな要因であり、体育心理学研究の発展を示すデータといえよう。

4) 学会賞・奨励賞の推移

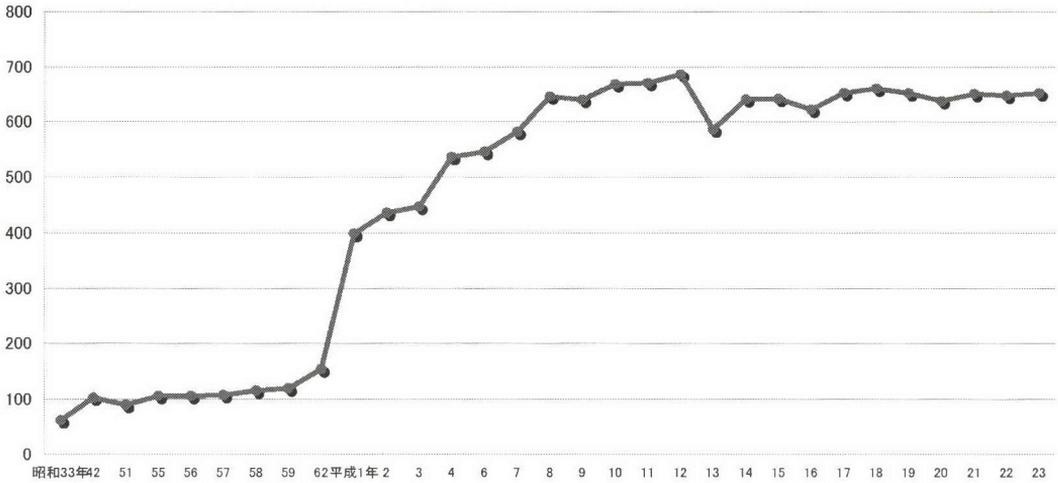
表 7-4 は日本体育学会における、体育心理専門部分科会所属者による論文や体育心理関連論文の体育学会賞の受賞者一覧である。概観すると、10年ほどの間に1~2件が学会賞として採択されているようである。体育心理学への多大な貢献を果たした研究成果であるといえよう。

表 7-1 体育心理学専門分科会 シンポジウムテーマ  
注) 会報 第6号(通巻34号) 3次選 4会報一頁 42-43参照

年	メインテーマ	サブテーマ	演者
11 昭和35年 (開巻地)	研究討議会 体育におけるパーソナリティ研究の動向	1. 主として日本の文献による研究 2. 運動学習とSocial Stressorへの適応 3. MMPIによる女子バスケットボール選手の性格に関する一考察 4. 運動選手の性格特性と「あたり」に関する研究	丹羽 聡明(奈良女子大学) 末利 橋(愛知学芸大学) 青井 水月ほか(東京大学ほか) 松田 岩男(東京教育大学)
12 昭和36年 (名古屋大学)	体育におけるパーソナリティ研究の動向	1. スポーツによる精神的変化 2. 運動経験者の性格特性についての追跡的研究 3. 幼児の運動と人格	小林 晃夫(東京教育大学) 花田 敬一(天理大学) 藤江 学(東京工業大学)
13 昭和37年 (慶応大学)	体育における生活指導 司会: 小林 晃夫(東京教育大学)	1. 運動能力と性格 2. スポーツにおけるパーソナリティの問題 3. 性格に基づく体育の指導	遠藤 康夫(福島大学) 太田 智男(順天堂大学) 相原 健三(大阪学芸大学)
14 昭和38年 (同志社大学)	第1回シンポジウム スポーツマンの性格特性 司会: 松田 岩男(東京教育大学)	1. 内田クリベリン法による研究 2. 矢田部・ギルフォード性格検査による研究 3. MMPIによる選手の性格の比較	近藤 克夫(東京教育大学) 杉本 功介(日本大学) 平田 久雄(中央大学)
15 昭和39年 (日本大学)	スポーツマンの性格特性について 司会: 小林 晃夫(東京教育大学)	1. MMPIによる検査結果を中心として 2. 各種検査の結果から 3. TSPによる検査結果を中心として	飯田 諄男(都立両国高校) 武田 徹(中京大学) 大川 信明(早稲田大学)
16 昭和40年 (北海道大学)	運動の学習過程について 司会: 相原 健三(大阪学芸大学)	1. "肩上がり"の習熟過程の筋電図的研究 2. 投球動作の学習過程の筋電図および映画分析による研究 3. 授業における運動学習過程 4. タイミングの学習 5. 視知覚と身体の位置感覚とのインターアクションを中心として 6. 学習効果に対する集団構達の影響—研究上の問題点をめぐって—	岡本 勉(関西医科大学) 森下 はるみ(立正学園短大) 田中 久雄(富山大学) 藤原 尚寛(天理大学) 藤田 厚(日本体育大学) 小林 篤(九州大学)

17	昭和41年	運動学習に関する諸問題 (東京大学)	司会:松田 巖男(東京教育大学)	1. 今日の運動学習の問題と方法 2. 運動学習における認知の方法 3. タイミングコントロールと運動学習 4. 運動学習における禁止について	太田 哲男(順天堂大学) 藤田 厚(日本体育大学) 山田 久直(名古屋大学) 近藤 克夫(東京教育大学)
18	昭和42年	運動学習に関する諸問題 —技術習得過程におけるイメージの役割— 司会:末利 博(京都教育大学)		1. 知覚—運動学習における距離・角度イメージ形成および運動機能効果 2. イメージ関連からみた運動におけるフォームの学習および反応時間における予期の問題 3. GSRを通してみた運動イメージ構成について 4. スキー—実技指導における示範の意義	加賀 秀夫(順天堂大学) 藤野 健次(大阪体育大学) 勝部 篤美(名古屋大学) 高村 健二(青山学院大学)
19	昭和43年	運動学習に関する諸問題 —運動学習における個人差— 司会:鈴木 清(東京教育大学)		1. 個人差を決定する要因 2. 緊張特性からみた個人差について 3. 反応時間における個人差 4. スキル学習における態度変動の重要性について	渡辺 勇(お茶の水女子大学) 上田 彌夫(早稲田大学) 杉本 功介(日本女子体育大学) 髙枝 孝治(横浜国立大学)
20	昭和44年	スポーツカウンセリングとスポーツセラピー (広島大学)	司会:清原 健司(早稲田大学)	1. スポーツカウンセリングの諸問題 2. スポーツカウンセリングやスポーツセラピーにおける体育教師の役割 3. 分裂病患者を指導して 4. 態度改善の手がかりとしての持久走 5. 射撃における心理負荷について	太田 哲男(順天堂大学) 徳永 幹雄(九州大学) 中村 章(愛媛大学) 平山 正徳(小田原学院) 松本 太刀雄(日本ライフル協会)
21	昭和45年	スポーツセラピーをめぐる (獨仙館大学)	司会:清原 健司(早稲田大学) 太田 哲男(順天堂大学)	1. 精神科医療における体育的働きかけ 2. 体育療法—ゆきぶり— 3. 精神分裂病者のダンスセラピー 4. 肢体不自由者の動作トレーニングについて	一宮 祐子(川越同人社団) 中井 忠男(慶應大学) 武井 正子(順天堂大学) 木村 敏(群馬大学)
22	昭和46年	体育心理学研究の課題 (日本体育大学)	司会:松田 巖男(東京教育大学)	1. スポーツと人格に関する研究の問題点 2. これまでの知覚運動学習の研究動向とこれからの課題 3. 体育心理学の分野における研究の動向	末利 博(京都教育大学) 髙枝 孝治(横浜国立大学) 竹村 昭(奈良学芸大学)
23	昭和47年	幼児期における運動発達の意義 (福岡大学)	司会:末利 博(京都教育大学) 勝部 篤美(名古屋大学)	1. 運動感覚の発達の見点から 2. 社会化的見点から 3. 自我の発達の見点から	近藤 克夫(東京教育大学) 鈴木 重夫(稲田若草幼稚園) 勝部 篤美(名古屋大学)
24	昭和48年	運動技術の習熟過程について (運動生理学、キネネオロジー、心理学の合同) 司会:津川 貞二(東京教育大学) 金子 公男(大阪教育大学)		1. 筋の作用順序からみた運動技術の習熟過程 2. 模倣動作による運動技術の習熟過程について 3. 動作習熟過程における脳波変動について 4. 内野手の投球動作の習熟過程について 5. 運動技術の習熟過程に関する心理的要因	熊本 水直(京都大学) 前嶋 孝(順天堂大学) 萩原 仁(広島大学) 松永 尚久(東京工業大学) 廣野 健次(大阪体育大学)
25	昭和49年	体育における態度改善の問題 (東京工業大学)	司会:加賀 秀夫(筑波大学)	1. 身体運動が感情や認知に及ぼす影響 —態度改善における均衡理論の立場から— 2. 学生の体育実技に対する態度改善とその要因 3. 自己認知の改善—スポーツ臨床心理学の立場から—	徳永 幹雄(九州大学) 長谷川 浩一(青山学院大学)
26	昭和50年	身体活動に対する態度形成をめぐる諸問題 (天理大学)	司会:上田 彌夫(早稲田大学)	1. 運動に対する態度形成の社会心理的考察 2. 運動に対する好き嫌いの発達的分析 3. 運動に対する態度とパーソナリティの関係 ※体育学研究の成果と課題(体育心理学)—課題研究	片岡 隆夫(筑波大学) 兵頭 寛(愛媛大学) 石井 謙信(中央女子大学) 和田 尚(大阪大学) 藤野 健次(大阪体育大学)
27	昭和51年	運動に対する興味を探る (東北大学)	司会:藤野 尚策(天理大学)	1. 運動動機の原因—寄与者と行動傾性からの考察 2. 興味の意味と青年期における興味の特徴 3. 興味の種類—構造—社会人における運動・スポーツの興味	佐久本 裕(福岡女子大学) 杉原 隆(筑波大学) 髙枝 孝治(広島大学)
28	昭和52年	子供の身心の発達と学習 (山梨大学)	司会:円田 善美(日本体育大学)	1. 幼児の知覚—運動経験と知覚発達— 2. 生活・社会環境と身体的発達の発達 3. からだづくりと意欲の問題	近藤 克夫(東京学芸大学) 藤巻 公裕(埼玉大学) 田中 敏雄(日本大学)
29	昭和53年	子供の身心の発達と学習 (高知大学)	司会:末利 博(京都教育大学)	1. 全身選択反応におよぼす学習の効果—発達からみた— 2. 運動遂行に關係の深い知覚・知覚面の発達 3. 子供の運動適応と反応エラーの問題—積極的に解る能力の意義—	藤田 厚(日本大学) 秋田 忠(京都教育大学付属桃山小学校) 髙枝 孝治(広島大学)
30	昭和54年	運動学習研究の問題 (金沢大学)	司会:末利 博(京都教育大学)	1. 運動学習理論の指導への適応をめぐる問題点 2. 授業を最適の対象とした運動学習研究のひとつの方向 3. 小学校の体育の授業での試み —運動する楽しさを知る子供達の学習から—	松田 巖男(筑波大学) 阪田 尚(岡山大学) 秋田 忠(京都教育大学付属桃山小学校)
31	昭和55年	運動学習研究の諸問題(2) (東京学芸大学)	司会:近藤 克夫(東京学芸大学)	1. 運動指導現場をめぐるいくつかの問題 —運動指導現場の学習・指導— 2. 大学での実践から 3. 小学校での実践から	湯浅 清(横浜国立大学) 廣野 崇一(新潟大学) 平林 宏美(東京学芸大学付属世田谷小学校)
32	昭和56年	運動学習研究の諸問題(3) (神戸大学)	司会:相原 健三(筑波大学)	1. 体力面から見た心身習得時の諸問題 —研究者の学習・指導・肢体不自由児の場合— 2. 指導者の立場から 3. 障害者の立場から	矢部 京之助(愛知県身体障害者センター—研究所) 藤原 道一(大阪身体障害者スポーツセンター) 白井 正義(金社員・ブルグラマー)
33	昭和57年	運動学習研究の諸問題(4) (東京大学教養学部)	司会:橋本 公宏(名古屋大学) 和田 尚(京都教育大学)	1. 学習時の行動観察とその解釈について —その方法的課題:実践のための提案— 2. 運動学習研究法の問題点	麓 儀義(弘前大学) 小林 篤(奈良女子大学) 指定討論者 杉原 隆(筑波大学)
34	昭和58年	運動学習研究の諸問題 (北海道大学)	司会:加賀 秀夫(お茶の水女子大学) 長田 一臣(日本体育大学)	1. 身体運動の自己制御に対する心理学からのかわり 2. 運動学習の疎外要因への臨床心理学的アプローチの可能性を探る 3. 臨床心理学的アプローチの背景	野野 公夫(順天堂大学) 財満 義輝(広島修道大学) 中込 四郎(筑波大学)
35	昭和59年	集中心をめぐる諸問題 (鹿児島大学)	司会:佐久本 裕(福岡女子大学)	1. 集中心とは 2. 体育学習と集中心 3. 集中心のトレーニング	山本 勝昭(福岡大学) 鹿木 守彦(熊本大学) 徳永 幹雄(九州大学)
36	昭和60年	集中心をめぐる諸問題(2) (岐阜大学)	司会:近藤 克夫(東京学芸大学)	1. 現場の立場で問題となる「集中心」について 2. パーソナリティ研究の立場で問題となる「集中心」について 3. 運動学習理論の立場で問題となる「集中心」について	石井 謙信(東京工業大学) 船越 正康(大阪教育大学) 髙枝 孝治(広島大学)
37	昭和61年	集中心をめぐる諸問題(3) —種上競技フィールド種目における集中心— 司会:市村 隆一(筑波大学)		1. 種上競技のトレーニング体系における心理的準備のあり方 2. 種上競技フィールド種目における集中心 3. 不明	村木 匠人(筑波大学) 重伏 重康(中央大学) 大西 境志(順天堂大学)
38	昭和62年	学校体育・スポーツの問題と体育心理学研究の課題 (立命館大学)	司会:円田 善美(日本体育大学)	1. 子ども・青年から見た心の実体 —美意識・変化を適及する教育実践を目指して— 2. 体育の授業における「脱離」の問題 3. 運動経験と人格形成・人格変容に関する研究	石川 敏士(法政第二高等学校) 山田 尚彦(岡山大学) 中込 四郎(筑波大学)
39	昭和63年	体育学習における動機づけのあり方 (福島大学)	司会:杉原 隆(筑波大学)	1. コピテンス理論の立場から 2. 原因帰属理論の立場から 3. 運動目的・内容性の立場から	西田 保(名古屋大学) 伊藤 豊彦(鳥根大学) 郷江 文利(東京学芸大学)
40	平成1年	高齢者の健康観・価値観を含む内発的動機づけ (横浜国立大学)	司会:山崎 勝男(早稲田大学)	1. 高齢者の生活意欲とその関連要因 2. 健康意欲の診断と動機づけ 3. 高齢者の改求・価値観の心理学的背景 4. 若者から見た高齢者の健康観・価値観—高齢者に対する若者の意識について—	谷口 肇一(鹿屋体育大学) 徳永 幹雄(九州大学) 長田 久雄(東京都立医療技術短期大学) 今村 義正(東海大学)

41	平成2年 スポーツ運動の心理的効果について (岡山大学) 司会: 猪俣 公宏(上越教育大学)	1. 運動生化学の立場から 2. 体育心理学の立場から 3. 精神病理学の立場から	田中 宏樹(福岡大学) 岡村 豊太郎(山口大学) 白山 正人(東京大学)
42	平成3年 ストレスホルモンから運動の心理的効果をさぐる (富山大学) 一中高年の運動の意義— 司会: 鈴木 幹雄(九州大学)	1. ストレスホルモンと運動 2. 心の健康と運動・スポーツ	岩橋 久夫(東京理科大学) 村越 真(静岡大学)
43	平成4年 スポーツとしての環境教育の可能性を探る (大妻女子大学) —体育心理学の新たなパラダイム— 司会: 市村 操一(筑波大学)	1. スポーツと環境の摩擦の反省の上—「スポーツと環境」の社会学を目指して— 2. スポーツと環境の共存、そしてスポーツを通しての環境教育—スポーツ企業の実例—	松村 和剛(筑波大学) 吉岡 清雄(経営グループ会長)
44	平成5年 より効果的なメンタルトレーニングを求めて (大阪国際センター財団: 星野 公夫(順天堂大学)) キーノートレクチャー 分科会30年の活動を顧みて将来を考える 司会: 藤吉 尚進(天理大学)	1. 競技における心理的構えの有効性とその獲得の仕方 2. メンタルトレーニングは現場の練習プログラムにならざるべきか 3. 運動機能とこころの自己コントロール—スポーツ選手のための心理的トレーニング—	窪田 登(早稲田大学) 徳永 幹雄(九州大学) 成瀬 悟策(東京工業大学教授) 藤野 健次(川崎医科大学)
45	平成6年 優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルをめぐって (山形大学) 司会: 船越 正康(大阪教育大学)	1. リーダーシップ・スキル 2. コミュニケーションスキル 3. 目標設定スキル	飛田 操(拓殖大学) 朗澤 祥樹(奈良教育大学) 石井 源博(東京工業大学) 丹羽 初昭(奈良女子大学)
46	平成7年 運動制御の生態学的アプローチ (群馬県民短大) 司会: 梶枝 孝治(広島大学)	アフォーダンスと制御—エコロジカル・アプローチの観点— 機能的運動制御について	佐々木 正人(東京大学) 山本 裕二(名古屋大学)
47	平成8年 体育・スポーツ指導における自信の高め方 (千葉大学) —目標設定を中心に— 司会: 杉原 隆(東京工業大学)	自信を高める手法としての目標設定の理論的背景 コーチングにおける目標設定を通しての自信の高め方 体育授業における目標設定を通しての自信の高め方	園田 原一(鹿屋体育大学) 磯貝 浩久(九州工業大学) 阪田 尚彦(岡山大学)
48	平成9年 運動部活動における体育心理学領域からの諸問題及び研究課題 (新潟大学他) 中込 四郎(筑波大学)	運動部活動の指導を通しての諸問題・課題 運動部活動と体罰—指導行動にみられる心理学的問題—	曾木 豊(新潟市立小新中学校) 桂 和仁(武蔵野短期大学) 阿江 美恵子(東京女子体育大学)
49	平成10年 大学・大学院における「体育心理学」教育の課題およびネットワーク (愛媛大学) 佐久間 寿夫(奈良女子大学)	筑波大学における現状と課題 私立総合大学における教養教育としてのスポーツ心理学の展開 体育系大学(学部)における体育・スポーツ心理学関連領域のカリキュラムの実現と得策 理工系大学における独立大学院の立場から	吉田 茂(筑波大学) 近藤 明彦(鹿屋体育大学) 荒木 雅博(大阪体育大学) 石井 源博(東京工業大学)
50	平成11年 スポーツ社会心理学研究会企画 (東京大学 駒場) 体育・スポーツ心理学における社会心理学のアプローチ 司会: 伊藤 豊彦(鳥取大学) ※会報12号P41参照 スポーツ動作法研究会誌 司会: 星野 公夫(順天堂大学) 臨床スポーツ心理学研究会企画 身体からこころへ 司会: 土屋 裕雄(大阪体育大学) 星野 公夫(順天堂大学) 中込 四郎(筑波大学)	1. スポーツ選手とソーシャルサポート 2. 心理的サポートの問題 3. 個人競技における凝集性 4. スポーツ動作法を体統する	土屋 裕雄(大阪体育大学) 阿江 美恵子(東京女子体育大学) 林 智久(筑波大学大学院) 星野 公夫(順天堂大学)
51	平成12年 シンボジウム開催なし (奈良女子大学)	競技方向上のメンタルトレーニング	高妻 啓一(近畿大学)
52	平成13年 体育授業における体育心理学の役割 (北海道大学) —からだとの教育を考える— 司会: 和田 尚(京都教育大学)	臨床心理学から見た「からだ、体育」 現状分析と今後の体育心理学に期待すること 仲間づくりという観点からみた体育授業の可能性と現状の抱える課題	鈴木 佳(岐阜大学) 箕川 昌明(岡山教育大学) 岡出 義剛(筑波大学)
53	平成14年 体育授業における体育心理学に役割 (埼玉大学) —運動学習の視点から教育を考える— 司会: 藤 信義(弘前大学)	運動学習研究の体育授業への貢献—運動学習を効果的に行わせること— 授業実践につながる運動学習研究とは何か—個別の運動教材に資する「学習・研究のあり方」	阪田 寛史(広島大学) 関本 尚彦(岡山大学)
54	平成15年 スポーツとコミュニケーション (熊本大学) —身体とこころをつなぐスキルトレーニング— 橋本 公雄(九州大学)	野外教育におけるコミュニケーションスキルの獲得 スポーツ活動におけるコミュニケーションと指導者の役割 体育・スポーツにおけるコミュニケーションスキル	榊 敬晴(鹿屋体育大学) 野村 洋二(名古屋経済大学) 杉山 佳生(九州大学)
55	平成16年 こころの成長・発達と身体活動 (信州大学) —これからの体育の課題— 司会: 阿江 美恵子(東京女子体育大学) 土屋 裕雄(大阪体育大学)	今子どもの身体にどんな変化が起こっているのか 幼児の運動能力と遊びの実態、その発達の意味 身体を通したこころの治療、自己表現	吉田 香明(大阪大学) 生田 伊津美(福岡教育大学) 平井 タカネ(元奈良女子大学)
56	平成17年 体育授業と生きる力の育成 (筑波大学) —体育心理学からの問題提起— 司会: 箕川 昌明(岡山教育大学)	1. 自己感情や有能感を育てる授業づくり 2. 体育授業への適応とライフスキルの獲得 3. 小学校における「生きる力の育成」の現状と課題	箕川 昌明(岡山教育大学) 佐々木 方丈(仙台電気工業大学高等専門学校) 千葉 裕(さいたま市立西原小学校)
57	平成18年 体育・スポーツ・健康教育におけるポジティブサイコロジーの視点 (弘前大学) 司会: 橋本 公雄(九州大学)	健康心理学の視点からみたポジティブサイコロジー 体育・スポーツ領域におけるフロア研究の立場から ヘルスプロモーションにおける強義義の視点について	堤 俊彦(近畿福祉大学) 小橋川 久光(琉球大学名誉教授) 宮城 政也(沖縄県立看護大学)
58	平成19年 モチベーションを高める指導法 (神戸大学) 司会: 高妻 啓一(東海大学)	中学生、高校生の生徒や選手に対する指導 教師・指導者・ピジスマンに対する指導 オリンピック選手などトップレベル競技者に対する指導	西員 雅裕(太成学院大学中学・高等学校) 原田 厚史(原田総合教育研究所長・天理大学非常勤講師) 菅生 貴之(大阪体育大学)
59	平成20年 体育・スポーツ場面における (早稲田大学) 個人差・パーソナリティ要因に関わる研究の課題 司会: 中込 四郎(筑波大学)	小学校体育科授業実践における個人差の捉えと授業づくり スポーツ経験とパーソナリティ発達をめぐる研究の課題 個人差を大切にした研究の実践、現場で得たデータを実践に活用する	鈴木 聡(東京工業大学付属豊田小学校) 竹之内 康志(名古屋大学) 荒井 弘和(大阪人間科学大学)
60	平成21年 体育心理学の体育授業への貢献 (広島大学) 司会: 西田 康(名古屋大学)	1. 運動学習からの貢献 2. 社会心理学的観点から体育授業を論じる 3. 健康運動心理学に基づく大学体育授業	筒井 清次郎(奈良教育大学) 杉山 佳生(九州大学) 木内 敦樹(大阪工業大学)
61	平成22年 若者研究者からみた体育心理学研究の現在と将来 (中央大学) 司会: 西田 康(名古屋大学)	1. 心理的プレッシャーにおける運動行動の神経生理学的特徴 2. スポーツ経験とライフスキル獲得との因果関係の推定—運動部を対象とした観測調査の展開— 3. 運動部指導者が抱える職業体験の持つ意味	島本 好平(東京工業大学大学院) 小谷 克彦(埼玉大学)
62	平成23年 子どもの運動発達を考える (鹿屋体育大学) 司会: 伊藤 豊彦(鳥取大学)	1. 発達研究の立場から 2. 運動不備研究の立場から 3. 内発的動機づけの立場から 4. 子どもの身体活動増進を狙ったポピュレーションアプローチ	中村 和彦(山梨大学) 古田 久(埼玉大学) 藤田 勉(鹿児島大学) 上地 広昭(山口大学)



年次	会員数	参照	備考	年次	会員数	参照	備考
1950 (昭和33)	62	体育心理学研究会 発足		1986 (昭和61)			事務局: 順天堂大学
1951 (昭和34)			曲がり角 1号 発行	1987 (昭和62)	154	会費納入簿(昭和62~)	
1961 (昭和36)		体育心理専門分科会 設立		1988 (昭和63)			事務局: 早稻田大学 本部は自動払込み制度開始 1989年(平成1年)より体育心理専門分科会会報1号が発行
1962 (昭和37)				1989 (平成1)	399	会報2号 1989年度総会報告	
1963 (昭和38)				1990 (平成2)	436	会報3号 1990年度総会報告	
1964 (昭和39)				1991 (平成3)	447	会報4号 1991年度総会報告	
1965 (昭和40)				1992 (平成4)	536	会報5号 1992年度総会報告	
1966 (昭和41)				1993 (平成5)	?		事務局: 九州大学
1967 (昭和42)	103	1968年会計報告	事務局: 東京教育大学	1994 (平成6)	546	会報7号 平成6年度会計報告	
1968 (昭和43)				1995 (平成7)	582	会報8号 平成7年度会計報告	
1969 (昭和44)				1996 (平成8)	646	1996年度総会資料	
1970 (昭和45)				1997 (平成9)	640	会報10号 平成10年度 総会随筆録	事務局: 筑波大学
1971 (昭和46)	164	1971年度会計報告		1998 (平成10)	669	会報11号 平成10年度 総会随筆録	
1972 (昭和47)	89	1972年度会計報告		1999 (平成11)	671	会報12号 平成11年度 総会随筆録	
1973 (昭和48)				2000 (平成12)	687	2000/8/25本部からの会員名簿	
1974 (昭和49)				2001 (平成13)	586	2001/8/22本部からの会員名簿	事務局: 名古屋大学
1975 (昭和50)				2002 (平成14)	641	2002/8/12本部からの会員名簿	
1976 (昭和51)	90	昭和51年2月1日 名簿	事務局: 日本体育大学	2003 (平成15)	642	会報17号 平成16年度 決算報告	
1977 (昭和52)			会費500円	2004 (平成16)	622	会報17号 平成16年度 決算報告	
1978 (昭和53)	39	新1 昭和53年度 総会資料		2005 (平成17)	653	会報18号 平成17年度 決算報告	事務局: 東海大学
1979 (昭和54)				2006 (平成18)	661	会報18号 平成18年度 決算報告	
1980 (昭和55)	106	1980年度 専門分科会活動報告書		2007 (平成19)	652	会報20号 平成19年度 決算報告	
1981 (昭和56)	106	昭和56年度 総会資料	事務局: 大阪教育大学	2008 (平成20)	638	会報21号 平成20年度 決算報告	
1982 (昭和57)	108	1982年 会報 曲がり角		2009 (平成21)	651	会報22号 平成21年度 決算報告	事務局: 大阪教育大学
1983 (昭和58)	116	昭和58年4月28日 会員案内		2010 (平成22)	648	会報23号 平成22年度 決算報告	
1984 (昭和59)	120	1983年度 専門分科会活動報告書		2011 (平成23)	652	2011年度 総会随筆録	
1985 (昭和60)	159	新11 1985年 会報 曲がり角					

図7-2 体育心理専門分科会 会員数の推移

体育心理学専門分科会 発表演題数の推移

註)60周年記念誌274P参照

年次	回	演題数	年次	回	演題数
1950 (昭和25)	1	4	1981 (昭和56)	32	42
1951 (昭和26)	2	6	1982 (昭和57)	33	54
1952 (昭和27)	3	15	1983 (昭和58)	34	40
1953 (昭和28)	4	23	1984 (昭和59)	35	50
1954 (昭和29)	5	16	1985 (昭和60)	36	50
1955 (昭和30)	6	15	1986 (昭和61)	37	64
1956 (昭和31)	7	46	1987 (昭和62)	38	61
1957 (昭和32)	8	42	1988 (昭和63)	39	69
1958 (昭和33)	9	37	1989 (平成1)	40	59
1959 (昭和34)	10	50	1990 (平成2)	41	68
1960 (昭和35)	11	53	1991 (平成3)	42	73
1961 (昭和36)	12	62	1992 (平成4)	43	80
1962 (昭和37)	13	52	1993 (平成5)	44	58
1963 (昭和38)	14	53	1994 (平成6)	45	55
1964 (昭和39)	15	40	1995 (平成7)	46	50
1965 (昭和40)	16	46	1996 (平成8)	47	47
1966 (昭和41)	17	51	1997 (平成9)	48	50
1967 (昭和42)	18	65	1998 (平成10)	49	46
1968 (昭和43)	19	74	1999 (平成11)	50	54
1969 (昭和44)	20	82	2000 (平成12)	51	44
1970 (昭和45)	21	87	2001 (平成13)	52	50
1971 (昭和46)	22	52	2002 (平成14)	53	45
1972 (昭和47)	23	52	2003 (平成15)	54	56
1973 (昭和48)	24	34	2004 (平成16)	55	57
1974 (昭和49)	25	52	2005 (平成17)	56	88
1975 (昭和50)	26	54	2006 (平成18)	57	66
1976 (昭和51)	27	29	2007 (平成19)	58	87
1977 (昭和52)	28	29	2008 (平成20)	59	78
1978 (昭和53)	29	30	2009 (平成21)	60	88
1979 (昭和54)	30	35	2010 (平成22)	61	82
1980 (昭和55)	31	48	2011 (平成23)	62	63

図7-3 体育心理専門分科会 発表演題数の推移

体育心理学専門分科会 学会賞・奨励賞の推移

註)日本体育学会 60周年記念誌 第6章 236-237ページ 参照

年次	種別	氏名	所属機関	研究題目
1964	大谷	藤巻 尚憲	天理大学	スポーツマンの性格について
1976	大谷	大城 宣次	沖縄国際大学	習熟の認知構造について
1979	大谷	酒田 保	名古屋大学	運動技能の主観的強度とパーソナリティ要因との関連性
1984	大谷	杉本 厚夫	広島大学	スポーツ集団における潜在的過剰行動の過剰が研究
1987	奨励賞	藤原 清志	名古屋大学	運動技能による認知イメージの質的差異について
1997	奨励賞	藤上 弘之	筑波大学	中高年齢者の運動実践を促進する環境心理的実践を中心
1999	奨励賞	土屋 伸雄	大阪体育大学	大学新人運動部員をめぐってパーソナル・スポーツの継続的検討(パーソナル・和制)に着目するパーソナル・スポーツの活用
2002	奨励賞	渡辺 栄児	金沢大学	高齢者を対象とした12週間わたる水中運動による心理的・身体的効果・量的・質的アプローチを用いた多面的分析
2010	奨励賞	村山 孝之	広島大学	「あがり」の表現順序の質的研究
2011	奨励賞	田中 典史	帝塚山大学	フレッシャーがゲーム・バウンディングに及ぼす影響

図7-4 体育心理専門分科会 学会賞・奨励賞の推移



## 2) 体育心理学専門分科会事務局の歩み

### 第1期事務局 東京教育大学 体育心理専門分科会事務局回顧録 杉原 隆

回顧録を書くようにと依頼されたが、何分とも昔(約30年前)のことであり、加えて記憶力もよくない方であることもあって、余りよく覚えていない。中込先生に頼んで送ってもらった当時の「曲がり角」を手掛かりに記憶をたどってみたが、思い違いがあるかもしれない。

小生が近藤充夫先生から事務を引き継いだのは、東京教育大学体育心理学研究室の助手になった昭和43年の4月であった。主な仕事は、会報「曲がり角」の編集・発送、月例会の企画と実施、体育学会評議員選挙の実施、大会時のシンポジウムの企画・司会者の推薦などであった。これらのことを体育心理学研究室の鈴木清先生、小林晃夫先生、松田岩男先生、それから一般体育研究室に移られた近藤充夫先生と相談しながら行っていたが、中心になっておられたのは松田岩男先生であった。

そのころの会報「曲がり角」は年に2回くらいの発行で、シンポジウムの演者を中心として、会報が自分の研究について紹介する内容が中心であった。原稿を依頼して書いていただける方が少なく、発行に苦労したこと、学生さんに手伝ってもらいながらも封筒の宛名書きが大変だったことを覚えている。

月例会は「月例会」という名称とは裏腹に、年に3~4回の開催になっていた。参加者もあまり多くなく、盛会とは言えない状態であった。

学会大会の司会者の推薦も気を使う仕事であった。当初はそれまでの慣例に従い、司会者はお年を召された大先生方をお願いしていた。それはそれでいいところもある。しかし、そのうちにもっと若い人で新鮮な見方で司会をしてもらうのもいいのではないかと思ひ、

松田先生に相談したところ、いいでしょうということになった。そこで35歳くらいの方から司会者として推薦することにした。体育心理専門分科会の司会者の年齢が他の専門分科会と比べ若くなっているのはその頃からであると記憶している。

東京教育大学が廃校になり、筑波大学が発足するのを契機に、事務局を日本体育大学に引き継いで、昭和50年に8年間に渡った肩の荷を下ろした。

出典；会報第11号(通巻39号)特別寄稿2

### 第2期事務局 日本体育大学 シンポジウム「子供の身心の発達と学習」の頃 西条修光(日本体育大学)

私たちの研究室(長田一臣先生、円田善英先生)で専門分科会の事務局をお引き受けしていた昭和55年は、子どもたちの手の不器用さ、背筋力の低下、背筋の歪み、骨折の増加、土踏まずの形成や感覚器の発達の遅れなどが具体的に指摘され、父母、教師、マスコミそして研究者の中から、子どもたちの体がおかしいのではといわれ始めた頃でした。

「手の器用な子ほど、物わかりがよく、感性もまろやか」「土踏まずの形成の後れている子は、すぐにいやになったり、疲れたという」といった、からだと心の関わりについての実感子どもたちに接している人達から聞くことがあります。だとすると、からだの「おかしさ」はそれ自体由々しき問題ですが、このまま放置されればそれだけにとどまらず、心の発達や人格形成の上で深刻な事態を引き起こすことが予想されます。このような問題意識で設定したのが、昭和52年の学会での表題のシンポジウムのテーマです。

研究テーマを設定する場合、何とかしたいと痛感され、解決を迫られ、実際的な価値がある「心配」から出発するものと、知的な「興味」から出発するものが多いと言われている

す。(宗像誠也「教育研究法」)。興味から出発する場合、研究室や研究者のなかだけで興味があって、現場で求めているものとは無関係なものとなる危険性があります。事務局ではテーマ設定に当たり、当時の子どもたちの身心の発達をめぐる状況をふまえて「心配」から出発したわけです。

司会は円田先生で、演者とテーマは以下の通りです。(1) 近藤充夫先生(東京学芸大学)「感覚運動神経が知的能力に及ぼす影響」(2) 藤巻公裕先生(埼玉大学)「生活・社会環境と身体認識の発達」(3) 田中孝彦先生(東京大学)「感情・認識・人格の発達と学習」なお、演者とテーマ(シンポジウムのテーマも含めて)本分科会会報(第6号,1994年)でのそれと幾分違っていますが、当時の事務局の資料と「体育学研究」(22巻4号)を参考にしながら、私が確定したものです。

当日のシンポジウムの会場は大入り満員で、ほかの分科会の会員、父母、小学校から高校の先生方が参加し、このテーマへの関心の深さが伺えました。そして今でも珍しいことと思いますが、何名かのマスコミの方も参加し、テレビの収録をしていました。終了後、円田先生と「よかった」と手をとりあって喜んだことを今でも覚えています。

あれから20年以上たちました。今年の体育学会の専門分科会ではどんなテーマのシンポジウムが開かれるのか楽しみにしています。事務局の方々ご苦労様です。

出典；会報第11号(通巻39号)特別寄稿2  
体育心理学専門分科会事務局の歩み

### 第3期事務局 大阪教育大学 「第3期事務局担当者の感慨」 船越正康

事務局を担当したのは彼此20年前、当時を振り返ると己の歳を感じさせられる。東教大から日体大を経て大教大へ確かに事務局は引き継がれたけれども、その頃は関西体育心理研究会が発足して10年がたっていた。故人となられた森脇勤(近大)先生が世話人となり、末利博(京教大)、柏原健三(大教大)、鷹野健次(大体大)、藤善尚憲(天理大)の4先生方が核となって隔月の例会を開いていた。参加者は20名内外、若手に引き継がれて今なお続いており、互いの切磋琢磨と交流を深める契機として力を貯えていたように思う。関東に比べれば関西はこじんまりした印象が強い。1~2時間で集まれる地理的便利さがあるから、楽しみつつ出掛けることができる。

大阪、京都、奈良、兵庫の常連に滋賀、三重を加え、最近では岐阜、愛知、愛媛からの参加がある。全国への発信基地を引き受けるに際して、一大学が担当する視点よりも、関西一円の熱心な活動母体があったればこそその出発だった。日本全体に“地方の時代”意識が流れ始めており、多少の力みがあったかもしれないが、「曲がり角」に活動記録を盛りながら、シンポジウムの企案や発表コードの改正に取り組んだ。関西での例会は一演題の持ち時間が約30分から1時間の話題提供後にワイワイ言い合っていると、研究の全容と独自性が見えてくる。至極必然的に研究活動が活性化していった。

全国規模に広がった「臨床スポーツ心理」「メンタルトレーニング」「運動学習」研究の中に、この例会から育った人たちがいるのは喜ばしい。世を揚げて情報化・国際化の時代、日本の地方と世界の都市の距離はインターネットで一飛び。研究の必然として細分化が進めば統合を必要とする時が再び来るであろう。体育心理学の新しい時代をリードする思考と研究者の育成を、地方の壁を乗り越えて心よ

り念ずる歳のようにである。

出典；会報 11 号(通巻 39 号) 特別寄稿 2. 体育心理学専門分科会事務局の歩み

〈上記の原稿に、船越正康氏に加筆をお願いしました。〉

定年後 8 年目、古希はとっくに過ぎたが気は若い方で未だに彼方此方飛び回っています。とはいえ体育心理の中樞が徐々に入れ替わって活動を推進しているので、ロートルが何を心配することはありません。しかし現役をリタイアして事務局担当時を振り返ると、研究活動の範囲が大きく変わってきましたね。第 3 期の会員は体育学会創始期の長老が健在で、新たに発足したスポーツ心理学会と体育心理学専門分科会の両方に顔を出している人が大半でした。若手だった我々も体心と S 心を見据えて研究テーマを変えて発表に臨んだ記憶があります。分りやすい例は競技心理関係を S 心、教育心理関係を体心に発表していました。言うは容易いことですが体心一つで用が足りたのに二足の草鞋を履くに似て、どちらかに重点をおくと片方が疎遠になる。二つに分化したしながら体心の発表コードには伝統的に競技心理が含まれているから、独自性が不明確のまま学会が開催されていました。2011 年から新コードでスタートしたけれども、体育とスポーツは車の両輪みたいなものだからスパッと分ける訳には行きませんね。むしろ体育の縛りを外れてスポーツで生じる問題は、かなりの部分を体育心理の思考によって解を求めることができる。その辺りを見通して教科体育に焦点づけた体育心理学研究を始め、スポーツ活動の体育心理学的課題解決をも視野に入れた研究の発展を期待しています。

(記：平成 23 年 9 月 15 日)

#### 第 4 期事務局 (順天堂大学) 「第 4 期専門分科会事務局」 中島宣行(順天堂大学)

昭和 61・62 年度にわたって、本分科会の事務局を担当した。その間、体育学会大会のシンポジウムでは、3 年目の継続テーマとして「集中力をめぐる諸問題(3)」を、そして翌年は「学校体育・スポーツの問題と体育心理学研究の課題」を設定し、会員との間で討議が行われた。

当時の会報である「曲り角」の中で太田は「…体育系大学の心理学関係の講義を担当している研究者にとって特に関心が深いのは、健康心理学とスポーツ心理学であることは言うまでもない。問題となることは、実践的問題の解決へ向かって役に立つ健康心理学でありスポーツ心理学となるための軌道を一日も早く敷くことである。…」と述べている。10 数年経過した今も同種のことを新たな視点から再度問いかける必要を感じる。

事務局の活動の一つとして、東京地区を中心とした研究会開催を呼びかけたことが思い出される。市村氏(競技不安について—現象から過程へ)や星野氏(メンタルプラクティス)を話題提供者として、お茶の水校舎の一室で研究会がもたれた。通常の学会口頭発表とは異なり、参加者の全てが平等で自由な雰囲気の中活発な情報交換、研修が行われた。そうした研究会を事務局担当の間、4 回ほど企画させていただいた。

最近では、各研究テーマごとに関心の深い者が集まり、研究会を組織しているが、関西地区の体育心理学例会のような集まりをそれぞれの地域でもつことも有意義ではないかと思われる。地域的な結びつきでの集まりにより、一味違った研修の雰囲気を体験できるのではないかと考える。

出典；会報 11 号(通巻 39 号) 特別寄稿 2  
体育心理学専門分科会事務局の歩み

**第5期事務局（早稲田大学）****「第5期分科会事務局」**

山崎勝男（早稲田大学スポーツ科学学術院）

順天堂大学から事務局をお引継ぎ受けしたのは、当時私が所属していた早稲田大学人間科学部スポーツ科学科時代の1988年3月下旬のことでした。早速、体育学会本部から舞い込んだ仕事は専門分科会からの評議員選出でした。直ちに前任校から送られてきた資料や書類の中から会員名簿を探し出し、とりあえずこの名簿に従って、選挙を行ないました。手許に残っている業務日誌には、評議員選挙に関する文書、被選挙権を有する会員名簿のコピー、投票用紙、返信用封筒、それに加えて年会費未納者への督促文書も同封して、147名に発送したと記されています。今でも鮮明に記憶しているのは、この郵便物を受け取られた会員のご家族から、本人は数年前に死亡しているが、いつまで年会費を納入していたのか判らないので、如何致しましょうか、というご返事を頂戴したことでした。この時ほど、名簿と年会費管理の大切さについて、深く学んだことはありませんでした。その後、学会費と専門分科会費の自動引き落としが制度化され、このような問題は解消しました。毎年、専門分科会が主催するシンポジウムやキーノートレクチャーの立案も、事務局としては気が重い仕事でした。しかし、分科会内に運営委員会を設置して頂いてからは、シンポジウムのテーマや司会者及びシンポジストの人選が非常に楽になりました。ただ、運営委員会が推薦した司会者やシンポジストとの交渉には、E-mail全盛の現在から想像が出来ないほどの時間を要しました。会報は運営委員会の了承を得て、従来の「曲がり角」から「体育心理学専門分科会会報」へと名称を変更し、年1回の発行としました。会報には主として専門分科会のシンポジウムを掲載したのですが、録音テープから起こした原稿の整理や編集作業には相当の時間を要しました。私共の事務局では1号から5号までの会報を

発行しました。事務局をお引き受けした1988年には、名簿の不備などもあってか専門分科会の会員数がわずかに147名でした。それが1989年には402名となり、以降1990年433名、1991年448名、1992年533名、1993年554名と年毎に増加してきました。事務局は1993年9月25日をもって、九州大学健康科学センターに引継ぎました。

（「会報11号（通巻39号）特別寄稿2 体育心理学専門分科会事務局の歩み 一第5期分科会事務局一」に、山崎勝男氏に加筆・修正をいただきました）

**第6期事務局（九州大学）****「第6期分科会事務局担当を省みて」**

徳永幹雄

事務局は平成5年～8年まで担当しました。

平成5年に事務局交代の挨拶を兼ねて、体育心理学専門分科会に期待している要望についてアンケートを実施しました。私達の事務局では基本的には、その集約された内容の実現に向かって努力したように思います。

第1は研修会と懇親会の実施でしょう。熱意ある会員の期待に答えてプレ・セミナーと称して学会前日に研修会を開催し、その後、懇親会をやるという企画でした。それなりに盛り上がりを見せましたが、長続きしなかったプレ・セミナーには少々、無理があったかなあ、と思っています。

第2は会報の充実です。早稲田大学の故 上田雅夫先生が事務局の時に立派な会報をつくって貰ったので、それに学会発表時の座長コメント、地方や研究会レベルの活動報告、大学研究室めぐり、海外情報、博士号取得者紹介などを追加しました。

第3は、体育心理学専門分科会に会則がありませんでしたので、会則の制定。そして、学会でのポスター発表の導入などを試みました。

九州という関東、関西から離れた土地ではありましたが、橋本公雄、高柳茂美(以上九大)、磯貝浩久(九工大)、瀧 豊樹(第一経済大)先生方の協力によって、何とかお世話できたのではないかと思います。

当時、日本スポーツ心理学会との関係もありましたが、体育心理学専門分科会独自の理事会が開催できないものかと考えていました。

体育心理学専門分科会選出の理事・評議員を集めて、将来的意味も含めて、年一度の会合を持ち、課題を検討してはいかがなものでしょう、と結んでいます。

振り返ってみると、会報、ポスター発表、理事会の開催など、現在でも原型をとどめており、有意義な仕事をさせて貰ったと感謝しています。

(「会報 11 号 (通巻 39 号) 特別寄稿 2 体育心理学専門分科会事務局の歩み 一第 6 期分科会事務局担当を省みて一」に、徳永幹雄氏に加筆・修正をいただきました)

## 第 7 期事務局 筑波大学

### 「体育心理学専門分科会と共に

#### 一第 7 期分科会事務局を担当一

中込四郎 (筑波大学)

専門分科会事務局の担当は、いつの頃からか、4年に一度開催されるオリンピックのサイクルに合わせて交替するようになりました。九州大学の徳永先生から筑波大学が事務局をバトンタッチしたのは、アトランタオリンピック(1998)の前後、千葉大学で行われた日本体育学会の専門分科会総会において、「4年後のシドニーオリンピック開催の年まで」と、お引き受けいたしました。

それ以前まで、分科会の活動には、研究発表や論文投稿を通して個人レベルで間接的に関わってきたつもりでいましたが、事務局の仕事については、当然ノータッチであり、まったくの予備知識がありませんでした。とこ

ろが、当時、すでに 600 人以上の登録会員がおり、その研究集団をどのようにまとめているのか、また学会本部との連携をどのようにしていくのか、と戸惑ったことを記憶しています。幸い、前事務局によって、分科会運営がかなり整備されていたので、まずはその遺産を使わせていただきながらスタートしました。この当時、研究室の準研究員であった高井和夫氏(現文教大学)が強い助っ人となってくれたことも大きかったと思います。彼には感謝しております。

現在の専門分科会の活動では、委員会を組織し機能的に運営されていますが、当時はそれほど明確な役割分担がなされていませんでした。そのために、学会大会における専門分科会の企画は、その全てにわたって、事務局から提案、発信するスタイルをとっていました。したがって、大会期間中は高井氏と2人で、シンポジストへの対応、「会報」原稿の依頼、総会の準備等に追われ、研究発表会場でじっくり聴くというよりも、会場の外で忙しくしていました。

このような中、事務局として若干色を出せたと思っている事は、「会報」の充実、会員が自発的に組織した各研究会活動への支援、そして「曲り角」の名称でスタートしたそれまでの専門分科会会報を合本製本し、次の事務局に手渡したことです。研究会組織については、当時の「会報」をめくると、「一部の分科会と同様に、体育心理学においても領域内での分化が色濃くなってきています。それぞれに個性を持って研鑽の場を築いている各研究会を無理して統合するよりも、サポートすることも事務局の立場ではないかと考えました。その代わり、シンポジウム等では、注目されている研究主題よりも、会員にとってもできるだけ共通性の高い体育の問題を取り上げようとしてきました」と、述べていました。

この他、事務局を担当していた期間に開催された日本体育学会第 50 回記念大会では、領域横断的なシンポジウムが企画され、体育心理学領域からも多くの会員に分科会を越えて

シンポジスト他で協力いただきました。さらに、各研究会の方々にそこでの活動を母体とした4つのイブニングシンポジウムを企画して協力いただいたことも、事務局の仕事として懐かしく思い出されます。

### 第8期事務局（名古屋大学） 西田 保（名古屋大学）

事務局を担当したのは、2000年の第51回大会（奈良女子大学）から2004年の第55回大会（信州大学）までの4年間でした。担当期間がオリンピックの年と一致していたので、シドニーからアテネまでの道のりでした。途中棄権せずになんとか完走できたのは、会員の皆様のご理解とご協力の賜物でした。

さて、当時を振り返ってみると、最も記憶に残っているのは、日本体育学会が2002年に社団法人化され、それを契機に体育心理学専門分科会の組織を新しい体制でスタートさせたことでした。それまでは事務局ならびに運営委員会（専門分科会選出の評議員で構成）が種々の業務を担当していたのですが、社団法人化に伴って評議員が解散されたことから、当時の徳永会長と相談の上、専門分科会の新しい組織づくりを進めました。組織改編の基本は、専門分科会の活性化にあります。そのためには、従来の事務局主導型の運営では限界があると判断し、2003年から新制度を開始したのです。これまでの運営委員会は理事会へと名称を変更し、理事会には業務を円滑に遂行するための委員会をいくつか設置しました。それらは、学会大会委員会（学会大会時の専門分科会関連の企画立案）、企画委員会（専門分科会独自の企画：講演会、研究会、セミナーなど）、広報委員会（会報の発行：内容の検討、執筆者への依頼、印刷業務）、庶務・会計委員会（理事会開催、日本体育学会との連絡、会計管理など）です。これによって、当時の事務局の負担がかなり軽減され、各委員会が独自のアイデアで様々な企画を立てら

れるようになりました。この体制は現在も引き継がれていますので、各委員会の理事には、この趣旨を理解して頂き、専門分科会の活性化に向けた斬新な取り組みをお願いしたいと思います。

当時の学会大会では、全体の発表演題数が減少するという現象がありました。スポーツ、体育、健康などに関する学会や研究会が数多く開催されるようになったことが一因だったと思います。幸いにも、本専門分科会の発表演題数は、皆様のご協力によりそれほど減少しなかったと記憶しています。

学会大会での魅力ある企画は、本専門分科会の活性化には欠かせません。現在は、口頭発表、ポスター発表、シンポジウム、キーノートレクチャーなどですが、学会大会委員会や企画委員会を中心として、会員が参加したくなるようなプログラムをぜひ計画して頂きたいと思います。そのためには、「知恵」だけでなく「財源も」必要です。本専門分科会は、会員の年会費（1,000円）と体育学会からの補助金（年に14万円程度）で運営されています。会員数は現在約650名なので、財源は合計で75万円程度です。これでは、様々な企画立案どころか、議事決定機関である理事会を学会大会時以外で開催する予算もありません。年会費は、私が会員になった数十年前から変わっていません。会費が安いのは大歓迎ですが、このあたりで本専門分科会の活性化と更なる発展に向けた英断が待たれるのではないのでしょうか。

### 第9期事務局（東海大学） 体育心理学専門分科会事務局から

第9期の分科会事務局は、平成19年4月からであり、平成21年3月までの4年間です。事務局の東海大学（吉川理事長）にお世話になりました。（文責 事務局）

第10期事務局（大阪体育大学）  
体育心理学専門分科会事務局から  
荒木雅信（大阪体育大学）

第10期の分科会事務局をお預かりしたのは、平成21年（2009年）4月からであり、平成25年3月までの4年間です。前事務局の東海大学（吉川理事長）には大変、お世話になりました。ありがとうございます。ご苦労様でした。今期の事務局は、庶務・会計担当の菅生先生、手塚先生と助手の安田友紀さん、林 晋子さんの4人に支えられて運営されているとって過言ではありません。これまでの事務局のご苦労とご努力に敬意を表したいと思います。

さて、任期4年の折り返しになる平成23年8月までを振り返ると、日本の歴史に特記される東日本大震災が3月11日に発生し、未曾有の被害をもたらし、今も復興の途上です。一日も早い復興を願わずにいられません。

日本体育学会での分科会の活動は、学会大会で分科会のシンポジウムとキーノートレクチャーを企画し実施しています。この2年間の一般発表数は、平成21年の広島大学での第59回学会大会では、88演題（口頭発表14、ポスター発表74；本分科会で過去最多）で、平成22年度の中京大学での第60回学会大会では、82演題（口頭発表19、ポスター発表63）の発表がありました。また、会員数も平成21年7月で660名、平成22年8月で648名と600名を維持しています。

これまでの事業として、平成21年度に発足した「学会大会発表コード表見直し」特別委員会が、平成22年度の総会で「(新)学会大会発表コード表」を提案し承認され、平成23年度の鹿屋体育大学での第61回学会大会から適用されます。また、日本体育学会の「一般社団法人への移行」に伴う分科会の位置づけがクローズアップされ、平成21年から断続的に議論されていますが、結論は先送りの状態です。分科会を「体育心理学専門分科会」として、日本体育学会の協力団体と位置付けることで、当面は乗り切っていけますが、抜本的な改革が必要であることは間違いありません。これは、分科会の「機構改革」というより、会員の「意識改革」が大きな問題となっています。そして、分科会の設立50周年を平成22年に迎え、今年は50年記念誌を編纂することになりました。編纂作業を行なう傍ら、諸先輩方の記事や投稿論文、事務局の資料を整理していく中で、本専門分科会の歴史と業績の重みを感じています。今後、大学の研究教育の環境が変化していく中で、体育心理学の役割がさらに増してくると思います。このような中で、「変革」を求められることは必然と思います。

図 8-3 日本体育学会と体育心理専門分科会の変遷

黎明期	1924	(大正 13)	国立体育研究所 開設	
	1949	(昭和24)		
	1950	(昭和25)	日本体育学会 設立	
	1951	(昭和26)		
	1952	(昭和27)		
	1953	(昭和28)		
	1954	(昭和29)		
	1955	(昭和30)		
	1956	(昭和31)		
	1957	(昭和32)		
1958	(昭和33)	体育心理学研究会 発足		
1959	(昭和34)		体育心理学研究会会報「曲り角」No.1	
1960	(昭和35)			
揺籃期	1961	(昭和36)	体育心理学専門分科会 発足	
	1962	(昭和37)		
	1963	(昭和38)		
	1964	(昭和39)		
	1965	(昭和40)		
	1966	(昭和41)		
	1967	(昭和42)	事務局;東京教育大学	体育心理学研究会会報「曲り角」2号
	1968	(昭和43)		体育心理学研究会会報「曲り角」1-5号
	1969	(昭和44)		体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号合併号
	1970	(昭和45)		体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号
1971	(昭和46)		体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号	
1972	(昭和47)		体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号	
転換期	1973	(昭和48)	日本スポーツ心理学会 設立	体育心理学研究会会報「曲り角」1号
	1974	(昭和49)		体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号
	1975	(昭和50)		体育心理学専門分科会会報「曲り角」1号
	1976	(昭和51)		
	1977	(昭和52)	事務局;日本体育大学	体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号合併号
	1978	(昭和53)		体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号合併号
	1979	(昭和54)		体育心理学研究会会報「曲り角」1号
	1980	(昭和55)		体育心理学研究会会報「曲り角」特別号
	1981	(昭和56)	事務局;大阪教育大学	
	1982	(昭和57)		体育心理学研究会会報「曲り角」1・2・3号
	1983	(昭和58)		体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号
	1984	(昭和59)		体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号合併号
	1985	(昭和60)		体育心理学研究会会報「曲り角」1号
	1986	(昭和61)	事務局;順天堂大学	体育心理学研究会会報「曲り角」1・2号合併号
	1987	(昭和62)		
	1988	(昭和63)	事務局;早稲田大学	体育心理学分科会「曲り角」
	1989	(平成1)		体育心理学専門分科会会報第1号
	1990	(平成2)		体育心理学専門分科会会報第2号
	1991	(平成3)		体育心理学専門分科会会報第3号
	1992	(平成4)		体育心理学専門分科会会報第4号
1993	(平成5)	事務局;九州大学	体育心理学専門分科会会報第5号	
1994	(平成6)		体育心理学専門分科会会報第6号(通巻34号)	
1995	(平成7)		体育心理学専門分科会会報第7号(通巻35号)	
1996	(平成8)		体育心理学専門分科会会報第8号(通巻36号)	
1997	(平成9)	事務局;筑波大学	体育心理学専門分科会会報第9号(通巻37号)	
1998	(平成10)		体育心理学専門分科会会報第10号(通巻38号)	
1999	(平成11)		体育心理学専門分科会会報第11号(通巻39号)	
2000	(平成12)	SMT 指導士認定制度	体育心理学専門分科会会報第12号(通巻40号)	
2001	(平成13)	事務局;名古屋大学	体育心理学専門分科会会報第13号(通巻41号)	
2002	(平成14)		体育心理学専門分科会会報第14号(通巻42号)	
2003	(平成15)		体育心理学専門分科会会報第15号(通巻43号)	
2004	(平成16)		体育心理学専門分科会会報第16号(通巻44号)	
2005	(平成17)	事務局;東海大学	体育心理学専門分科会会報第17号(通巻45号)	
2006	(平成18)		体育心理学専門分科会会報第18号(通巻46号)	
2007	(平成19)		体育心理学専門分科会会報第19号(通巻47号)	
2008	(平成20)		体育心理学専門分科会会報第20号(通巻48号)	
2009	(平成21)	事務局;大阪体育大学	体育心理学専門分科会会報第21号(通巻49号)	
2010	(平成22)		体育心理学専門分科会会報第22号(通巻50号)	
2011	(平成23)	(50年誌編纂・発刊)	体育心理学専門分科会会報第23号(通巻51号)	

【資料】

(日本体育学会第第1回大会プログラム)

加藤橘夫. 加藤橘夫 著作選集 第一巻 1985 より 抜粋

158

経過報告  
評議員選挙  
第二回大会会場決定の件  
科学研究費の補助について  
その他  
文部省 大西事務官

157 <資料> 日本体育学会第一回大会プログラム

8	級別指数(C・I)の算出公式の吟味について	体育調査研究会	佐々木 茂
9	一般運動能力の算出と尺度	体育調査研究会	松山 岩男
10	社会体育実態調査報告 生活時間について	東京工業大学	石塩 田谷 俊宗 丸雄
11	社会体育実態調査報告 レクリエーション活動について	東京工業大学	綱塩 谷 豊宗 作雄
12	社会体育実態調査報告 疲労の調査について	東京工業大学	金塩 子谷 英宗 一雄
13	スポーツとレクリエーションについて	関東学院大学	白山 源三 郎
閉会の辞 日本体育学会理事長 大谷 武 一			
— 会員有志午餐会 (二・三〇一・三〇) — 山上会議所			
特別講演 (一・三〇一・二・〇〇) 山上会議所			
Ludology に就いて — 国際社会学会議に提出されたスポーツ社会学の問題 —			
東京大学教授 林 恵 海			
— 会員総会 (二・〇〇一四・三〇) — 山上会議所			
議長 選挙			

9	筋運動の際のエネルギー代謝 体操のエネルギー代謝に関する研究	東京大学 労働科学研究所	石河利寛
10	スポーツのエネルギー代謝に関する研究	京都府立医科大学	石井雄二
11	小中学生の潜水時間	東京大学	山岡誠一
12	体育の個人適性に関する研究(第一報)	北海道大学 北海道教育委員会	福田長邦 若林東一郎 天野智恵 海老原恵美 結城秀之
第二会場 (法文経二十八番教室)			
1	各種体育運動時に於ける疲労度の測定	長崎大学	伊藤金得
2	ダンスに於ける表現能力の一調査	東京学芸大学	渡辺江津
3	遊戯に関する調査の報告	体育調査研究会	松井三雄
4	運動能検査の作製	東京教育大学	松田岩男
5	徳島県中学校生徒の運動能力標準尺度	徳島大学	四宮馨
6	年齢別、性別運動能力の尺度化	体育調査研究会	宇土正彦
7	体力テストの一方法について	京都大学	高木公三郎、丹生治夫 佐々木美智雄、大原親 村上辰雄、土屋冷 吉村一夫、荒木雄豪

155 〈資料〉 日本体育学会第一回大会プログラム

18 体育施設概論

青山学院大学 東次 右衛門

第二日 十一月二十六日(日)

午前部 (午前九・〇〇—二・〇〇)

第一会場 (法文経二十五番教室)

- |   |                           |          |       |
|---|---------------------------|----------|-------|
| 1 | 動作の巧みの生理学的考察              | お茶の水女子大学 | 猪飼 道夫 |
| 2 | ロエプ氏現象に関する一実験             | 東京教育大学   | 鷹野 健次 |
| 3 | 幼児の体育規準としての屈膝脈差数について      | 日本医科大学   | 継野 義二 |
| 4 | 姿勢の研究                     | 九州大学     | 野口 義二 |
| 5 | スポーツ障害の研究                 | 東京教育大学   | 阿部 三亥 |
| 6 | 体格、体力の綜合判定法を中心とした健康状態の把握法 | 名古屋大学    | 平田 欽逸 |
| 7 | 身体運動に於ける片側偏重の問題           | 東京教育大学   | 鷹野 健三 |
| 8 | 懸垂の筋力学的研究                 | 東京大学     | 石福 利邦 |
|   |                           |          | 寛三    |

- |    |                              |          |                                    |
|----|------------------------------|----------|------------------------------------|
| 2  | 運動学習に於ける身体的練習と精神的練習について      | 東京教育大学   | 笠井恵雄、<br>石田啓、<br>太田鉄男              |
| 3  | 運動技能の発達と指導                   | 愛知学芸大学   | 森茂雄                                |
| 4  | 児童の運動技能の発達について               | お茶の水女子大学 | 丹下保夫                               |
| 5  | 新制大学生の身体適性についての一実験           | 和歌山大学    | 笠松勇次                               |
| 6  | 体育科の特質に関する調査 体育教師による体育科の自己評価 | 東京学芸大学   | 佐藤正                                |
| 7  | 矯正体操について                     | 三谷中学校    | 細井竹二                               |
| 8  | 教材評価と球技について                  | 愛知学芸大学   | 佐々木久三                              |
| 9  | バスケットボールの観察と実際               | 徳島大学     | 玉野勝郎                               |
| 10 | フォームの研究 第一報                  | 京都大学     | 大原親                                |
| 11 | 三心円弧走路に於ける四百米継走の出発線について      | 山口大学     | 福井修治                               |
| 12 | 運動学習に於ける補助目標の効果についての実験       | 東京教育大学   | 笠井恵雄、<br>石田啓、<br>太田鉄男              |
| 13 | 大学正課体育時に於ける一試案               | 青山学院大学   | 相馬武美                               |
| 14 | 大学に於ける体育の運営                  | 東京都立大学   | 堀田登                                |
| 15 | 京都大学体育実技実施要領                 | 京都大学     | 村上辰雄、<br>佐々木美智雄、<br>荒木雄豪、<br>高木公三郎 |
| 16 | 大学正課体育の管理に対する研究(第一調査)        | 東京学芸大学   | 森清                                 |
| 17 | 新体育器具把手台の研究                  | 東京教育大学   | 本間茂雄                               |

153 <資料> 日本体育学会第一回大会プログラム

1	スポーツとエクササイズ・トレーニング	大阪市立大学	森脇正夫
8	漁民の体力調査	東京工業大学	浦本三嗣、石田俊丸、金子英一、網谷宗雄
9	滴状小心臓者の体力について	日本医科大学	篠木原田直文、弘夫
10	野球選手の体力について	京都大学	笹田村川喜久、弘吾
11	柔軟度測定法としての前屈伸機能と運動能力の関係について	北海道大学	紺野義雄
12	筋肉硬度及び硬度差と運動能力の関係について	北海道大学	紺野義雄
13	人体に於ける関節運動領域(柔軟度)測定に関する研究 第一報	東京教育大学	本間茂雄
14	村民の体育大会について	北五個荘小学校	中村為治郎
15	巧緻運動練習効果と知能との相関	九州大学	藤本実雄
16	中学校バスケットボールの疲労の考察	群馬大学	岡田三郎
17	全日本柔道選手権大会出場選手の体力調査報告	東京工業大学	塩谷宗雄
18	青年期に於ける健康意識に関する研究	東京学芸大学	石田俊丸、河瀬歳夫
<p><b>第二会場 (法文経二十八番教室)</b></p>			

第一日 十一月二十五日(土) 午後一時

第一会場(法文経二十五番教室)

開会の辞 日本体育学会会長 東 龍太郎

祝 辞 C I E W・E・ニューフェルト

〔研究発表〕 午後一時三〇分—午後六時〇〇分

第一会場 (法文経二十五番教室)

- |   |                             |        |         |
|---|-----------------------------|--------|---------|
| 1 | 運動種目と性格形成の類型                | 日本体育大学 | 石 津 誠   |
| 2 | 学生のスポーツに対する一考察              | 徳島大学   | 齋 実     |
| 3 | ギリシャ競技精神の典型                 | 東京教育大学 | 岸 野 三   |
| 4 | プラトーンの体育思想                  | 東京大学   | 水 野 忠 文 |
| 5 | ギリシャ体育に関する研究                | 東京学芸大学 | 石 渡 義 一 |
| 6 | 体育の哲学的考察                    | 立命館大学  | 木 村 静 雄 |
| 7 | 体育の場に於ける教師と生徒との関係 — 体育教師論 — | 静岡大学   | 石 橋 武 彦 |

日本体育学会第一回大会日程表

日 時	午 前	午 後
第一日 25日(土)		1:00—1:20 開会(開会の辞)
		1:30—6:00 研究発表
第二日 26日(日)	9:00—12:00 研究発表	12:30—1:30 会員有志午餐会
	閉会の辞	1:30—2:00 特別講演 2:00—4:00 会員総会

【資料】

日本体育学会第一回大会  
プログラム

東京大学に於て

一九五〇年十一月 日本体育学会

- 1 研究発表時間は一〇分、質問時間は五分、時間厳守をお願いします。
- 2 研究発表の図表類、当日開会前までに会場係まで御提出下さい。
- 3 研究発表原稿(四百字詰八枚以内)は当日発表後司会者にお渡し下さい。
- 4 当日会場にても入会申込みを受付けます。
- 5 臨時会員として傍聴される方は会場整理費として受付に五十円御支払い下さい。
- 6 二十六日の会員有志午餐会出席希望の方は二十五日中に受付に金百円を支払って食券を受取して下さい。
- 7 二十六日午後の午餐会、特別講演及び総会には会員でなければ出席できません。

### 第3章 体育心理学専門分科会の現在

本章では、これまでの体育心理学専門分科会の組織と活動と、分化した研究を支える会員の自発的な研究会活動の紹介、さらに日本スポーツ心理学会の発足後、当該学会が認定する「スポーツメンタルトレーニング指導士資格」との関係など、現状を概観しました。



## 1. 近年の体育心理学専門分科会の組織と活動

石井源信（東京工業大学）

ここでは体育心理学専門分科会の組織と活動について、発足した簡単な経緯と変遷ならびに最近の動向をまとめる。他と重複する部分は多いと思われるがご容赦頂きたい。

1958年に発足された「体育心理学研究会」では1959年から会報「曲がり角」を発行している。1963年に発行された「曲がり角 No. 8」には「日本体育学会・体育心理学専門分科会＝曲がり角」とあり、1989年には会報「日本体育学会 体育心理学専門分科会会報」第1号が発刊されており、2010年に発行された第22号は通巻第50号にあたる。

当初は事務局が松田岩男先生を代表として東京の幡ヶ谷に位置する東京教育大学体育心理学研究室に置かれた。同学の閉校を契機に1977年に事務局は日本体育大学に移転され、大阪教育大学、順天堂大学、早稲田大学、九州大学、筑波大学、名古屋大学、東海大学、大阪体育大学、そして2010年から引き続き大阪体育大学へと引き継がれてきている。

当初は、代表と世話人によって運営されていたものが、1995年に会則が制定され、総会で承認されることによって、会員の選挙により会長、理事による運営へと移行した。事務局を中心として現組織は、任期は2年で会長、理事長、理事、監事、幹事から構成されており、会長は会員の投票によって、また理事長は理事の単記無記名投票によって決定される。理事は10名で選挙とは別に事務局から2名の計12名の理事からなり、監事は会員の中から会長が委嘱する。また日本体育学会への体育心理学専門分科会選出の代議員3名も会員の投票によって選出されている。

常設委員会として企画委員会、学会大会委員会、広報委員会、庶務・会計委員会の4つがある。また、特別委員会として「学会大会発表コード表」見直し特別委員会（2009.9 -

2010.3）また今回「50年記念誌編集委員会（2011.4 - 2012.3）」が設けられている。各種常設委員会とその役割について以下に示すことにする。

### 1. 企画委員会

学会時の前日に開催される「プレセミナー・懇親会」の企画を担当する委員会である。プレセミナーの開催の意義に関しては、大会前日に各領域で話題になっていることや体育授業やスポーツ指導の現場での問題点や研究法などについて議論を交わすといった懇親の意味も込めて自由に交流しようという意図があったように思われる。

今後プレセミナーを企画するにあたって問題点をいくつかあげられる。本務校の大学院入試にあたる場合や忙しきゆえに、また物理的に遠距離の場合は前日に入ることが厳しくなっており、毎年実施することが困難となっている。内容や実施法を改めて見直す必要があるように思われる。体育科教育やスポーツ社会学、運動生理学、バイオメカニクスなどの合同プレセミナーとの企画もひとつであろう。またスポーツ交流（テニス研修会）などの企画もいかがなものか。

### 2. 学会大会委員会

学会におけるシンポジウム、キーノートレクチャー、口頭発表、ポスター発表、総会開催の企画を担当し、大会開催校との連携を図り、準備段階から実行段階そして報告までを担当する委員会である。シンポジウムテーマの推移は第2章の6節に表で示されているので参照されたい。ちなみに日本体育学会50周年を記念してのシンポジウムは従来のやり方とは異なり、各種研究会をオープンにという会員の声を背景に4つの研究会毎に「イブニングシンポジウム」として企画・実施された。

また、キーノートレクチャー（基調講演）に関しては、一方には長年にわたって同じ問題にアプローチされてきた研究成果と実践面の経験から出された成果についてのお話を聞

くことによって学び、もう一方には若手研究者に新しい視点での研究アプローチの試みなどを話してもらおうというねらいで企画されてきた。

### 3. 広報委員会

体育心理学分科会会報の発行ならびに2008年2月に作成された分科会HPを更新する作業などを担当する。体育心理学専門分科会の歴史や組織と活動を辿るには「曲がり角」と「体育心理学専門分科会会報」がきわめて有益な情報となる。

会報の内容として「特別寄稿」「日本体育学会関連く前回の報告と次回の案内」「研究会の活動報告」「研究室紹介」「学位論文紹介」「海外情報」「研究トピックス」「事務局報告」などから構成されている。

### 4. 庶務・会計委員会

予算案や収支決算報告など庶務および会計業務を担当する委員会事務局が中心となって運営されている。

今後の課題としては、日本体育学会の社団法人化に伴って、本専門分科会をどう位置づけるかが重要となる。当面は「日本体育学会体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門分科会」として日本体育学会の協力団体として位置づけることにしている。将来的には、第5章の今後の展望のところで述べられているが、日本スポーツ心理学会との棲み分けについて、日本スポーツ心理学会の理事会でも早急にその関係や連携についての話し合いがなされる必要がある。

## 2. 研究領域と活動内容について

### 2-1 スポーツ動機づけ研究会の活動

西田 保 (名古屋大学)

スポーツ動機づけ (Sport Motivation) 研究会は、広い意味でスポーツにおける動機づけに関心を持つ人達が、定期的に研究会を開催して議論を深めると共に、会員相互の情報交換を主たる目的として設立された。また、必要に応じて、共同研究や研究成果の出版などが企画されている。歴史的には、1995年の12月に「動機づけ研究会」が名古屋で開催された経緯はあるが、2002年のスポーツ心理学会で「動機づけ理論の現場への適用」と題するシンポジウムが開催されたのを契機として、名称をスポーツ動機づけ研究会と改め正式に発足した。そして、翌年の2003年には、参加者全員が発表するという形式の第1回スポーツ動機づけ研究会が開催された。その後、年に1回の研究会が、「会員の自由テーマに基づく研究報告の場を提供すると共に、会員相互の情報交換やコミュニケーションを図ること」を目的に開催され現在に至っている。

スポーツ動機づけ研究会のスローガンは、参加者相互の「情報交換」と「知的コミュニケーション」である。会場設定もこれに合わせて配置され、可能な限りお互いの顔が見えるように工夫されている。相互のコミュニケーションが自由にできるように「free communication」の時間が設定され、アットホームな雰囲気の中で研究発表などが行われている。また、発表と質疑応答の時間はなるべく長く取り参加者全員で議論すること、若手企画を推進し若い人の発表や質疑時間を確保すること、仲間うちだけでなく他分野からも刺激を受けるようにすること、発表者を批判するのではなく建設的な意見交換をすることなどが、本研究会での共通理解となっている。なお、会員数は明確ではないが、メーリングリストには、現在58名が登録している。

どのような研究が発表されているのか。過

去数年間の口頭発表やシンポジウムなどを以下に紹介する。

#### <口頭発表>

「体育授業での児童の動機づけ：目標理論からのアプローチ」「体育授業における目標志向性が友人への言葉かけに与える影響」「体育における学習意欲に及ぼす動機づけ雰囲気の影響」「中学校体育授業における教師の言葉かけと生徒の動機づけ」「身体的自己概念の発達と変化」「自尊感情、身体的自己概念の変容に影響する要因」「サッカー指導における指導の相互バイアスの構成」「サッカー指導にみられる偏りの追従的検討(3)」「エキスパート・スポーツ選手の楽しみとは?」「競技スポーツにおける困難な状況からの心理的成長仮説」「児童生徒の部活動成長感とレジリエンスとの関連」「レジリエンス概念の紹介と競技スポーツ場面におけるレジリエンス構成要因」「アスリートの心理的欲求(有能感・自律性・関係性)に影響する指導者の対人習慣尺度の作成」「指導者の対人習慣が競技者の欲求充足に与える影響」「スポーツチームにおける対人魅力過程の検討」「スポーツ集団効力感尺度の開発」「ギリシアにおける動機づけ雰囲気研究の現状」「日中両国の高齢者における運動動機尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」「スポーツチームに所属する選手のパフォーマンス認知に影響を与える要因」「モチベーションビデオ視聴効果の検討」「運動に伴う感情変化の規定要因が運動前後および回復期の感情に及ぼす影響」「一流競技者のスポーツキャリア形成に及ぼす心理的要因の検討」「おもしろい質的研究をやるためには?」

#### <シンポジウム>

「体育やスポーツ活動で学んだことが、他の場面に般化するって、本当?」「チームワークの育成」「スポーツ活動の効果と般化：現実を理解し方法論を探る」

#### <キーノートレクチャー>

「スポーツにおける質的研究の活用」

#### <ラウンドテーブル・ディスカッション>

「自己決定理論および達成目標理論のスポー

ツ実践への応用」

#### <トークセッション>

「トップアスリートが語る自らの競技に対する動機づけ方略とメンタルトレーニング」

#### <ワークショップ>

「質的研究方法の実践～基本的な考え方と進め方～」「アイスブレイク」

また、スポーツ動機づけ研究会は、日本スポーツ心理学会の会員企画において、以下のシンポジウムやRTDを開催してきた。

2002年「動機づけ理論の現場への適用」

2004年「運動・スポーツと子どものストレスを考える-動機づけの視点から-」

2007年「動機づけ研究の方法論を考える：量的・質的研究の活用」

2008年「スポーツ動機づけと文化：日本人の特徴とは?」

2009年「内発的動機づけ、外発的動機づけの再考：自己決定理論をめぐって」

2010年「指導者の言葉かけと動機づけ」

スポーツ動機づけ研究会は、2012年に10周年を迎える。これまでの経緯を振り返り、新たな企画(第10回記念大会の開催、著書/訳本などの出版、合宿研修会および実践的ワークショップの開催、ホームページの作成など)を考えていきたい。会員相互の「情報交換」と「知的コミュニケーション」の円滑化、そして更なる発展のために!

## 2-2 スポーツ社会心理学研究会の活動

杉山佳生(九州大学)

スポーツ社会心理学研究会は、体育やスポーツにおける社会心理的な問題に関心を持つ研究者や学生が集まってできた研究会である。年次例会の開催、各種学会大会でのシンポジウムなどの企画、メーリングリストを用いた情報交換などが、主な活動内容となっている。メーリングリストへの登録者は、2011年9月現在、39名である。

本研究会は、1996 年の日本スポーツ心理学会第 23 回大会（仙台大学）において、社会心理学にまつわるワークショップを、阿江美恵子、伊藤豊彦、遠藤俊郎の 3 名で行ったのがきっかけとなって話が進み、メンバーが募られ、1998 年の日本体育学会第 49 回大会（愛媛大学）時に、第 1 回の例会が開催された。翌年の日本体育学会第 50 回記念大会（東京大学）では、「体育・スポーツ心理学における社会心理学的アプローチ」というテーマで、第 2 回の例会を兼ねたイブニングシンポジウムを行っている。その後、数年間にわたり、日本体育学会あるいは日本スポーツ心理学会の大会期間中に、年次例会を行ってきた。また、学会大会では、研究会メンバーによって、「子どもと社会のためのスポーツ社会心理学の構築」（日本スポーツ心理学会第 30、31 回大会）、「スポーツ選手のキャリア教育—実践現場からの提言」（同 32 回大会）などといったシンポジウムやラウンドテーブルディスカッションが企画・実施されている。加えて、2005 年にシドニーで開催された第 11 回国際スポーツ心理学会では、メンバー 4 名の連名で、「Japanese Social Psychology in Sport」という演題のポスター発表も行った（本件は、当初、ワークショップとして申し込んだのだが、残念ながら、ポスター発表に廻されてしまった）。

学会大会以外の活動としては、2006 年に、「Psychology for Physical Educators (1999)」の翻訳書「体育教師のための心理学」を、本研究会を翻訳者として発刊した。研究会として、これまでに最も労力を費やした活動と言ってよいかもしれない。2002 年の年次例会の際に翻訳することを正式決定しているので、足かけ 4 年にわたる作業となった（当初の発刊予定は、企画 1 年後の 2003 年であった）。本書の発刊翌年には、大幅に改訂され社会心理学的な内容がいっそう充実した原書第 2 版が発刊されてしまい、タイミングをはずしたのではという思いもあるが、本翻訳書の価値は、何ら下がるものではないと考えてい

る。

このように、これまで、研究会として様々な活動を行ってきたはいるが、ここ数年に限って言えば、活動がかなり低調となっていることは否めない。年次例会も、2010 年にスポーツ動機づけ研究会と合同で開催したものを除くと、最近は、実質的にはほとんど行われていないのが現状である。体育心理学専門分科会が 50 周年を機にさらなる発展を目指すのに合わせ、本研究会も、忘れがちであった学校体育の社会心理学的問題に改めて焦点を当てるなどして、活動の活性化を図りたい。

### 2-3 メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会の活動 高妻容一（東海大学）

この研究会は、1991 年にスウェーデンのオレブロ大学で開催された第 1 回国際メンタルトレーニング学会（その後は、4 年に 1 回開催）の意向を受けて、日本におけるメンタルトレーニングの普及活動の一環として 1994 年に日本支部会として発足した。2011 年現在まで、現場での実践や競技力向上を目的としたメンタルトレーニングや応用スポーツ心理学の情報交換を実施してきた。1994 年当時は、関西地区の体育心理・スポーツ心理学の研究者が 2 ヶ月に 1 回の研究会（例会）を実施していた。その中で、研究を中心とした従来の研究会に加えて、現場での実践を中心としたメンタルトレーニングや応用スポーツ心理学の研究会を発足したいと申し出て、許可をもらいスタートしたのがこの研究会であり、1994 年 7 月に第 1 回を開催した。その後、関西地区では、毎月 1 回の研究会を開催したが、多くの参加者が現場の指導者や選手であった。1995 年からは、指導者を中心とした専門分科会も始まり、毎月 2 回の研究会を現在も開催している。

初期のころは、メンタルトレーニングに関する勉強会や研究会もなく、学会においても

ほとんど取り上げられることはなかった。そのため、遠くは沖縄・福井・長崎・神奈川県からも参加があり、1997年からは北海道支部（名寄市）、沖縄支部（琉球大学：現在中止中）、愛知支部（愛知学院大学）、福井支部（県スポーツセンター）などでの研究会が始まった。2000年からは、東海大学に本部を置き、東海大学本部や関東支部（青山学院大学）においても活動がはじまった。2011年現在では、関西地区全体会と専門分科会、関東地区、北海道、福井、石川、富山、愛知、沖縄、栃木、静岡、長崎、秋田（中央・南部）の各支部会が発足し、基本的に毎月1回の開催をしている。また東海大学では、サッカー専門分科会や音楽専門分科会もでき、毎週・隔週の開催（大学休暇期間中以外）をしている。

国際メンタルトレーニング学会では、「メンタルトレーニングとは、身体的な部分に関わらない全てのトレーニングであり、ピークパフォーマンスとウェルネスを導くための準備である。スポーツのパフォーマンスや人生の向上をさせるための、ポジティブな態度、考え、集中力、メンタル、感情などを育成・教育することが中心である」と定義している。そこで、その定義を踏まえた上で、研究会の目的を「情報交換」とし、研究と現場をつなぐ架け橋的役割をにない、研究と実践のキャッチボールをすることにした。メンバーの多くは、現場の指導者や選手が多いのではあるが、毎年何名かは、日本体育学会・日本スポーツ心理学会・国際応用スポーツ心理学会などへ参加し、そこで得た情報を報告し、その内容を現場で実践するという活動を実施している。最近では、日本スポーツ心理学会の資格認定研修会や日本スポーツメンタルトレーニング指導士会が開催する研修会にも参加する者も多い。現在は、6名がスポーツメンタルトレーニング指導士・補の資格を取得し、質の向上に努めている。本年度・来年度は、3～4名が資格申請を希望している。

全国の研究会では、基本的に次のような手順での実施がされている。最初の約30分を使

い、自己紹介・情報交換（報告）を実施し、前の週に紹介した心理的スキルを選手や指導者がどう活用（トレーニング）し、その成果はどうであったかの報告がされる。具体的には、「試合のこんな場面で選手がこのようなプレッシャーを感じたが、このような心理的スキルを使い、気持ちをコントロールしてピンチを乗り越えた」などの実践報告が毎回される。次の30分～60分は、メンタルトレーニングを実践しているチーム（指導者・選手）が事例の報告（話題提供）をしている。たとえば、「このような方法でチームワークを高める試みをしたので、何名かでグループを作り実際に同じ方法を試して・ディスカッションしてください」というようなすぐ現場で活用できる内容がワークショップ形式で行われている。最後の約30分は、資格取得者がより実践的なワークショップや学会などで学んだ最新の情報を紹介している。参加者は、ここで学んだ知識やスキルを実践し、次の週に報告する宿題が出される。また多くの参加者が、研究会に参加することで「モチベーション」を高める機会にしていることも研究会後の感想紙から報告されている。

また毎年何回かは、特別ゲストによる話題提供をしてもらっている。たとえば、元読売巨人軍ジャイアンツアカデミーでコーチをした方から、少年野球指導における心理面指導やコーチとしての哲学の講演、また甲子園で優勝・大学野球で全国優勝をしたチームの選手の講演などを実施した。参加者からは、講演者が実践したメンタル面の強化の質問、全国大会でのプレッシャーに対する気持ちの持ちかたなどの質問が多く出ていた。さらに、各地区の研究会では、資格取得者の1日講習会を開催し、ある講習会では毎年1500名を超える参加者がある。

現場の指導者や選手は、学会に参加することは難しい事情があるため、学会等で紹介された研究や実践情報を提供すること、また現場で実践されている内容をどう理論や研究と結びつけるかという観点での情報交換がこの

研究会の大きな役割となっている。特に、毎年北米で開催される国際応用スポーツ心理学会には、必ず数名が参加し、世界的な動向における最新の情報を提供している。本研究会では、このような活動を行い「メンタルトレーニング」に関する現場での普及やレベルの向上に務めている。

## 2-4 運動学習研究会の活動 山本裕二（名古屋大学）

運動学習研究会は、麓信義先生（弘前大学）、工藤孝幾先生（福島大学）、伊藤政展先生（上越教育大学）の3先生が、「運動行動の心理学」（高文堂出版社）の執筆の際にはじめられた勉強会が発端と伺っています。その後、麓先生が同好の志を集めて、日本体育学会の学会大会において、1988年から3回の自主ワークショップを企画されました。そして、最後の3回目のワークショップの後で、継続的な研究会の必要性を感じていた十数名の仲間が集まり、運動学習研究会を旗揚げすることになりました。その会合での決定により、1991年5月12、13日に八王子の大学セミナーハウスで第1回の研究会がもたれ、17名の参加により運動学習研究会が正式に発足しました。

若手中心（その当時は）で始まった研究会でしたが、研究発表のやりっぱなしや建設的でない批判のための批判はしないという合意のもとで、十分時間をとった発表と討論を基本とし、発表後の建設的な批判とそれへの発表者の回答をワンセットとして記録に残すことを研究会の基本としました。当時は、一時間以上の発表・討論というのも珍しくありませんでした。現在まで毎年全国各地で開催される研究会では欠かさず報告集を出しており、2011年現在、第20号（2009年は新型インフルエンザの影響で、開催直前に無念の開催中止となりました）まで発行しています。

発足初期はPC-VANの掲示板（ご存じでない方がすでに多いと思いますが）を使っ

ていましたが、インターネットの普及に伴いメーリングリストを立ち上げ、その後ホームページも作成し（<http://www.htc.nagoya-u.ac.jp/~yamamoto/jmls/>）、会員間の情報交換は主にメーリングリストで行われ、研究会の案内等はホームページで行うようになっています。会則がなく、入退会は自由で、報告書の印刷費用として年2,000円を報告集と引き換えに徴収しています。

当初は、体育心理学を専門とする大学教員が主で、そこにバイオメカニクスの中でも学習に関心のある研究者（例えば、現在JISSにおられる宮地力先生など）や心理学の中でも身体運動に興味のある研究者（例えば琉球大学の道田泰司先生）が参加していました。徐々に各大学で大学院が整備されてきたことに伴い、大学院生を中心に参加人数が増え、多いときには50名近くの参加者があります。最近では特に理学療法士の方の参加が増えたのが特徴で、運動機能回復、再学習の際に運動学習の知見を取り入れようと懸命に頑張っておられます。また、この研究会に参加していた大学院生の方の中から多くの方が学位を取得され、第一線の研究者としてこの研究会だけでなく現在の体育心理学を牽引しています。会発足当時は運動学習領域においても英文雑誌への投稿もわずかでしたが、最近ではこの研究会に参加する方から多くの英語論文が出ています。

このように本研究会は、運動学習領域で一定の役割を担ってきたと自負しています。しかしながら、参加者（特に大学教員）の時間的制約から、「十分時間をとった発表と討論を基本」とするところが難しくなっているのも実情です。参加者数と時間の不均衡からくることです。しかし、研究を進めていくうえでは、研究を始めた動機や価値観までも問いながら進めていくことによって研究に深みが出てくると思われれます。そうした機会はなかなか他にないため、本研究会の存在意義はここにこそあるのではないかと感じています。

会の立ち上げから永年、本研究会の発展の

ためにご尽力いただいた麓先生が代表を降りられ、現在は私が代表となっていますが、本研究会も一つの「曲がり角」に来ているかもしれません。

最後に、興味のある方はホームページを見ていただき、さらに興味がわかればメーリングリストへの登録を [jmls-admin@htc.nagoya-u.ac.jp](mailto:jmls-admin@htc.nagoya-u.ac.jp) までお知らせください。

## 2-5 臨床スポーツ心理研究会の活動 鈴木 壯 (岐阜大学)

臨床スポーツ心理研究会は、星野公夫先生（当時順天堂大学）と中込四郎先生（筑波大学）が発起人となり、1991年に発足した。例年、年1回体育学会開催期間中に学会開催地で事例検討を主な目的として研究会を開催している。現在の事務局は岐阜経済大学の岸順治先生のところにならされている。

これまでの事例検討の内容は、スポーツカウンセリング、メンタルトレーニング、動作法、心理サポートなどの適用事例であり、広範囲の心理事例が検討されてきている。

研究会発足当時はスポーツ心理学領域で事例検討の機会がほとんどなく、年1回でも参加者にとっては貴重な研修の場になっていた。今後研究会を発展させていくには、事例報告や事例検討をどのようにして研究のレベルにしていくかが課題となると筆者は考えている。たとえば、心理スキルトレーニングを選手に一定期間適用し、対照群を設けて事前事後でパフォーマンスと心理指標を比較し、有意差があればその心理スキルトレーニングの有効性が示されたことになる。しかし、心理スキルトレーニングによって向上した心理スキルがどのようにパフォーマンスの向上に影響しているのか、パフォーマンスの変化と心理指標の変化とがどのように関連しているのか、どの時期・どのような状態のときに心理スキルトレーニングが有効であるのか、等については必ずしも明確ではない。また、統計的に

有意差が出たとしても誰に対しても有効とは限らない。スポーツカウンセリングについても同様であり、こういう方法で実施し、結果がこうだったといった結果報告だけでは、どのような経過で、どのようにカウンセラーが関わって心理的変容がもたらされたのかは不明確である。

以上の問題を解決するには個々の事例を詳細に検討し、そこから研究のレベルまでにしていくことが重要である。個々の事例の経過をたどることは、語りの内容の質の変化、トレーニング内容の変化、競技姿勢の変化、競技内容の変化、関係の質の変化等の経過をたどることになる。そして、そこに関わるアスリート個人の「全体」、そのアスリートの生き方そのものに目を向け、そこからひとつのストーリーが見ることになる。表面上は単なる事実の羅列に見えていても（聴こえても）、ひとつの物語として読み取れるものとなる。そこからカウンセリングやトレーニングの適用によってもたらされる心理的変化の要因、メカニズム等が明らかになっていく。それは、意味を読み取り、（個から）普遍へと至る道を考えていくことになる。

今後、事例報告や事例検討を進め、事例研究のレベルにまで到達させること、それが臨床スポーツ心理研究会を発展させていくことになるに違いない。

### 3. 体育心理学と SMT 資格制度について

#### 1) 体育心理学と資格

土屋裕睦 (大阪体育大学)

日本体育協会が認定するスポーツ指導者資格 (たとえば上級コーチ) に代表されるように、体育・スポーツ関係でも種々の資格が誕生しているが、現在までに体育学会が独自に認定している資格はない。スポーツ基本法が成立し、社会の関心や期待が体育学に集まる中、会員数 6000 名を抱える体育学会が、今後独自の資格認定を行う可能性はあるのだろうか? 応用科学を標榜する学術団体として、学会員が体得した知識や技術を「資格」によって認定することは意味のあることである。

実際には様々な分科会に所属する会員が中心となって、より専門的な学会を設立し、そこで資格認定を行う事例も増えている。このうち体育心理学と関連の深い資格を 2 つ挙げると、1 つは日本スポーツ心理学会認定「スポーツメンタルトレーニング指導士(補)」資格、そしてもう 1 つは日本臨床心理身体運動学会認定「認定スポーツカウンセラー」資格がある。前者の資格設立には杉原隆会員をはじめ、多くの体育心理分科会会員が関与し、初代の認定委員長には徳永幹雄会員が就いた。後者の学会は、中島登代子氏が理事長となっており、他にも中込四郎会員や鈴木壮会員が理事として関わっている。中島氏は、1991 年から 1992 年にかけて本学会大会において風景構成法に関する精力的な研究発表があり、この分野の開拓者の一人である。他にも、吉川政夫会員が理事を勤める日本健康心理学会にも「健康心理士」資格などもあるが、ここでは体育心理分科会とも関連の深い「スポーツメンタルトレーニング指導士(補)」資格について概説する。

「スポーツメンタルトレーニング指導士(補)」資格は、「日本スポーツ心理学会がスポーツ選手や指導者を対象に競技力の向上やスポーツの普及に貢献し、スポーツ心理学会の

研究と実践の進歩と発展に資するとともに、競技力向上のための心理的スキルを中心にした指導や相談等を行う専門家の養成をはかる」ことを目的に、2000 年から認定が開始された。指導実績、研修実績、研究業績のほか「資格取得講習会の受講」「スーパーヴィジョン」を認定要件とし、基礎資格として大学院修士修了までの 6 年間の教育を前提としていることから、医師免許や臨床心理士受験資格の年限に等しい。この基準が厳しすぎるのではないかとの議論はたびたび行われてきたが、科学的知識に裏づけられたメンタルトレーニング指導のためには、上記の基準が必要であるとの認識が守られてきた。このことは、自称メンタルトレーナーやメンタルコーチの一部が効果の疑わしい方法を用いて指導にあたり、競技現場にも混乱が認められていた中で資格認定であったこととも関連している。2011 年現在、資格取得者は 100 名を超えており、体育心理学専門分科会名簿 (2010 年版) を用いて照合すると、そのほとんどが分科会会員であった。後者の「認定スポーツカウンセラー」資格が、体育学出身者以外に精神科医や臨床心理士にも認定されていることを考えると、「スポーツメンタルトレーニング指導士(補)」資格は、体育心理分科会と関係の深い資格、ということができる。

他方、この資格認定の背景には、海外の動向との関係も深い。この点については、本稿の後に磯貝会員が報告しているので参照されたい。このように、より専門化・細分化された学術団体が資格認定を行うことは、学会活動の社会的認知を高めると同時に、社会的責任を果たすことにもつながる。50 周年の節目にあって、資格認定を 1 つの軸として関連する学会、たとえばスポーツ心理学会との異同を明確にすることは、本分科会の存在意義を再確認することにもつながるだろう。参考までに冒頭で紹介した日本体育協会の認定する資格には、スポーツ指導員のほか、フィットネス資格、マネジメント資格、体力測定資格などがあり、そのうちメディカル・コンディ

ショニング資格には、スポーツドクター、アスレティックトレーナー、スポーツ栄養士が揃った。体育学会の各専門分科会との対応から見て、ここに体育・スポーツ心理関連資格がないことは少し不思議に感じるのは筆者だけであろうか。

## 2) 資格制度の海外の動向 磯貝浩久（九州工業大学）

体育心理学と関連する資格として、SMT 資格制度（スポーツメンタルトレーニング指導士（補））がある。この資格制度は、海外の様々な学会の資格認定に対する考え方や資格制度を参考に制定された。特に、アメリカのスポーツ心理学関連学会の影響を受けている。

スポーツ心理学の研究や実践の領域について、応用スポーツ心理学会、北米スポーツ心理学会、アメリカオリンピック委員会、アメリカ心理学会の関係者の会議が 1982 年にもたれ、1) 教育スポーツ心理学（競技力向上の心理的スキルの指導を中心）、2) 臨床スポーツ心理学（摂食障害など異常行動を中心）、3) 研究スポーツ心理学（研究機関での研究や教育を中心）という分類が確認された。この分類をもとに、様々な学会において実践や資格のあり方が検討されてきた。

応用スポーツ心理学会（AASP）についてみると、スポーツ心理学の実践や応用を志向して 1986 年に設立されたが、6 年後の 1992 年にはメンタルトレーニングや心理的サポートを統合した「心理的コンサルティング」という名称で資格制度を開始している。この資格は上記と対応して、1) スポーツ心理学の専門家が行う競技力向上を意図したコンサルティング、2) 臨床スポーツやカウンセリングの専門家が行うコンサルティング、3) 大学の研究者が研究・教育を目的に行うコンサルティングの 3 つの分野から認定される。

AASP の今日的課題について、Roberts 会長は昨年筑浪大学で行われた講演で 20 年を振り返り、資格制度により実践活動が盛んに

なる一方で、研究者が AASP に魅力を感じなくなっていることを指摘され、研究者と実践家の連携を取ることが課題だと報告された。また、スポーツ現場から信頼を得るためには、心理学の知識だけでなく、スポーツ科学の理解が不可欠であると強調された。SMT 資格とは直接関係のない我々分科会であるが、スポーツ科学を扱う体育学会の一分科会として位置していることを考えると、資格との繋がりがあっても感じられるし、また別の観点から資格について考えても良いように思われる。



## 第4章 体育学としての体育心理学の学問的位置づけと、

### これからの体育心理学

本章では、体育学としての体育心理学の学問的位置づけを明確にし、これからの体育心理学の方向性を考えるきっかけになることを願って構成しました。

まず、体育心理学専門分科会の発足から25年までの成果と課題を概観し、次いで今日までの成果と課題について、既発表の資料を基に考えてみました。それから、我が国の体育心理学の学術的構造を示す「体育心理学」のテキストを、初期のものから最新のものまでを取り上げて、その構造の変化と研究課題の変化を比較し、「体育心理学」の役割を考えました。また、体育心理学研究の変革の一端を担った「運動イメージ」研究を取り上げてみました。



## 1. 25年までの成果と課題

### 体育学研究の成果と課題（体育心理学）

和田 尚（大阪大学）

鷹野健次（大阪体育大学）

目的：第1回体育学会が開かれてからの25年間の体育心理学に関する研究の成果をまとめ、その結果と今後の課題を考察する事を本研究の目的とする。本研究が今後の体育心理学研究発展のための一資料になればと願っている。

方法：過去25年間の研究の成果をみるため、次の5種類の資料を整理した。①体育学会発表論文、②体育学研究原著論文、③紀要論文（体育関係以外の研究誌も含む）、④体育の科学、⑤単行本。以上の資料を各年代ごとに分類し、さらに研究の動向をみるため5年間単位でまとめた。そして各区間の主要論文を抽出した。次に保健体育実践への応用的成果をみるため、学会発表論文を中心にその関心度を3段階に分類した。また研究の動向を別の角度からみるため、研究の指向性と研究方法及び対象をも同時に分類した。

結果①成果：研究領域の分類については本研究と同種の過去の文献や体育心理学関係の本及び教育心理学や心理学関係の文献をもとに次のように設定した。

舞踊に関する心理学的研究については分類が困難であったので別にまとめた。表1に分類表を示す。全体では適応に関するものが41.2%、学習に関するものが24.0%で両方合わせると65.2%をしめている。さらに舞踊に関するものを含めるとその比率は70%を超えるものと思われる。そして適応では性格に関するもの、学習では反応に関するものが特に多かった。全体のうち心理学的研究は14%であった。次にこれらを保健体育実践への関心度により分類したのが表2である。全体では体育実践との結びつきが察知できるものは37.7%であるが直接結びつく研究は4.3%と非常に少ない。

体育心理学専門分科会員に依頼して各大学の心理に関する紀要論文を中心に集めた結果、26校40数名の会員から144の論文が集った。その分類結果を表3に示す。1966年以降急に論文数が増え領域別では学会発表と同じ傾向であった。体育学研究の原著論文については心理学に関するものが86あり、体育の科学には156あった。いずれも他の分類結果と同じ傾向がみられた。体育の科学では体育心理学に関する特集が10回程度なされている。体育心理学に関する単行本については33冊出版されており、その内分けは概論書17、コーチ・指導に関するもの6、その他10である。33冊のうち翻訳書は7冊である。

体育心理学の研究領域の分類表

発達	学習		適応		指導	舞踊(表現)	その他	
	A	B	C	D			E	F
運動 身体 精神 その他	運動学習 学習能 学習過程 その他	知覚 反応 その他	性格 態度 適応 その他	集団 人間関係 その他	指導法 セラピー カウンセリング 評価	表現 鑑賞 創作過程 その他	生理学的心理	その他

表 1 発表論文の年代別体系的分類表 (%)

回	総発表数	発心理学的	発達	学習		適応		指導	(表現 舞踊)	その他	
				A	B	C	D			E	F
1	51	13(25.5)	4	2	1	5	0	0	1	0	0
2	104	11(10.6)	0	1	5	2	0	1	2	0	0
3	149	20(13.4)	4	1	2	7	3	1	2	0	0
4	183	27(14.8)	4	2	1	11	6	0	3	0	0
5	174	27(15.5)	2	3	4	8	2	3	5	0	0
6	237	36(15.2)	3	3	4	8	7	7	3	0	1
7	254	47(18.5)	1	6	5	12	6	1	14	0	2
8	252	43(17.1)	9	4	3	9	3	1	12	0	3
9	276	38(13.8)	1	3	8	11	4	0	9	0	2
10	340	61(17.9)	5	5	7	21	6	2	13	2	0
11	320	59(18.4)	6	10	7	11	8	3	8	3	3
12	430	77(17.9)	4	10	9	29	2	5	13	3	2
13	359	61(17.0)	4	5	8	24	5	3	5	6	1
14	422	67(15.9)	1	4	10	29	5	5	11	1	1
15	305	56(18.4)	5	5	6	23	4	2	9	2	0
16	446	59(13.2)	1	4	9	25	4	7	5	3	1
17	558	73(13.1)	7	6	11	20	6	10	10	2	1
18	671	75(11.2)	10	9	7	27	4	6	8	2	2
19	752	89(11.8)	8	14	16	29	4	7	7	0	4
20	689	86(12.5)	7	9	13	28	2	8	3	2	4
21	710	100(14.1)	9	10	15	38	4	9	12	0	3
22	569	64(11.2)	4	4	10	25	4	6	9	0	4
23	554	66(11.9)	6	5	15	24	2	4	7	0	3
24	455	51(11.2)	11	3	8	24	0	2	2	0	1
25	563	61(10.8)	12	5	12	22	1	2	3	1	3
計	9823	1377(14.0)	128(9.3)	138(9.7)	196(14.3)	472(34.5)	92(6.7)	95(6.9)	186(13.6)	27(2.0)	41(3.0)

② 動向：学会発表論文を5年単位でまとめると総発表数に対する心理学的研究の比率は減少の傾向にあることがわかる。領域別では学習に関する研究（特に認知と反応に関するもの）の増加傾向に対し、社会心理学的研究の減少傾向がみられる。学会発表傾向とシンポジウムのテーマとの関連は少しはあるよう

にみえるが顕著ではない。

研究の指向性については研究の対象場面を知るため次の3つに分類した。①学校体育②スポーツ③その他（運動の心理的現象 etc）そして10年間隔で5年間単位でまとめたのが図1である。図より学校体育を指向する研究は減少する傾向があり、その他の2方向への指向は増加の傾向にあることがわかる。

表 2 保健体育実践への関心度による分類 (%)

関心度 回	体育実践に直接結びつくもの	体育実践への結びつきが察知できるもの	体育実践への結びつきの考えられるもの	合計
1~5	2(2.0)	30(30.6)	66(67.3)	98
6~10	8(3.6)	96(42.7)	121(53.8)	226
11~15	13(4.1)	109(34.1)	198(61.9)	320
16~20	25(6.5)	117(30.6)	240(62.9)	382
21~25	12(3.5)	105(30.7)	225(65.8)	342
合計	60(4.3)	457(33.4)	850(62.2)	1368

表 3 紀要論文の年代別分類 (%)

	発達	学習		適応		指導	その他	合計
		A	B	C	D			
1951~1955	1	0	0	0	0	1	0	2
1956~1960	1	0	1	3	0	0	1	6
1961~1965	4	2	5	5	1	4	1	22
1966~1970	3	5	12	11	7	5	8	51
1971~1975	14	7	16	17	3	1	5	63
合計	23(16.0)	14(9.7)	34(23.6)	36(25.0)	11(7.6)	11(7.6)	15(10.4)	144

研究方法についてみると全体的には実験が約 30%で最も多く、次いで検査、測定、質問紙の順であった。実験は年々増加の傾向にあり、測定、検査は減少傾向にあった。研究の対象については 21 回～25 回大会の 5 年間に ついて調べた結果、大学生が 36.6%で最も多 く、次いで高校生 (15.0%)、中学生 (13.1%)、 その他 (12.8%)、小学生 (12.2%)、幼児 (10.3%) の順であった。

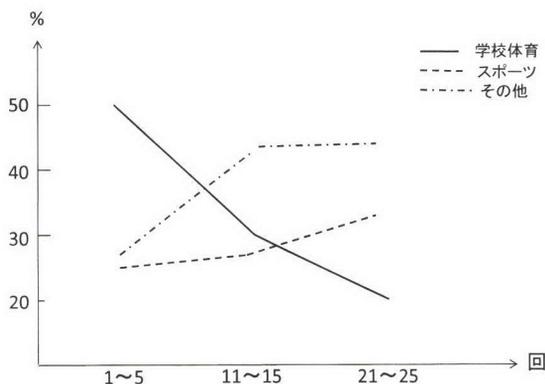


図1 研究の指向性

考察：以上の結果をもとに次の4つの観点から研究の課題の考察をした。

- ①研究成果の定着：一般に研究は新しい事に目が向けられがちであるが、体育の研究もその例外ではない。体育学研究の歴史が浅いため、これまで人と異なった研究をしようとテーマを求めてきたようである。一連の継続研究の少ない事実もそれを実証している。今後は、過去の成果をみ直し積み上げる研究が期待される。
- ②研究の指向性と研究内容との関係：研究内容を考える時、その研究が何に指向しているかを同時に考えることにより様々な問題があるのに気づく。たとえば発達や学習に関する研究についても、今まで運動や身体の心理的現象だけに指向していたものを学校体育に注意を向けることにより、教材やカリキュラムの問題、あるいは学習指導の問題の研究に結びつく。このように研

究の指向性と内容との関係をつきつめて考えることが、体育心理学の独自性を考える1つの糸口になると考えられる。

- ③実践的(臨床的)研究の不足：表2に示す通り実践的研究は非常に少ない。特に学習や指導に関する研究は長期にわたる実験的研究が要求されるが、現在十分にされていない。現場との関係をより密接にすることにより、実践的研究の質や量が増すであろう。図1に示すように学校体育に指向した研究は減少の傾向にあるが、学校での体育授業場面を研究テーマ提供の場として考えることも重要であろう。
- ④研究に対する姿勢：体育心理学は心理学の理論を用いての研究である以上、様々な理論を十分研究に応用すべきであり、活用の際には一層深く原理を理解し用いるべきである。統計的処理についても同様のことがいえる。又器具器材を用いる場合も、新しい器具があるから用いるという受動的な姿勢ではなく、研究目的の手段としての器具器材を考案するぐらいの積極的な姿勢が求められる。舞踊に関する研究は多くの心理的要素を含み問題も増加すると考えられる。今後は今まで以上に多くの人々がこの問題に取り組み、表現としての舞踊を様々な角度から研究されるよう期待したい。

今回初めての試みで各大学の紀要論文を中心に体育関係以外の研究誌の論文を集めたが、かなりの成果があったと思われる。これを機会に、これらの論文を一カ所に収集し保存していけるようなシステムの構築も考える必要があるだろう。

## 2. 50 年までの成果と課題

橋本公雄（九州大学）、伊藤豊彦（島根大学）

はじめに

体育心理学専門分科会が設立されて平成 23（2011）年で 50 周年を迎えた。そこで、この 50 年間の本専門分科会の研究の成果を概観し、今後の課題を提示することにする。ただ、本専門分科会の設立から 25 年間（昭和 37（1962）年～昭和 61（1986）年）の研究成果と課題に関しては、すでに前項で和田尚先生と鷹野健治先生が詳細にまとめられているので、ここではそれらを踏まえつつ、50 年間の研究の動向をみながら、新たな課題を見出していきたい。

1. 25 年前の体育心理専門分科会の課題解決  
分科会設立当初からの 25 年間の研究成果を踏まえた体育心理学研究の課題として、下記の 6 つが挙げられている。

- ①継続的な研究の促進と研究成果の定着化
- ②体育心理学の独自性を見出すための研究の指向性と研究内容の吟味
- ③学校体育場面をフィールドとする実践的・臨床的研究の促進
- ④研究方法（理論適用、統計法、器具など）に対する能動的・積極的姿勢での取り組み
- ⑤多くの心理的要素を含む舞踊の研究の促進
- ⑥体育心理学に関連する紀要論文の集約化

上記の 6 つの課題、つまり「研究成果の定着化」「体育心理学の独自性の探求」「実践的・臨床的研究の促進」「研究法に対する能動的姿勢」「舞踊研究の促進」「紀要論文の集約化」、どれ一つとっても体育心理学の発展には欠かせない重要な課題である。しかし、その後の 25 年間でこれらの課題は解決されたのである

うか。「舞踊研究の促進」「紀要論文の集約」などはまったく手はつけられていないし、「実践的・臨床的研究の促進」や「研究法に対する能動的姿勢」、あるいは継続的研究による「研究成果の定着化」や「体育心理学における独自性の探求」も実に心もとない。この原因はこれらの課題に対し真正面からその解決に向けて本専門分科会が取り組んでこなかったからであろう。しかしこれとは別に、体育心理専門分科会における研究は、今日、会員数の増加や発表演題数の増加もあり、着実に進展していると思われる。

そこで、ここには多くの資料はないが、シンポジウムのテーマ、発表演題数、学会賞受賞数などから体育心理学研究における動向をみていくことにする。

## 2. 体育心理学研究の動向

### 1) シンポジウムテーマの変遷

シンポジウムのテーマはその時のアップデートな話題や課題を反映している。また、25 周年の研究成果でも記述されているように、学会発表内容の傾向とも関係していると思われる。よって、体育心理学における研究の動向もシンポジウムのテーマである程度把握できるだろう。表 2-1 に第 1 回から第 50 回までの学会大会における体育心理学研究のシンポジウムのテーマとコーディネーター（司会）の一覧を掲載した。

シンポジウムテーマはコーディネータを誰が行うか、つまりどういった専門領域の人が行うかによって決まる。テーマを理事会の中で検討して設定しているのであれば、本専門分科会の意向は反映されるが、コーディネータを先に決めていけば、その方の研究領域の範疇でテーマが決まる。古くはどのような形でテーマが設定されているかは定かではない。

前半の 25 年間は結構運動学習に関するシンポジウムが開催されている。このことから分かるように、本専門分科会は初期には東京教育大学に事務局があり、運動学習を中心として発展してきたといえる。しかし、その

後の25年間は、競技スポーツにまつわる心理的問題や健康や人間の成長にかかわる心理的問題を扱うなど多様化しており、テーマも単発か2年連続ものが多い。たとえば、動機づけ、メンタルトレーニング、心理的スキル、運動・スポーツの心理的効果、体育授業における体育心理学の役割、心理的成長、等々である。そこには本専門分科会として「何か」をリードしていくような課題に取り組むといった系統的なテーマは見受けられない。ただ、この25年間における競技スポーツのパフォーマンス向上にかかわるスポーツ心理学研究や一般社会人を含めた健康・体力の向上にかかわる健康運動心理学研究の発展が体育心理学専門分科会の研究内容にも反映しているように伺える。この最大の理由は、日本スポーツ心理学会と体育心理専門分科会の会員がほぼオーバーラップしているためであろう。

日本スポーツ心理学会では、平成12年にスポーツメンタルトレーニング指導士の資格認定制度が設けられ、この資格取得のために多くの若手の教員や大学院生が参加し、会員の増加と同時に研究発表の増加をもたらしている。この日本スポーツ心理学会の研究活動が体育心理学専門分科会の研究にも影響しており、特に近年の発表演題数をみると、80-90演題と安定している。シンポジウムのテーマもスポーツ集団、心理的スキル、目標設定、メンタルトレーニングに関する内容が検討されているが、明らかに、スポーツ心理学の発展が本専門分科会のシンポジウムテーマに反映しているのである。体育心理学の独自性とは何か、スポーツ心理学との差異は何か、といった問題は解決しないままに本専門分科会は進展しているといえる。

また、1980年代から1990年代にかけて世界的には機関誌の名称がスポーツ心理学研究から運動・スポーツ心理学研究へと改称されているように、スポーツ心理学はスポーツ競技力向上を扱うスポーツ心理学と健康やQOLを扱う健康運動心理学に大きく分化が進んでおり、これらを統合した形でスポーツ心理学

が成立している。わが国では健康運動心理学領域の研究はそれほど拡大しているとはいえないが、これら健康運動心理学研究の動向も体育心理専門分科会シンポジウムのテーマに反映されているようである。ところで、1998年にはAPAの会長となったSeligmanがポジティブ心理学の運動を起こし、北米ではスポーツ心理学のほうでもこのテーマに関する研究は進んでいるが、本シンポジウムでは平成18年(2006)度に一度だけ取り上げられている。ポジティブ心理学では、ポジティブ特性、ポジティブ感情、ポジティブな制度をキーワードとしているが、これらの研究もスポーツ心理学のみならず体育心理学の研究領域においても促進していくことは興味深い。また近年、ライフスキル、コミュニケーションスキル、社会スキルなどスキル向上系の研究に関するシンポジウムも取り上げられているが、強いスポーツ集団づくりもさることながら、体育学習におけるスキル教育の隆盛を彷彿させるものがある。

以上、シンポジウムのテーマから体育心理学研究の動向とそれを取り巻く環境について述べてみた。学会大会における研究発表やジャーナル(機関誌、紀要等)を詳細に分析していけば、また異なった成果と課題が見出せたかもしれないが、ここでは限られた資料からの考察であり、不十分さは否めないであろう。

表 2-1 シンポジウムおよびコーディネーター (司会) 一覧

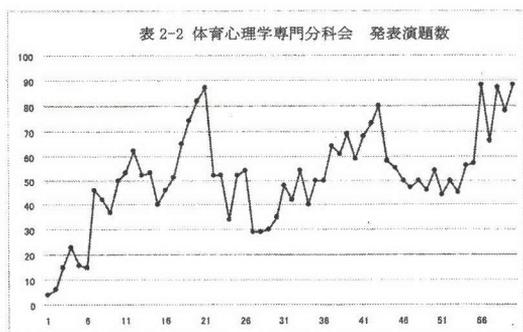
回	年度	西暦	シンポジウム	コーディネーター(司会)
	昭和	34	1959	
		35	1960	
		36	1961	
1		37	1962 体育における生活指導	
2		38	1963 スポーツマンの性格特性について	
3		39	1964 スポーツマンの性格特性について	
4		40	1965 運動の学習過程について	
5		41	1966 運動学習に関する諸問題 I	
6		42	1967 運動学習に関する諸問題 II (技術習得過程におけるイメージの役割)	
7		43	1968 運動学習に関する諸問題 (運動学習における個人差)	
8		44	1969 スポーツにおけるカウンセリングとスポーツセラピー	
9		45	1970 スポーツセラピーをめぐって -事例と理論-	清原健司(早稲田大)、太田哲男(順天堂大)
10		46	1971 体育心理学研究の課題	
11		47	1972	
12		48	1973	
13		49	1974 体育における態度変容の問題	加賀秀夫(筑波大)
14		50	1975	
15		51	1976	
16		52	1977 子どもの身心の発達と学習	円田善英(日体大)
17		53	1978 子どもの身心の発達と学習 -運動学習と感覚	鷹野健次(大阪体大)
18		54	1979 運動学習研究の諸問題 -理論と実践のかかわり合い-	松田岩男(筑波大)
19		55	1980 運動学習の諸問題(2) -運動遅滞児の学習・指導-	近藤充夫(東京学大)
20		56	1981 運動学習の諸問題(3) -障害者の学習・指導:肢体不自由者の場合-	柏原隆三(大阪教育大)
21		57	1982 運動学習研究の諸問題(4) -その方法論的課題:実践のための提案-	猪俣公宏(名古屋大)、和田尚(京都教育大)
22		58	1983 運動学習研究の諸問題 -臨床心理学的アプローチの可能性-	加賀秀夫(お茶の水女子大)、長田一臣(日体大)
23		59	1984 集中力をめぐる諸問題	佐久本稔(福岡女子大)
24		60	1985 集中力をめぐる諸問題(2)	近藤充夫(東京学大)
25		61	1986 集中力をめぐる諸問題(3) -陸上競技フィールド種目における集中力-	市村操一(筑波大)
26		62	1987 学校体育・スポーツの問題と体育心理学研究の課題	円田善英(日体大)
27		63	1988 体育学習における動機づけのあり方	杉原隆(東京学芸大)
28	平成	元	1989 高齢者の健康観, 価値観を含む内発的動機づけ	山崎勝男(早稲田大)
29		2	1990 スポーツ運動の心理的効果について	猪俣公宏(上越教育大)
30		3	1991 ストレスホルモンから運動の心理的効果をさぐる -中高年の運動の意義-	徳永幹雄(九州大)
31		4	1992 スポーツをとしての環境教育の可能性を探る -体育心理学の新たなパラダイム-	市村操一(筑波大)
32		5	1993 より効果的なメンタルトレーニングを求めて	星野公夫(順天堂大)
33		6	1994 優れたスポーツ集団をつくるための心理的スキルをめぐって	船越正康(大阪教育大)
34		7	1995 運動制御の生態学的アプローチ	調枝孝治(広島大)
35		8	1996 体育・スポーツ指導における自信の高め方 -目標設定を中心に-	杉原隆(東京学芸大)
36		9	1997 運動部活動における体育心理学領域からの諸問題及び研究課題	中込四郎(筑波大)
37		10	1998 大学・大学院における「体育心理学」教育の課題およびネットワーク化	佐久間春夫(奈良女子大)
38		11	1999 体育・スポーツ心理学における社会心理学的アプローチ	伊藤豊彦(島根大)
39		12	2000 シンポジウム開催なし	
40		13	2001 体育授業における体育心理学の役割~からだと心の教育を考える~	和田尚(京都教育大)
41		14	2002 体育授業における体育心理学に役割 -運動学習の視点から教育を考える-	麓信義(弘前大学)
42		15	2003 スポーツとコミュニケーション -身体とことばをつなぐスキルトレーニング-	橋本公雄(九州大)
43		16	2004 こころの成長・発達と身体活動 -これからの体育の課題-	阿江美恵子(東京女子体育大)、土屋裕睦(大阪体大)
44		17	2005 生きる力の育成:体育心理学からの問題提起	賀川昌明(鳴門教育大)
45		18	2006 体育・スポーツ・健康教育におけるポジティブサイコロジーの視点	橋本公雄(九州大)
46		19	2007 モチベーションを高める指導法	高妻容一(東海大)
47		20	2008 体育・スポーツ場面における個人差・パーソナリティ要因に関わる研究の課題	中込四郎(筑波大)
48		21	2009 体育心理学の体育授業への貢献	西田保(名古屋大)
49		22	2010 若者研究者からみた体育心理学研究の現在と将来	西田保(名古屋大)
50		23	2011 子どもの運動促進を考える	伊藤豊彦(島根大)

## 2) 学会発表演題数の変遷

ここでは、体育心理学研究の成果を検討するために、学会発表の演題数の変遷という量的な側面からこれまでの成果を振り返ることとする。ただし、各学会大会における発表演題数は、大会会場や一般研究発表に割り当てられた時間等により一定の制約があることは言うまでもない。

第1回からの専門分科会発表演題数の変化を示したものが表2-2である。

これを見ると、約20年をサイクルに大きく



3つの段階が見て取れる。まず、第1回大会ではわずか4件であった演題数が徐々に増加傾向を示し、21回大会(1970)では87件と一度ピークを迎える。新制大学の発足後、大学体育の必修化や教員養成学部の充実が相俟って、体育心理学分野の教員も増加し、それらの教員が意欲的に研究に取り組んでいった様子が窺える。

しかし、その後は一転して演題数が減少し、一時期30件を割った演題数が再び80件にまで回復するのは約20年後の43回大会(1992)

を待たねばならない。演題数が大きく減少した理由は不明であるが、その後の回復は、大学院設置に向けた研究意欲の向上がその背景にあると考えられる。

さらに、44回大会(1993)には、再び減少に転じるものの、20年後の55回大会(2005)で3度目のピークを迎え、その後今日に至るまで、演題数は比較的安定した状態を保っている。新しい研究科、特に博士課程の設置が相次いだこと、それに伴い若手研究者が増加したこと、学会におけるポスター発表が導入されたことなどによる影響が大きいと思われる。また、日本スポーツ心理学会におけるスポーツメンタルトレーニング指導士制度がスタートしたことが、本分科会会員の増加につながり、ひいては、近年の発表演題数の増加と定着化に貢献していることも大きな要因として考えられる。

学会における発表演題数は、必ずしも研究の質を反映するものではないが、会員各位の研究に対する意欲、あるいは分科会全体としての活性化を反映する重要な指標である。このような意味で、近年の演題数の増加・安定は望ましい傾向にあると考えられる。学校体育、競技スポーツ、健康運動といった様々な領域において、会員相互が切磋琢磨しながら、優れた研究成果を発信していくことが求められる。

## 3) 学会賞・研究奨励賞の受賞

ここでは、学会賞・奨励賞の観点から、これまでの成果を振り返ることにしたい。

まず、日本体育学会における学会賞・研究奨励賞は、日本体育学会60年記念誌によれば、①大谷研究奨励金(1964年～)、②日本体育

表 2-3 研究奨励金および学会賞受賞者一覧

年次	種別	氏名	所属機関	研究題目
1964	大谷	藤善 尚憲	天理大学	スポーツマン的性格について
1976	大谷	大城 宜武	沖縄国際大学	舞踊の認知構造について
1979	大谷	西田 保	名古屋大学	運動負荷の主観的強度とパーソナリティ要因との関連性
1984	大谷	杉本 厚夫	広島大学	スポーツ集団における潜在的逸脱行動の通時的研究
		鶴原 清志	名古屋大学	運動経験による運動イメージの質的差異について
1997	奨励賞	樋上 弘之	筑波大学	中・高齢者の運動実施を規定する要因：心理的要因を中心に
1999	奨励賞	土屋 裕睦	大阪体育大学	大学新入運動部員をめぐるソーシャル・サポートの継続的検討：バーナウト抑制に寄与するソーシャル・サポートの活用方法
2010	奨励賞	村山 孝之	広島大学	「あがり」の発現機序の質的研究
2011	奨励賞	田中 美史	帝塚山学院大学	プレッシャーがボールバウンド課題に及ぼす影響

学会研究奨励金（1986年～）、及び③日本体育学会学会賞・奨励賞（1992年～現在に至る）の3つに分けることができる（なお、大谷研究奨励賞が体育心理学専門分科会設立25年、日本体育学会研究奨励金制度に変更後、現在までが、設立50年にほぼ対応している）。

本会員のうち、上記学会賞・研究奨励賞の受賞者は表2-3とおりでである。

まず、藤善尚憲氏（天理大学）が栄えある第1回大谷研究奨励金を受賞している。その後、1976年に沖縄国際大学の大城宜武氏、1979年に名古屋大学の西田保氏、1984年に広島大学の杉本厚夫氏、1984年には名古屋大学の鶴原清志氏がこれに続き、全受賞者24名のうち、本会員の受賞者は5名（20.8%）となっている。

次に、日本体育学会研究奨励金の全受賞者は、7名を数えるが、残念ながら、本会員からの受賞者はいない。

最後に、日本体育学会学会賞・奨励賞の創設後、学会賞の受賞者はいない（16名中0名）ものの、奨励賞では、1997年には、筑波大学の樋上博之氏、1999年には、大阪体育大学の土屋裕睦氏、2010年には広島大学の村山孝之氏、2011年には、帝塚山学院大学の田中美吏氏が受賞し、全受賞者17名中4名（23.5%）を占めている。

以上、延べ9名に及ぶ受賞者の研究は、専門分科会を超えて日本体育学会として授与されたものであり、本分科会の研究成果を示す重要な研究として位置づけられるものである。

本分科会の研究成果は、これ以外にも学術刊行物（著書や学術論文）、研究成果報告書、一般啓蒙書など、多くの会員による優れた成果が蓄積されていることも事実であるが、学会賞は体育学会における本分科会の研究成果を示す重要な指標の1つであり、今後とも、優れた研究を実践することにより、本分科会会員から一人でも多くの受賞者を排出することが期待される。

## まとめ

体育心理学研究の成果と課題をまとめるとつぎのとおりである。

## <成果>

### 1. 体育心理専門分科会会員数の増加

日本体育学会の各専門分科会の会員数は軒並み減少しているにもかかわらず、本専門分科会だけが会員数が増加している。この背景にはスポーツ心理学会の事業の一環としてスポーツメンタルトレーニング指導士の資格認定制度を設けたことによるところが大きいと考えられる。この資格取得を目指した若手の研究者や大学院生が本専門分科会の会員として入会しているため会員数が増加していると考えられる。

### 2. 学会発表演題数の増加

ここ5年間の学会発表数は90演題前後と多く、比較的安定している。この理由は、多様な大会プログラムもさることながら、やはり大学院生や若手研究者の増加が大きな要因であろう。

### 3. 体育心理学研究の多様化

はじめの25年間は運動学習系の研究が主流であったが、現在ではその研究内容は学校体育や競技スポーツなどにおける心理的問題が扱われており多様化している。

### 4. 大学体育授業研究の増加

1991年に大学の大綱化が答申され、多くの大学で体育は選択化されてきた。しかし、今日の学生の心理的、社会的、身体的な健康・体力の問題が惹起し、必修化に戻す大学も出始めている。このような時代背景のもとに大学体育授業を通じてコミュニケーションスキル、ライフスキル、メンタルヘルスなどさまざまな効果検証を意図した研究が進められている。

## <課題>

### 1. 学会賞の受賞者の増加

日本体育学会では、当該年度の英文誌（International Journal of Sport and Health Science）や和文誌（体育学研究）に掲載され

た優れた論文や学術書に対して学会賞や学会奨励賞を授与しているが、この受賞者が極めて少ない。少ない理由として「多様な分科会を抱える体育学会の性質上」やむを得ない側面もあるが、本分科会の存在価値を高めるためにも増加させることが求められる。

## 2. 二次出版の活用

和文誌のアクセス件数は諸外国からはほとんどないので、論文が掲載されたとしても海外への情報発信には繋がっていない。日本体育学会では二次出版（和文投稿論文の英文化、その逆）を認めているので、今後は和文誌に投稿された論文を翻訳し英文誌への再掲載を促進する。

## 3. 体育心理学とスポーツ心理学の差別化

体育心理専門分科会とスポーツ心理学会の区別がなされていないので、研究内容は類似している。よって両者の差別化を図る必要もあるかもしれない。このことによって、体育心理専門分科会ではより体育教育や運動学習にかかわる心理的な問題を扱うことになるであろう。

## 4. 外部資金獲得への挑戦

近年いくつかの研究グループ（臨床系、運動学習系、動機づけなど）が定期的な活動を行っている。こういったグループの共同研究を促進するため、科研費などの外部資金を獲得するために積極的に申請を行ってはどうかと思う。このことにより、体育心理学研究の深化と継続した研究による成果の蓄積も進むことであろう。

最後に、この50年間の体育心理学研究の成果をシンポジウムと発表演題数の推移から概観し、いくつかの課題を提示してみた。しかし、前回の25周年における課題の解決はなされていないのと同じようにここで提示した課題が単なる課題としての記載に終わるのであれば、課題は解決されないであろう。専門分

科会のさらなる発展を期していくために、理事会でこれらの課題を精査し、具体的に解決に向けた働きかけをする必要があると思われる。しかし、研究はそのときの動向があり、研究者は各自の興味・関心のある領域で進められるため、本分科会が課題解決に向けてリーディングしたとしても難しい側面があると思われる。

願わくは、ここで提示された課題が少しでも解決される方向に進めば幸いである。

## 3. 「体育心理学」テキストからみた体育心理学研究の位置

石井源信（東京工業大学）

日本体育学会が発足した1951年から11年後に体育心理学、運動生理学、キネシオロジーの3つの専門分科会が設立されて、50年が経つ。最初に発足した理由としては、それまでに長い研究の歴史があったこと、1958年に体育心理学研究会が発足していたことが関係していると言われる（日本体育学会60年誌）。

そもそも心理学は20世紀に確立した学問であり、科学的な心理学を構築したのはドイツのヴント（Wundt, W., 1832-1920）であるといわれる。1879年にライプツヒヒ大学に世界で初めての心理学実験室を創設し、さまざまな実験が行われた。そのなかには現代でも重要な研究対象である反応時間の実験も含まれていたという。

1923年には大河内泰が「運動心理」、1924年には佐々木等が同じく「運動心理」そして1930年には松井三雄が「体育心理学」を目黒書店から出版し、1932年には松井三雄と中村弘道が「スポーツの心理」を著わしている。

さらに研究が積み重ねられ、1952年には松井三雄は体育の科学社から「体育心理学」を著わしている。その序文には「体育心理学も、心理畑から体育の領域に進んだ人や体育畑から心理学の面に進出した人の一大ウオーク・

ショップによって、初めて建設されるものと信ずる。体育の実践家として育たなかった私が、あえて未熟な本書を公にするのは、ウォーク・ショップの成員は目標を一つにしておりさえすれば、同質であるよりもむしろ異質である方がお互いに前進するために有効である」と記されている。1962年には「体育心理学」の改訂版を出版されている。

1960年には末利博が「新体育学講座 体育心理学上巻・下巻」を逍遙書院から著されている。

1969年には長田一臣の「体育心理学」が道徳書院から著された。本著の発刊を祝して、当時日本体育学会の会長であられた松井先生は序文のところで長田先生のことを思うと「かたつむり、そろそろ登れ 富士の山」という一茶の句がいつも頭に浮かんでくると記されている。体育に関する科学的研究は、ここに脚を踏み入れるものには、得てして急ぎがちになる傾向がみられる。階段を一つ一つ順序をふんで登る余裕などとうていなく幾段かづつ跳ね上がり、上皮だけを滑っていくより仕方がなかったのだという意味のことが述べられている。この際、じっくり構え、基本に深く根を下ろした研究者の出現を待ち望まれていた。その意味で長田先生の学問は上皮を滑っただけのものではなく、そこには幅があり、深さがあると評され、学問に対する態度の特徴がよくあらわされていると述べられている。

1972年には杏林書院から「体育心理学研究」が発刊された。これは松井先生の古希を記念して催された会を契機として、先生の教えを直接に受けた鷹野健次、藤田 厚、柏原健三、近藤充夫、藤善尚憲、長田一臣たちが寄って内外の文献を集録して現在の情勢に対処した体育心理学の内容を備えた本を出版しようと言う話がまとまって、松井先生にも教示を仰いで体育心理学関係の研究手法とその成果に関して比較的新しい文献を集録して従来のもので違った特徴を持つよう工夫されて完成した。その著をみると文献の集録についても、

また記述についても著者達の力のいたらない点が随所に感じられるが、今後の体育心理学の発展に少しでも寄与できればという願いが強く込められていた。

1979年には保健体育科学大系として保健体育学の 20 領域のシリーズの一環として松田岩男著「体育心理学」が大修館から発刊された。当時においてまれにみる大作であったといえる。その著書のまえがきにあるように、体育心理学は体育事象の心理学的基礎を明らかにし、体育の目標や内容の決定および体育の学習・指導に心理学的な基礎を与えようとするものである。したがって、体育心理学は、実際の体育の学習・指導に役立つことが大前提とされている。

ただし、その頃の体育心理学の研究成果が反映されたものは別として研究分野として遅れているものに関してはむしろ学習心理学や社会心理学や性格心理学などの分野からの研究の方法や方向性の指針となるものが多く導入されており、隣接領域の研究との関連を考慮し、融合が必要であることが強調されている。本書をまとめるにあたっては心理学の各領域や体育科教育法、運動生理学やスポーツ社会学などの隣接諸科学との関連の研究成果を概観することがなされている。

1981年には「体育心理学実験実習概説」が体育心理学実験指導研究会によって体育学専攻生を対象とした体育心理学実験のマニュアルとして執筆されたものであり、実験の基礎を学ぼうとする若い研究者に対しても十分に役立つように配慮されて大修館から発刊された。それまでは古典的な知覚実験、伝統的な運動課題の学習等に関連した基礎的な主流をなしてきたといえる。しかしながら、学問の発展は必然的に研究方法論の改革を伴うものであり、研究の領域や定義そのものの変化を伴っており、体育心理学の全般の進歩によって従来の伝統的な心理学的研究方法に対する批判が多く聞かれ、このことが本書の企画の出発点になっていると述べている。第 I 章では心理学的実験法の基礎的な理論が書かれて

いる。また第Ⅱ章では実験実習で行われる具体的な実験内容が、それぞれの研究領域ごとに基礎実験とフィールド実験に分けて記述されている。

以上のように「体育心理学」という名称のもとに著された代表的なものをあげてみた。

従来から体育心理学は教育心理学の一分野として考えられてきている。ただし、運動心理学を人間の運動行動の心理学とし、体育の科学的基礎づけとしての運動科学の一分野と考えることができ、運動そのものの心理学的研究の必要から「運動心理学」という名称で著者をまとめる必要性もでてきた。

1976年には新進気鋭の研究者約20名のもとに松田岩男編「運動心理学入門」が大修館書店から発刊された。特に体育専攻生としてのテキストとして広く活用され、現在に至っている。初版が世に出てから、約10年運動行動に関する研究の急速な進歩で最新の資料や知見を加えていくとともに、記述が難しい部分と、実験・実習の手引きに相当する「運動心理学研究の実際」を「運動心理学の研究法」として改訂がなされ、よりわかりやすい「新版 運動心理学入門」が1987年に領域が細かく分類され、それぞれの専門領域で積み上げられている研究成果をまとめるかたちで約40名の執筆者によって出版された。

さらには2003年には杉原隆著「運動指導の心理学」が大修館書店から出版された。

本書は特に体育教師やスポーツ指導者をめざしている人、現職の先生や指導者で自身の指導力を向上させたいと願っている人のために読んでいただくことを想定されて書かれたものである。もちろん体育心理学のテキストとしても多く使用されている。

本書は2部構成で、第1部は運動学習と指導の心理、第2部はモチベーションの心理から成り立っている。執筆にあたって特に考慮されたことが二点あった。一つは実践と研究・理論の統合を強く意識された点である。もうひとつには運動・学習指導とモチベーションというテーマを相互に関連させ整合性を

もたせて記述されている点にある。著者は長年運動学習に関連した研究を積み重ねられてきた第一人者であり、それを集大成する形で、その2つを相互に関連させ、とてもわかりやすくまとめられている。運動学習、指導に絞った内容であるが、スポーツ指導者、体育教師またそれをめざす学部生や大学院生にとって質の高い創造的な指導をするための基盤となる知識と理論が提供されており、新しい視点からの理論の発見と指導力のさらなる向上に役立つようにとの願いでまとめられた書であり、高く評価されている。

以上のように、「体育心理学」から「運動心理学」へ、そして「スポーツ心理学」へと名称が移り変わりつつある。体育心理学とスポーツ心理学との関係は、体育心理学と運動心理学との関係と同様に考えることができ、体育心理学の一分野としてではなく、スポーツ行動を心理学的に研究する独立した領域であるとする。運動心理学とスポーツ心理学の関係は、運動心理学を上位概念とし、その中にスポーツ心理学が含まれるということになる。ただし、最近は運動の心理学的研究は、スポーツを対象としたものが多いので運動心理学とスポーツ心理学はほとんど同義に捉えることができるといつてよい。

多くの大学ではスポーツ科学系のコースや学科が作られているが、「体育心理学」という必須科目は姿を変えて「スポーツ心理学」「健康スポーツ心理学」「生涯スポーツの心理学」などに様変わりをしているといえる。これは体育教師をめざす学生が採用試験に合格することがきわめて困難なため、教師というよりもスポーツ指導者、インストラクターなど多方向への進出が目立っているのもひとつの要因となっているからであろう。

このように体育心理学研究の方向として「運動心理学」を基盤としながら「体育心理学」「スポーツ心理学」「健康スポーツ心理学」「臨床スポーツ心理学」といったように分化していく傾向がみられるのも、それぞれの領域での積み重ねられてきた研究成果の賜物で

あるといえる。

体育心理学専門分科会としての体育心理学のテキストとして使用されることを目的とした「体育心理学」が著としてまとめられて、続いて「運動心理学入門」が発刊され改訂されて「新版 運動心理学入門」がテキストとして多く用いられてきた。かなり古いのが 1967 年に松田岩男が著された「現代スポーツ心理学」を皮切りに、最近では 2000 年には福村出版から「スポーツ心理学の世界」、2004 年にはスポーツ心理学会の 30 周年記念出版として大修館から「最新スポーツ心理学」、2011 年には大修館から「これから学ぶスポーツ心理学」、同じく 2011 年には福村出版から生涯発達の視点からみたスポーツの世界を著わす「生涯スポーツの心理学」などが出版されている。体育心理学というよりもスポーツ心理学の名称で出版される傾向にあるが、「体育心理学」の発刊のあと「運動心理学入門」が体育専攻の学生のテキストとして利用されてきて、これらの研究の発展により新たな知見が提出されているが、それらをさらに凝縮したテキストを「スポーツ心理学入門」という名称でもよしとして、発刊されることも今後一層行われるであろう。

ここでは「体育心理学」を中心として「運動心理学」そして「スポーツ心理学」の著の流れを示したが、やはり日本体育学会に位置づけられる内容が客観的なものとなる。

日本体育学会における大会発表コード表見直しに関して 2009 年度の理事会で、中込委員長を中心とした特別委員会の設置が承認された。従来のコード表が検討された結果、あらたに体育心理学のコード表の最新の分類が行われ、体育心理学研究領域の位置づけがなされている。これが体育心理学の研究の成果に基づいて分類されたものであり、現時点で最も客観的なものであるといえる。

- ① 原理（理論、歴史、研究方法論、その他）
- ② 運動学習（運動制御、運動学習、認知情報処理、認知訓練、技能評価・フィードバック、学習過程・練習法、その他）

- ③ 動機づけ（スポーツ・運動参加、運動の楽しさ・運動嫌い、内発的動機づけ、達成目標、覚醒とパフォーマンス、原因帰属、その他）
- ④ パーソナリティ（パーソナリティテスト、自我・自己概念、自己実現・個性化、パーソナリティ特性と適性、パーソナリティ形成（変容・発達）、運動・スポーツ行動、態度、その他）
- ⑤ 社会心理（集団特性、リーダーシップ、ライフスキル、社会性と社会的影響、ジェンダー、対人認知・影響、コミュニケーション、チームビルディング、その他）
- ⑥ 発達（発達段階、身体と運動の発達、運動遅滞、認知・情動／発達、社会的発達、ライフサイクル、運動と遊び、その他）
- ⑦ 指導実践（個人差・学習者の特性、体育指導者、スポーツ指導者、ゲーム分析、指導効果、指導言語、学習指導行動の観察・分析、その他）
- ⑧ 健康心理（メンタルヘルス、心理社会的効果、ストレスマネジメント、疾病（生活習慣病）予防、運動行動の決定因、行動変容・介入、運動処方、その他）
- ⑨ 心理支援（心理査定・診断、適応（個人・集団）、問題（問題行動）、カウンセリング、心理療法、運動療法、キャリアトランジション、その他）

#### 参考・引用文献

- 1) 松井三雄：体育心理学 1959 体育の科学社
- 2) 末利博：新体育学講座 体育心理学（上巻・下巻）
- 3) 長田一臣：体育心理学 1969 道和書院
- 4) 鷹野健次、藤田厚、柏原健三、近藤充夫、藤善尚憲、長田一臣編著：体育心理学研究 1972 杏林書院
- 5) 体育心理学実験指導研究会：体育心理学実験実習概説 1981 大修館書店
- 6) 松田岩男：現代保健体育学大系 4 体育心理学 1979 大修館書店

- 7) 松田岩男編著：運動心理学入門 1976 大修館書店
- 8) 松田岩男、杉原隆編著：新版 運動心理学入門 1987 大修館書店
- 9) 杉原隆：運動学習の心理学 2003 大修館書店
- 10) 松田岩男：現代スポーツ心理学 1967 日本体育社
- 11) 末利博、鷹野健次、柏原健三編著：応用心理学講座 8 スポーツの心理学 1988 福村出版
- 12) 杉原隆、船越正康、工藤孝幾、中込四郎編著：スポーツ心理学の世界 2000 福村出版
- 13) 日本スポーツ心理学会編著：最新スポーツ心理学 2004 大修館書店
- 14) 荒木雅信編著：これから学ぶスポーツ心理学 2011 大修館書店

#### 4. イメージトレーニングの意味論 勝部篤美（愛知淑徳大学）

はじめに

体育心理学の研究領域は、発達、学習、適応、指導、知覚などかなり広い範囲にわたっているが、最近の傾向としてメンタルトレーニングやイメージトレーニングについての発表が目立って多くなってきているように思われる。

わたくしは、メンタルトレーニングは「心理的コントロール」を主な内容としているのに対して、イメージトレーニングは「技能学習」を主な内容としている点で両者は異なっていると理解しているのであるが、ここで問題としたいことは、イメージトレーニングに関することである。

心ある指導者は、受講生たちに対して次のようなことを強調しているようである。すなわち、「グラウンドやコートにいるときだけがトレーニングではない。手足を直接動かさなくてもできるトレーニング法がある。バスに

乗っているときでも、フロに入っているときでも、フトンの中でもできるトレーニング法がある。それは、すぐれたプレイヤーの演技を脇の奥に視覚的イメージとして描くこと、またすぐれたプレイヤーの演技に付随しておこる音を耳の奥に視覚的イメージとして聴きとること、さらに自分自身を演技者としてイメージの中に描き出す練習をすること、これがイメージトレーニングである」と。

ここで述べられたことは確かにその通りである。しかしこれだけでは説得力が弱いのではないか。なぜならば、この行動を支える理論的根拠ないし意味論的説明が、そこには示されていないからである。

理論的根拠を持たない学習法は単なる信仰と同じで「眉唾もの」と思われても仕方のないフシがある。そこで、わたくしはイメージトレーニングの講義をするときには、必ずその理論的根拠についても詳しく話すことにしている。これは考え方によれば意味論的検討の結果を伝えているといえる。御参考までに、以下にその概要を述べさせていただく。

#### 1. 人間にとってイメージとは何か

##### 1) イメージの概念

従来、心理学では image のことを心像と訳して、知覚対象がないにもかかわらず心の中につくる像として考えてきた。この場合の心像は、鏡にもものを映すような実物模写的なものとしてとらえられており、実験心理学の領域では記憶像、知覚遮断実験などの研究で行われてきた。

これに対して、image は単なる感覚の模写ではなく、合成作用、比較作用、増幅作用、圧縮作用などによって創造的活動に関係が深いところから、image のダイナミズムを学習に利用しようとする心理学的研究が台頭してきた。この場合、イメージを動的なものとして把握しているので、むしろ imagination と呼ぶ方が適当であると考えている人もいる（藤岡喜愛）。

また一方、image を単なる外界の模像とし

てではなく、個人の内的実現に表現としてこれを重視しようとする立場が臨床心理学では貫かれてきた。特に精神分析の立場では、image や imagination とは区別して、限定的な意味をもたせて imago と呼ぶ人もある (Jung, C.G.)。

## 2) 動物心理学との関連

イメージの喚起は動物にもあるものとされている。ただし、それは静止的、鏡映的なものであろうといわれている。

また、動物でも夢を見ることが検証されている。しかし、イヌやネコの見える夢は直感的なものであると考えられているし、チンパンジーの夢でさえ人間でいえば 1 歳児程度のものであろうと考えられている原始人なども直感像の世界の住人であらうとされている。

旧石器時代の原始人は洞窟絵画を描いているが(アルタミラなど)、この時代に言語が駆使されたかどうか疑問視されている。だとすれば、初めに言葉ありきではなくて、初めにイメージありきということにならう。

## 3) 生理心理学と関連

イメージ表出の過程は生体電気現象としてとらえることができる。イメージ表出の過程の筋電図を最初にとったのはジェイコブスン (Jacobson, E.) である。彼は被験者にタイヤに空気をつめたり、錘りを持ち上げたりする動作をイメージとして描かせ、そのときの微細な筋放電を筋電図に描記することに成功している。これは、実際にはからだを動かしていないのに、想像するだけでその運動に関係のある筋肉に神経衝撃が伝わっていることを示している。これと同様に、わたくしは声楽の発声練習のときの咽頭部の筋電図をとってみた。ドレミファソラシドと、次第に声を高めていくと、それらの発声ごとに筋放電が認められる。そこで次には声を出さないで、心の中でドレミファソラシドとやってみると、微弱ながらやはり筋放電が認められた。そして、これ以上高い音域の声がでないというところでは、実際に声を出す練習の場合でも、声には出さない場合でも、共通して咽頭部にひき

つったような感じを受ける。そしてこのときの筋放電は最高を示すのである。このことは、音声に出そうが出すまいが、想像だけで声帯収縮が可能であることを示していて、やはりジェイコブスンの実験の場合と同様に考えることができる。

ジェイコブスは彼の実験から、思考は大脳に限局して行われるのではなく、中枢と末梢との全体的関連の中で行われることを強調したのだが、「戦場で失ったはずの手足がうずく」という実話も考え合わせると、人間の思考活動にとって重要な問題がそこに秘められているような気がする。

その後、わたくしはイメージは情緒的興奮に依存するものであるから、その面からのアプローチが必要であるとして、イメージの表出過程と皮膚電気反射 (ウソ発見器の原理) との対応関係を調べてきた。その後、藤田厚らもイメージ表出と脳波・筋電図との対応関係を調べている。

このように、思考活動、イメージ表出過程における生体内の電気的変化が明らかになってくると、単に被験者の内省報告に頼っていたイメージ研究は飛躍的に進歩するとともに、いわゆるイメージトレーニングの理論的根拠が明白となった。

## 4) 発達心理学との関連

人間は、新生児のときからイメージを持ち始める。そのころは記憶心像と呼ばれる段階のものであって、静止像が多いであろう。「人見知り」というのは、幼児が身近な人の顔を記憶し、その心像と現前の相手とを照合するところに起こるといわれている。

以前から幼児の直感像の明瞭性についてはよく指摘されてきたが、そのうちに記憶心像は多様な感覚・知覚的経験によって豊富に貯えられ、これが相互に結合していくことによってここにイメージの運動化が起り、単に明瞭に描くだけでなく、イメージの生成発展を促し、やがて統御する方向へ向かう。

幼児のイメージ思考は、概念形成以前の思考方法として抜きがたいものである

(Piaget, J.)。後には言語を用いて倫理構築をするようになるが、やはり「初めにイメージありき」である。

#### 5) 思考心理学との関連

パスカル(Pascal, B.)は人間を「考える葦」と呼んだ。またデカルト(Descartes, R.)は自らの存在の証しとして思惟を認めた。「われ思う、故にわれあり」(Cogito ergo sum)のことは多くの人の知るところである。

思考行動は、人間が生き続ける限り、その存在にかかわる重要な営みであるが、その際イメージは無意識の言語として重要な役割を果たしている。そのことは、発明・発見の事例でしばしば指摘されている。

我々は言語によって概念をつくり、イメージによって観念をつくっているようである。国家観、世界観、人生観、異性観など何々観といわれるものはイメージによってつくり上げられている。

このように見てくると、イメージはロゴスの世界よりもパトスの世界に根をおろしているといえる。

#### 6) 芸術心理学との関連

芸術的表現の過程は、想像の過程であり、また創造の過程でもある。たとえ写実主義に徹するといえども、その芸術家は外界の模写に終わることはない。外界の事実を、芸術家自身の見方・感じ方のチャンネルを通してイメージ化し、独自の世界を切りひらいているはずである。

美術家では視覚心像、音楽家では聴覚心像が明瞭であることはすでに知られている。舞踊家はこれら両面が必要であるばかりでなく、心像の運動化、つまり変換統御能力がいっそう重要となってくるであろう。新体操、アイスダンス、シンクロナイズド・スイミング、高とび込みなど、構成美を狙って行われるスポーツでも、舞踊と同様のことがいえる。

文学では読書は言語のイメージ化なしには観賞できないし、読者は作者のイメージを体験する過程で同一化し、共感する。そしてその共感単に内部受容だけでなく、外部表

象となることが多い。思わず手がでる、足が出る、という運動随伴がそれである。

文学以外の芸術では、ことばのロジックよりも、イメージのパッションが重要な役割を果たしており、イメージそのものが生命力であるとする人もいる(岡本太郎)。

#### 7) 臨床心理学との関連

他人の心の中をのぞくことは容易ではない。そこで臨床心理学では、イメージによってその人の内的現実を知ろうとする。各種の投影テストはそのための具体的手段である。

また、心理療法では、心理状態の改善のためにイメージ操作を利用している。一般的なカウンセリングでもイメージによるやりとりが有力な手段になっており、ことばに頼るよりも、むしろ以心伝心的なことが効果的だと考える人もいる(河合隼雄)。

以上述べてきたように、イメージは心理学の多くの分野にわたってかかわる重要な問題であるが、とくに運動技能学習への関与の仕方について次に考えてみよう。

2. イメージトレーニングは運動技能学習においてどのような意味をもっているか

#### 1) イメージトレーニングの理論的根拠

イメージトレーニングは先に述べたジェイコブスンの実験的知見に基づき、「人間は何かの動作を思うとき、思っただけでその動作に関係している筋肉に対して中枢から神経衝撃が流れ、筋放電が起こる。それならば積極的に想像することによって運動に関係している神経回路の訓練をすることができるのではないか」(勝部)、と考えられたことがイメージトレーニングの理論的根拠なのである。

#### 2) イメージの関わり方

##### (1) 観念の形成

運動学習において、学習者はまず課題とされていることがどのようなことなのか、課題とされている動作はどのようなものなのかを理解できていなければならない。これは観念の形成ということが出来る。指導者の良き示範があれば観念の形成(イメージ化)はいっそ

う容易に促進されるであろう。この場合、イメージ化は同時に内的言語を伴うことが非常に多い。つまり、イメージによる観念化と言語による観念化の相互補完的結合で運動の思考活動は進められる。そのことは問題に対する Strategy(方略)の樹立へと発展する。

### (2) 観念・方略の修正

次の段階では、果たして自分のからだはイメージのように動いているかどうかを実地に行って検証してみる。その結果、イメージと実地との差異を自覚し、その差異を埋めるための方法をイメージ化した後に、再び実地に行って検証することになるであろう。このようにして、より正しい観念へと修正するとともに、新たに方略も修正し直して目標に迫ることができよう。新戦法・新技術の開発もこの観点から理解することができる。

### (3) 記憶の強化

イメージを繰り返し描くということは、それ自体が運動の記憶強化に役立っている。

とくに、身体運動の学習は筋感覚に支えられた受動的なものであるため、むしろ間脳などの情動中枢の機能に依存するところが大きく、これが大脳皮質の活動水準を賦活させることが考えられる。その点では、言語学習のように単に皮質レベルの活動を主としたものとは異なる。

おわりに

世の中には、運動は動物でもやっているなどといって、ことさらに軽視しようとする人たちがいる。これはまことに愚かなことで。ことがらの本質を知っていない蒙言といえる。

下等な動物の運動は、生まれつきからだに組み込まれた固定的なプログラムにしたがって行われている。そのために定型的・常同的である。クモが巣を張るのも、ガンが空を渡るのも、まさにそうである。これに対して高等な動物は可逆的・流動的なプログラムにしたがって行われるので、事態の変化に対応することができる。しかも、熟練という明確な目的をもち、そのために意識的にトレーニング(学習)するという動物は、人間を

かにはない。

運動を学習する場合には見られる人間と他の動物との間の大きな違いは、人間はイメージと言語を媒介とした思考活動をフルに活用しているということである。つまり、人間の運動は高次の思考活動から生まれているということである。そこでこそあの美しいシンクロナイズド・スイミングのような創造的な群泳やアイスダンスができるのである。運動のために頭を使うということ、それこそが人間の特徴であり、「考える葦」といわれるゆえんである。

出典；体育心理学専門分科会会報 11号（通巻 39号）特別寄稿 1

## 第5章 今後の展望

本章では、体育心理学専門分科会の50年に亘る歴史を振り返って、これからの体育心理学の領域で活躍を期待される若手研究者の人材育成についての課題と、その解決策を提案したい。そして日本体育学会でも検討されている「日本スポーツ心理学会」との棲み分けについて考える。加えて、「体育」という用語すら消えていった国際社会において、我が国、独自の「体育心理学」を国際的な研究の動向から展望し、その価値を問い直すきっかけにしたい。最後に、現場の要請に応える体育心理学の在り方について問いかけたい。



## 1. 若手研究者の人材育成について

### 中込四郎（筑波大学）

この50年で、体育心理学専門分科会をはじめとする体育・スポーツ心理学関連の学会会員の登録者数が増えているのは間違いありませんが、「研究者」がその数に比例して育ってきているのかの判断は、簡単にはくたせません。しかしながら科学研究費補助における若手研究者枠の増設、博士号取得後の研究支援、そして十分とは言えませんが、各大学における大学院学生に対する在学中の経済的支援も兼ねたTA、TF、RAなどの制度等、若手研究者にとっての周囲の状況は、以前と比べると良くなってきています。

若手研究者の人材育成は、そのスタートとなる大学院前・後期課程で直接指導するそれぞれの教員に課せられた役割が大きいと考えねばなりません。そして、研究成果の発表や意見交換を行う研究交流の場となる専門学会は、人材育成においてそれ以上に大きな役割を担っていると考えられます。それゆえに学会ないしは専門分科会として、若手研究者の育成について検討し、実現していくことは、50年の間に積み重ねられてきた歴史をさらに発展させていく上でも重要となります。

このような視点から、共通の関心をもった若い世代の研究者が、研究交流を積極的に行える意味ある場を設定することは、標記のテーマに沿ったわれわれ世代の課題と考え、このことを「凝集性-魅力理論（仮称）」を手がかりに考えてみたいと思います。この理論は専門分科会設立の草創期から、集団研究に精力的に取り組まれ、私たちを導いてきた丹羽劭昭先生が40年以上前に主張されたものです。なぜ先生の理論を援用することになったのか、それは私がこのテーマを与えられた時、主張したいこととして真っ先に頭に浮かんだのが、「若手にとって魅力ある学会にすることが彼らの育成に繋がり、そしてそれが課題であろう」だったからです。

先生は運動部の凝集性を高める要因として次のような要因群に触れています。カッコ内は、テーマに沿って私が強引な置き換えをはかったものです。

#### ① 集団（学会）における他の成員や人間関係の魅力

学会大会での専門分科会では、研究発表、各種シンポジウム等が企画されてきています。フロアの会員は、発表内容だけでなく、その後のフロアとの質疑応答にも関心を寄せ、そこでも多くを学んでいるのだと思います。自身や他の会員の発表に対するフロアの反応・対応は、会員間の人間関係の評価に繋がるイメージがあります。自身への反省も含めて、特に、若手研究者の発表に対しては、出来るだけ発表者の立場から理解しようと努め、育てる視点を持ちながらのコメントが求められます。ポスター発表への希望者が増えたのは、プログラム作成上の制約だけでなく、近い心理的距離での討議による安心感が働いている部分もあるのかもしれない。

#### ② 集団（学会）が行う活動の魅力

これは、学会大会での活動だけでなく、むしろ、会員の研究論文、著作、マスコミでの発言、各種研修会・講演会等での講師としての活動などの影響力が大きいと考えられます。さまざまな媒体による公的な場での会員の発言は、この領域への関心を惹き付けるようです。というのも、大学入試や研究室の選抜時の面接で、われわれ会員の活動が動機づけとなったことに言及する学生が少なからずいるからです。体育・スポーツ心理学領域を学び始めた学生が、より専門的な道に進む・方向づける推進力は、周囲の学術的かつ専門的な研究成果となろうかと思っています。彼らがマスコミ受けする発言だけで、いつまでもこの領域にとどまるようでは、専門性は深まりません。われわれは、彼らのその後の推進力の切り替えを引き起こすような仕事も公にしていかねばなりません。

### ③ 会員（学会員）の個人的目標達成の媒体としての魅力

昨今はどこの大学でも、教育の実質化およびそれと連動する「出口」の問題が大きな課題となっています。例えば前者については、体育系大学の学長・学部長会議でも取り上げられ、体育コースで修学した学生の共通した標準的到達点を明確にしようとの作業が進められていると聞きます。これまで、数多くの体育・スポーツ心理学関連のテキストが出版されていますが、学会レベルでもこの領域における標準的なテキストとしてのガイドラインを示す必要があるのかもしれませんが、しかし、それが行き過ぎると、多様な興味・関心をもった研究者予備軍の大学院生に伝えられなくなる危惧もあります。そして後者については、なかなか難しい課題であり、専門分科会だけで解決しようとしても無理があります。心理サポートを中心とした専門職の雇用がわずかながらありますが、とても需要（求職）を満たすほどではありません。今よりも幅広い進路選択を可能とするには、むしろ、普遍性の高い資質向上に繋がるような専門教育や研究活動のあり様についても考える必要がありそうです。

### ④ 集団（学会）の持つ威信の魅力

この要因についてもこれまでと同様に、丹羽先生の魅力理論を手がかりにして述べようとすると、立ち止まってしまいます。威信を政治的なパワーではなく、体育・スポーツ心理学の学問的魅力を広い範囲に伝えることと考えてみました。昔、ある先生がご自身のやってこられた仕事に対して、「僕のやってきたことは、“丸の内の人たち”にスポーツ心理学の魅力を伝えたこと」と述べられました。その時の私は、この言葉を素直に受け入れることができませんでした。恐らく、当時の私の年代の反応としては、それで良かったのだと、個人的に今でも納得しています。その先生からはさらに別の機会に、「皆に求める必要はないが、本物をしっかり学ぶこと、そして学ぶ

為に使った投資は必ず戻ってくる」とも言われました。まさにその通りだと思います。広く体育・スポーツ心理学を語りたい者であっても、学会員としては、しっかりした専門性に支えられた発言であることを望みます。そして、その発言によって、いろいろな層からの体育・スポーツ心理学に対する評価を高める努力が必要のようです。

### ⑤ 集団（学会）の目標や課題の魅力

丹羽先生の意図とは異なる、私の強引な主張も最後となりました。ここでは、目標や課題の魅力を研究成果との関連から狭く捉え、それは「現実をどれだけ動かすことができるか」に関わることではないかと考えています。もちろん研究成果は、今ある課題に答えるものもあれば、10年、20年後活かされるものもあるはずです。基礎・応用あるいは大標本・事例のどの立場からの研究であっても、「現実に即した課題設定、そして個別事象の精緻な理解を経た課題設定」であることによってリアリティある研究となるのではないのでしょうか。そこには、専門分科会が企画するシンポジウムやレクチャーのテーマ設定、そして雑誌等の特集テーマ選びも関わってきます。これらを通して、われわれの学会が今何を課題としているのかを明確に、具体的にアピールする必要があります。

結局は、すでに述べたように、若手研究者の人材育成においては、若手でないわれわれが「研究者」の先輩として、後輩に何を示せるかが問われているのだと思います。「昔の大学教授は背中中で教育した」という謂われがありますが、今は、具体的な研究成果・活動が「背中」ということになるのでしょうか。研究することの楽しさを後輩研究者に伝えられるような取り組みをしたいものです。

## 2. 国際的な研究の動向からの展望について

関矢寛史（広島大学）

体育心理学やスポーツ心理学に関する国際的な研究の流れを概観し、そこから展望を導き出すための一つの方法として、学会組織や大学の学科等がどのように設立、編制されてきたかを見るのがよいと思われます。なぜなら個々の研究テーマは、学会や学科の枠組みの影響を受けて設定されることが多いからです。

体育心理学専門分科会の母体である日本体育学会では、「日本体育学会の目的は、体育・スポーツに関する科学的研究や関心を高めること、学際的な交流を促進すること、体育・スポーツ科学を発展させること、研究で得られた知見を実践の場に応用することである。さらには、それをもって我が国の学術の発展に寄与することを目的としている。」と謳っています。つまり体育だけではなく、スポーツも同等にその研究対象として掲げています。しかし、日本のスポーツが学校体育と密接な関連を持って発展してきたことから、日本体育学会という学会名が現在まで継続して使われており、競技スポーツというよりは学校体育に関する研究を対象とした組織であるとの印象を持つことが多いのではないかと思います。

ところで体育心理学を研究領域に含む国際学会として、1958年にアメリカ健康・体育・レクリエーション連盟(American Alliance for Health, Physical Education and Recreation: AAHPER)の理事会の発案によって国際健康・体育・レクリエーション協議会(International Council for Health, Physical Education and Recreation: ICHPER)が設立されました。その後、AAHPERはダンスを名称に加えてアメリカ健康・体育・レクリエーション・ダンス連盟(American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance: AAHPERD)となり、ICHPERはスポーツとダンスを名称に

加えて国際健康・体育・レクリエーション・スポーツ・ダンス協議会(International Council for Health, Physical Education, Recreation, Sport and Dance: ICHPER・SD)となりました。また、1982年に発足した国際スポーツ・体育協議会(International Council of Sport and Physical Education: ICSPE)は、スポーツ科学と体育学の違いが大きくなってきたためにスポーツ科学を強調して、国際スポーツ科学・体育協議会(International Council of Sport Science and Physical Education: ICSSPE)という現在の名称に変更しました。

これらの学会に倣えば日本体育学会もその目的を鑑みて、スポーツも主たる研究対象であることが一目瞭然でわかるように、名称にスポーツやスポーツ科学を加えたほうがよいのではないかと考えられます。しかし国際体育学会(Federation International d'Education Physique: FIEP)や国際高等教育体育学会(Association Internationale des Ecoles Superieures d'Education Physique: AIESEP)などの体育学を強調した名称の国際学会もあり、学会の目的や実際に行っている活動に見合った名称が望ましいと言えます。

また、アジア圏においても2001年にアジア運動・スポーツ協議会(Asian Council of Exercise and Sports Science: ACESS)が発足しました。ACCESSは健康科学、スポーツ科学に加えて体育学もその対象に含んでおり、体育の授業に関する研究発表もあります。一方で、国際スポーツ心理学会(International Society of Sport Psychology: ISSP)の要請によってアジア南太平洋スポーツ心理学会(Asian South Pacific Association of Sport Psychology: ASPASP)や日本スポーツ心理学会(Japanese Society of Sport Psychology: JSSP)が設立されてきました。このように、スポーツ心理学という学問領域に限定した上で、異なる地域階層の拡がりを見せる学会設立の歴史があると同時に、日本体育学会のように多くの領域を含む学会においてもACCESSやICHPER・SDやICSSPEのように地域的な拡

がりを持つ学会もあります。

ところで、大学の学科等の編制について北米を例に挙げれば、20 世紀後半に Department of Physical Education の多くが Department of Kinesiology に名称を変更しました。かつて日本では、バイオメカニクスの研究領域をキネシオロジーと呼んだ時期がありますが、北米における Kinesiology とは身体運動に関するすべての領域を含んだ意味を持っており、身体運動科学と訳されるべき学科名となっています。つまり、北米では体育学からスポーツやレクリエーションやリハビリテーションも含んだより広範な身体運動科学へと学科名が変更されたこととなります。日本でも近年、体育学科の多くが健康やスポーツを含む学科名に変更されましたが、これも北米と同様の流れであると考えられます。

上記のように、国内外における学会や学科の編制の流れを概観すると、まずは体育学から、より包括的な Kinesiology や健康・スポーツ科学へという動きがあります。しかし、一方で学問領域の細分化の動きもあります。たとえば北米では、1967 年に設立された北米スポーツ・身体活動心理学会 (North American Society for Psychology of Sport and Physical Activity: NASPSA) は、体育やスポーツの心理学的研究の発表の場となってきましたが、1986 年に応用スポーツ心理学会 (Association for Applied Sport Psychology: AASP) が設立されてからは、NASPSA は主に運動制御・学習 (Motor Control and Learning) を研究対象とする運動行動の心理学 (Motor Behavior) の色合いが濃くなり、心理的スキルに関する研究は AASP に移りました。日本でも、運動学習研究会、メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会、スポーツ動機づけ研究会、スポーツ社会心理学研究会、臨床スポーツ心理学研究会などの研究会が設立され、これらは細分化の動きと言えます。

このように学問領域的な包括化と細分化、地域階層的な広がりという様々な動きを概観した上で、日本体育学会体育心理学専門分科

会の展望を考えてみたいと思います。まず、日本体育学会がその目的に体育だけではなくスポーツを対象とした研究も含んでいることから、体育に限定した研究発表の場にする必要はないと考えられます。むしろ日本体育学会が多くの専門分科会を持っていることの利点を生かして、他の専門分科会との交流を増やすことが重要であると思われます。体育やスポーツの現場にある問題の多くは、一つの学問領域で解決できるとは限りません。問題焦点型 (problem based) の研究が必然的に学際的な研究になるように、日本体育学会では多くの専門分科会の英知を集めた研究を促進するような活動が行われるべきでしょう。これまでも専門分科会の枠を取り払ったシンポジウムや口頭発表の場が企画されてきましたが、今後さらにそのような活動を増やすべきだと思います。ある問題について複数の専門分科会が集まり、領域横断的な研究や発想を通して問題解決に挑めることが日本体育学会の組織的な利点であると思います。専門分科会以外の企画でそのような活動を増やすことはもとより、体育心理学専門分科会の企画においても、他の専門分科会との連携を取った企画が増えることを期待したいと思います。

### 3. 体育心理学専門分科会とスポーツ心理学会とのすみ分けについて

猪俣公宏 (中京大学)

体育学会において体育心理学専門分科会は 1960 年に発足している。過去 50 年の歩みには紆余曲折が見られたものの着実に研究は深化し、また研究の対象領域は拡大してきたと言えよう。しかし、このような過去 50 年の歩みを振り返ってみるといくつかの点で我が国固有な問題が提起される。その一つは途中から日本スポーツ心理学会が新たに発足し、日本体育学会体育心理学専門分科会との間で二つの学会員や活動に多くの重複が見られるよ

うになったことがあげられよう。本稿では特にこの2つの学会の並立の問題について若干の私見を述べさせていただくことにする。

北米における米国健康体育レクリエーション学会から NASPSA (北米スポーツ心理学会) が独立し、運動学習を主軸とした研究活動が進展し、さらに AAASP (応用スポーツ心理学会) が応用的、実践的研究を目指して設立され、二つの学会が一応それぞれ独自の特色を持ちながら発展してきたプロセスと比較してみるとこの領域における我が国の特色がよく理解されよう。ここで米国のスポーツ心理学の発展過程を比較対象の例として挙げた意図は決してこれを我が国のこれからのモデルにしようと考えているからではない。

むしろ私は米国の学会が歩んできたプロセスに大きな問題点があることを指摘しておきたいからである。大きな組織が研究の発展とともに分化し、さらにより特殊化した組織を形成していくことは何も上述し北米の例に限らず、一般的に他領域においてもみられることである。しかし、このような深化・分化の発展過程においては本来、体育、スポーツ心理学などの応用科学領域で期待される問題解決から遠ざかっていく傾向さえ見えてくる。その理由として、もともと解決すべき問題が複合的であれば、当然、その解決法も複合的・学際的であるべきであり、体育スポーツの領域においても、必然的に他の領域との学際的アプローチが必要になる。また応用科学領域においてはさらに基礎的な研究領域と応用的研究領域とは相互補完的な関係を持ちながら発展すべきであると考えられるが先述した米国における体育スポーツ心理学の発展過程はこのような方向に逆行する傾向さえみられる。これに対して、現在の体育心理学専門分科会は体育学(スポーツを含む広い概念として)の1分野としての位置づけの中で他の専門領域と学際的な討論や研究を推し進める上で好都合な学会組織であると言えよう。しかしこの条件を十分にわれわれは生かしてきているのか、また生かそうとしているのかと言えば、

現状では否定的であるといわざろうえない。また、一方において体育を狭い意味での Physical Education として捉え、体育心理学専門分科会は体育科教育の心理学的研究を主として取り上げるべきだと主張する考え方もある。しかし体育学会における体育は我が国の文化を背景とした広義の概念でとらえるべきであって体育心理学もその1分野として全体の体育としての整合性をもった概念が求められるのではないだろうか、それでは2つの学会組織(体育心理学専門分科会と日本スポーツ心理学会)をどのようにすみ分けていくべきかという問題が改めてここで問われることになる。私はこのような問に対する回答として次のようなことを考えてみた。

2つのすみ分けの問題はともするとそれぞれの学問としての独自性や研究領域の区分などの問題に矮小化されてしまいがちであり、このような文脈での討論はこれからの発展にとって必ずしもプラスにならない。この問題についてはわれわれの研究分野を応用科学としての視点から捉え、様々な重複を必然的要素として受け入れたうえで、それぞれに特色のある理念、組織や運営、構成員を生かして相互補完的な関係を構築していくことが重要であると基本的に考えている。例えば、先述したように体育心理学専門分科会においては他の専門分科会との交流をさらに進めながら研究や討論の発展を目指すことがあげられるし、他方、スポーツ心理学会においては、他の心理学会との連携をさらに進めるなどの課題や国際的なスポーツ心理学組織との交流の推進などがあげられよう。ここに挙げた例は氷山の一角にすぎないが50年目の曲がり角において一般的な学会の発展過程とは異なる我々の置かれた状況を踏まえ、独自の方向を模索していくことが求められているのではないかとこのことを問題提起しておきたい。

#### 4. 現場の要請に応える体育心理学 理論をフィールドに、フィールドから理論を

岡澤祥訓(奈良教育大)

##### 1. はじめに

体育学部の体育心理学の研究室に11年勤務した後、保健体育科教育学の研究室に勤務して11年の年月が過ぎました。初期の研究は、パーソナリティが運動参加にどのような影響を与えるのかという観点から行っていました。この頃の私は、体育やスポーツ等の運動が性格形成に及ぼす影響よりも、パーソナリティが運動参加の方法を規定するというアイゼンクの性格理論を基に検証し、体育心理学における従来のパーソナリティ研究(運動がパーソナリティに与える影響に関する研究)を批判することで満足していました。しかし、指導者と話しているとより具体的なレベルの情報を要求されるし、そのような具体的なレベルの行動の違いによると有意差を検出することができずに悩んでいました。その頃は、体育学部の学生を対象に調査や実験を行っていました。有意差が検出できないのは競技レベルが低いからで、トップレベルの選手では有意差が出るだろうと考えていたところ、同じ大学に勤務する油座先生が卓球協会のスポーツ医科委員会の委員長をしていることを知り、ナショナルチームのデータをとらせてくださいとお願いしたところ、サポートのために使える研究ならいいですよと許可していただきました。これがフィールド出るきっかけでした。この時、指導者から要求されたことは、だからどうすれば良いのかということであった。心理テストの結果ある選手はこのような問題点を持っている可能性があることは分かっても、どのようにすれば良いかが分からなければ、その選手を試合に使わないという解決方法しかなく、本当にそれでよいのかということが問題になった。スポーツ心理学は問題やなぜそうなるのかを解説してくれるが、解決策を提示出来ないという点を指摘

され、あなた方は研究を行うために来ているのであって、選手や指導者のサポートに来ているのではないということを描かれた。私自身の勉強不足がスポーツ心理学全体への不信感を抱かせてしまったことにショックを受けました。このような状態で退散してしまったのでは、スポーツ心理学は役に立たないということを示すために卓球のナショナルチームに行ったようなものである。何とかしなければならぬという焦りだけが先行した。しかし、冷静に考えてみると、今までは選手や指導者が何に対して困っているのかを無視して、私の興味、関心に従って、データを収集し問題点を指導者や選手に伝えるという活動をしていた。その問題はその競技を行う上で重要な問題なのか、それとも無視してよい問題なのかを判断する知識や情報も無しに、自分はスポーツ心理学を学んできたという自信に支えられて土足で踏み込んでいたのだろうと思う。そこで、何が問題であるのかを指導者や選手も心理面に関しては重要であることを認めていても問題意識は明確でないように感じた。選手や指導者が指摘した問題は試合で上がっていきまわって実力が発揮できない。集中が切れてしまう等の一般的な内容であった。この頃に中京女子大学に山本祐二(現名古屋大学)が着任し、二人で相談した結果、吉澤洋二(名古屋経済大学)、米川直樹(三重大学)、鶴原清志(三重大学)、鈴木 壯(岐阜大学)の6人でプロジェクトを組んでサポートすることを決定した。6人で合宿に行く前に、面接のテクニックを臨床心理学を学んでいた鈴木氏にトレーニングしてもらい、どのようなサポートが可能かを話し合った。合宿では心理テストを実施し、その結果を基に選手と面接を行った。選手との面接の後、指導者との話し合いが行われ、一人一人の選手にどのように接するべきかを検討した。指導者や選手の要求をとりいれてリラクゼーションや集中力のトレーニングをメンタルマネージメントプロジェクトが作成したオーディオテープを用いて行った。このテープを用いたトレーニン

グは合宿時に説明を行い、実際は自宅で実践してもらった。実際行ったのは僅かの選手だけであったようである。ソウルオリンピック終了後に選手にインタビューを行った結果では、「一番効果があったのは面接であった」と殆どの選手が回答した。私自身にとって、この回答は不思議であった。メンタルトレーニングを行うための情報収集のために行っていた面接が一番効果があるとは考えられなかったからである。

## 2. フィールドに理論を

なぜ、面接が効果があったと選手が判断したのかを考えてみると、面接で選手は多くの問題点を話していました。その問題点に対して我々は、従来のスポーツ心理学の研究結果や理論を基にアドバイスしていたと思います。なぜそのようなことが問題になるのか、そのことに対してはどのように考え、どのように対処すべきかを説明することは、そのような状態になるのは自分だけではないこと、問題が明らかになれば解決の方法は必ずあることを示せたと思います。心理学の研究は、選手が読んで問題とする内容に直接解答を導くことは難しいけれども、心理学を少し学んだ者にとっては、問題の解答を導くことの参考になる研究は多くある。しかしこの解答はあくまでも、こうだろうと言う予測にすぎないことも事実である。選手や指導者が問題であるという事柄に対する解答を導く研究、すなわち、理論をフィールドにおいて検証する研究がもっと多くあっても良いと思う。このような研究が少ない理由は二つあり、一つはフィールドは実験室ではないから、条件を統制することが困難であり、あえてそれを行おうとした場合には、研究のための研究をしていると判断されることや、従属変数の数量化が難しいという問題である。二つ目の問題は理論を作るためのメカニズム研究は実験計画が立てやすく、学会誌などに受け入れられ易いと現実がある。誰かの研究結果を基にフィールドに役立つ方法を考え、それが役立つこと

を証明しても、研究計画や従属変数に問題があることを指摘される。また、その研究にかかる時間は想像を絶するほど多くかかってしまうということである。しかし、スポーツや体育の指導現場では、現場に役立つ、指導者が理解できる理論を必要としていることも事実です。例えばリラクセーションが必要であるという研究結果から指導者や選手はどのようにすれば良いのかを理解することは困難である。指導にメンタルトレーニングを取り入れたいと思っている指導者がいても、どのようにすればよいのか分からないというのが現実であろう。その競技や選手に合ったメンタルトレーニングプログラムを作成し問題がないかどうかをチェックしながら実践し、そのプログラムを修正していくという研究活動がなければ、現在までに多く行われてきた研究成果を指導現場で用いることは難しい。現在の指導者や選手はスポーツ科学の成果を取り入れることの必要性は理解していると思う。現在はまさに「フィールドに理論を」の時代である。そのことを実現するためにはフィールドに活動の基盤を置く研究者が一人でも多く育てて欲しいものである。

## 3. フィールドから理論を

フィールドに役立つ理論は必ず実験室からでてくるというわけではない。指導者は何時も、研究結果に基づいて指導を行っているわけではない。指導者は何度も試行錯誤を繰り返しながら彼らの指導方を確立してきている。この経験を基にして明らかにされた内容を実験方法に従って証明することは困難であろうと思われるが、多くの真実を含んでいる可能性は高い。この経験に基づいた真実を理論化する方法があれば、スポーツ、体育心理学は急速に発展すると思われる。しかし、数量化することが求められる研究方法を適応しなければ、理論化ができないということであれば、フィールドから理論を求めることは困難であると考えられる。この問題を解決する方法は、近年欧米で盛んに使用されるようになった質

的研究法、すなわち、インタビューを用いた研究を行うことであると思われる。インタビューは簡単に行えると思われるかもしれないが、自分の都合のよい結論を誘導する可能性が高いことや、分析の方法等困難な点は多くある。しかし、この方法に関しては近年多くの情報を得ることができるようになった。また、心理学には臨床心理学という領域が確立されており、この臨床心理学では昔からこのような研究方法を採用してきたという経緯がある。優れた指導者や選手から学ぶこと、すなわち優れた指導者や選手の経験を理論化することは可能である。このことを行えるのもフィールドに基盤を置く研究者である。実験室を飛び出てフィールドで活躍するスポーツ心理学者や体育心理学者が求められる時代である。

#### 4. おわりに

理論をフィールドに役立てて、フィールドから理論を求めることの必要性を否定する人はいないと思う。しかし、そのようなことを真剣に行う人を研究者と認めないという人は多くいると思われる。なぜなら、いくら頑張っても研究計画法上に問題を残すからである。従来 of 行動科学のみが研究法であるという立場の人々からみれば、物語のような話に聞こえるのであろう。体育学会も来年 50 回の記念大会を迎えようとしている。新しい時代の体育心理学、スポーツ心理学に「理論をフィールドに」、「フィールドに理論」という立場を位置づけることが必要であると感じているのは私だけではないと思う。

〈上記の原稿に、岡澤祥訓氏に加筆をお願いしました。〉

この文章を書いてから十数年の歳月が流れた。スポーツ心理学会ではメンタルトレーニング指導士の認定が行われるようになり、競技スポーツの指導現場に多くのスポーツ心理学を学んだ人が入るようになってきた。学校体育に関して、校内研究会でも体育心理学の研究

成果を用いた授業実践が多く発表されるようになってきた。このように「理論をフィールドに」はかなり進んだと思う。しかし、「フィールドから理論を」の進みは、それに比べると遅いと感じる。フィールドから理論化された研究が多く掲載された学会誌を読める日が早く来てほしいと思う。

出典；体育心理学専門分科会会報第 10 号(通巻 38 号) 特別寄稿 理論をフィールドに、フィールドに理論を

体育心理学専門分科会の運営の一端を担うことになって3年が過ぎようとしている。この間に、専門分科会は発足から50有余年が経ち、次の時代へと舵をとった。理事会（平成21年第60回大会 猪俣公宏前会長）において、「50年記念誌」発刊事業が提案、承認され、平成23年度理事会（中込四郎会長）の企画委員会で大枠の検討をおこなった。そこでは、これまでに発行されている「会報」や体育心理学に関連した既発表の原稿を元にして執筆者に加筆修正をお願いし、新たに原稿を書いて頂く労を可能な限り省くことで、本誌の編集にご協力を頂くことになった。そして、編集作業を事務局が担当することになった。先輩諸氏から叱咤されながら、とにかく出来ることからさせて頂いた。

編集作業を進める過程で、専門分科会の過去の資料が散逸し、記録に残っていないものが多くあった。また、専門分科会の黎明期・揺籃期に関わった諸先輩方の多くが、ご高齢になられたことを実感した。ただ、第7期事務局（筑波大）で、これまで発刊された「会報」を記録用として製本してあったことが救いであった。最近では、コンピュータの普及で編集作業の効率化が進み、随分と手間が省けるようになった。編集は出来る限り「デジタル化」を図った。

しかし、専門分科会の主体である体育心理学に関わる研究やその他の活動は、「デジタル」ではいけない部分が多いことも編集作業を通して実感した。専門分科会は50有余年を経て、相当の「知的財産」があるにも拘わらず、それらは事務局の段ボール箱に仕舞われている。事務局を引き受けるにあたり、それらの資料を目にして、衄怩たる思いがした。そして、専門分科会の「アーカイブズ」を構築し設置する必要性を感じた。「アーカイブズ」には、体育心理学に関わる「研究」や「教育」、そして「啓蒙・普及」などの活動の資料（研究誌や学会抄録はもちろん、学会のポスターや研究会・研修会の案内や資料、会議のメモなど）が、すべて整理されていて「いつでも・誰でも」手に取ってみることができる。そのような「知的財産」の構築と開示が、次代に残す仕事だと思う。

しかし、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくのごとし」と、方丈記に書かれているように、実際は無常である。変化には、「不可逆的变化、可逆的变化、循環的变化、偶発的变化」の四つがあるといわれる。専門分科会の活動においては、過去の歴史を見据えつつ、可逆的に変化していくものだと思う。その変化のときに、本誌が役立てばこれ以上の幸せはない。本誌は50有余年の体育心理学専門分科会の活動のすべてを網羅している訳でなく、多くの部分が歴史に埋もれていることも事実である。その意味で「未完」の記念誌である。

最後に、本誌の編集にあたって大変な作業を一手に引き受けてくれた事務局の菅生貴之先生、手塚洋介先生、安田友紀さんに感謝します。また、原稿を執筆頂いた先生方にも厚くお礼を申し上げます。

## 【編集委員会】

委員長：荒木雅信

委員：中込四郎，阿江美恵子，石井源信，磯貝浩久，伊藤豊彦，岡澤祥訓，菅生貴之，  
関矢寛史，西田 保，橋本公雄，山本裕二，手塚洋介（事務局），安田友紀（事務局）

## 体育心理学専門分科会 50 年記念誌

---

平成 24 年 3 月 30 日 発行

発行：中込四郎

発行所：社団法人日本体育学会 体育心理学専門分科会

〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1

大阪体育大学スポーツ教育学科

スポーツ心理・カウンセリングコース

荒木研究室

体育心理学専門分科会 事務局

電話：072(453)8876

FAX：072(453)9007

E-mail：araki@ouhs.ac.jp

印刷：株式会社 RPSセンター

---









# 50 体育心理学専門分科会 年記念誌

体育心理学専門分科会50年の回顧、そして今後の展望

社団法人 日本体育学会 体育心理学専門分科会





